マルクスの勞働價値説は、資本主義社會が搾取原則の支配するところなるを示すには、無二の精鋭なる武具であつた。其れが餘りに力强いものである爲めに、甚だ多くの人は、敵の本能寺にあることを見出す能はず、此の前哨を以つて、敵の本營なりと考へ誤り、其攻擊其排擊の主力を其處に集中した。元より若干の取除けはある。顯著なる例は、オッペンハイマーである。『マルクス社會學説の根本法則』一九〇三年刊　また英國現代の大古典學者たるリンドゼー氏である。『カール・マルクスの資本論』一九二五年。此著は啓蒙的の小册子であるけれども、マルクス評論中たしかに出色の作である。　多數の人々は、カウツキーの、而してまたベルンシュタインの警告あるにも拘らず、マルクス勞働價値論の排擊に沒頭沒身してゐる。而して、其殆んど何れもが、滿身の創痍を被つて衆人嘲笑の間に、擊退せられた。擊退される筈である。敵の主力は遙か別の處にあるから。

三　生産に先行する分配

併し乍ら、私は、茲に一の他の問題の横つてゐることを見る。搾取社會としての資本主義社會を暴露するに甚だ役立つた正統經濟學の費用原則は、マルクスをして、餘剰の生産を十分に明かならしむるを得たと同時に、其れを生産の領域に閉ぢ込め過ぎしめた。費用原則を拉へたマルクスは、逆まに費用原則に拉へられた。資本論第一卷對第三卷の矛盾云々の觀察は餘りにも淺薄である。しかし、其樣な淺薄な觀察を可能ならしめたものは、費用原則の『物神崇拜敎』の致すところではなからうか？

マルクスはいふ。『いはゆる分配なるものを後生大事に取扱ひ主力點を其上に置くことは誤りである。消費手段の其時々の分配は生産諸條件其れ自らの分配の結果たるにすぎないものである。生産諸條件の分配は、また、生産方法の一特徵である。例。資本主義的生産方法は次ぎのことの上に立脚する。物的生産諸條件は、資本所有並に土地所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ、他方、大衆は、單に、人的生産條件たる勞働力の所有者たるにすぎざること、これである。生産の諸要素が斯くの如く分配されてあれば、今日の如き消費手段の分配は、當然其から生じ來る。――然るに――物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば、今日のとは異る消費手段の分配は、同じく、當然に其れから生じ來る。俗流社會主義（其の中でもデモクラシーの一部）は、俗流經濟學から、分配を生

産方法から引離して獨立的に考察し、取扱ふことを受け繼ぎ、從つて、社會主義を以つて、主として、分配を中心として回轉するものと説く。眞實の關係が、すでに、久しく明かにせられてゐる今日何故あつて、再び跡戻りをするのか？』（『ノイエ・ツアイト』第九年度第一卷第十八册五六八頁。（所謂『ゴタ綱領批判』）

『共産宣言』以來、マルクスもエンゲルスも、生産――而して第二次に交換――のみを經濟生活の本體と見ることは、誰人も一樣に知るところである。此點から見て改造六月（昭和四年）號に掲げられた大熊信行教授の論文は、マルクスに對する理解十分ならざるやの嫌あることを免れまい。乍去、我々が耳にたこの生ずるほど屢々説き聞かされるマルキシストの此點に關する力説は、私を以て見れば、却つて、マルクスの眞意を歪めたものではあるまいかと思はれる。マルクスは、右の引用句にいとも明瞭に、生産諸條件の生産先行的分配を説いてゐるではないか。唯だ彼れの俗流社會主義に――而して、俗流經濟學に――責むるところは、『消費手段の其時々の分配』を後生大事に取扱ひ、其れが『生産諸條件其れ自らの分配の結果たること』を悟らないことこれである。元より彼は、此の『生産諸條件の分配』を以つて、『生産方法の一特徴である』としてゐる。從つて輕卒にこれを見れば、すべては『生産』に歸着するが如く考へられよう。乍去『物的生産諸條件は資本所有並に土地所有の形態の下に、非勞働者に配分せられ』『生産の諸要素が、斯くの如く分配されてあれば』『今日の如き消費手段の分配は、當然其れから生じ來る』といひ、『物的生産諸條件が、勞働者ら自らの團體的所有であるなれば』『今日のとは異る消費手段の分配は、同じく當然に其れから生じ來る』と、一の疑似曖昧を容れざる斷言を爲してゐるではないか。大熊教授の『配分の原理』なるものは、私は未だ十分にこれを究めず、また理解し得ないものであるが、其れが生産先行的なる生産諸條件――諸要素――の分配を意味するものならば、マルクスは明かにこれを認めるものであり、大熊教授が『配分』と嚴密に區別すべしと主張する『分配』がマルクスのいふ『消費手段の其時々の分配』に當るものならば、教授の嚴密區別論は、此點に於いてはマルクスの贊同するところであらう。

此考察は、若干の吟味を重ぬるときは、同樣にリカルドにも適用し得られるかの如くである。いふまでもなく、リカルドは、『分配』を以つて經濟學の主問題としたことは、其『諸原理』の序文に明かに示されてゐるところである。『土地の生産物――勞働と機械と資本との結合投下に由て、土地の表面より取得らるゝ一切のものは、共同社會の三階級の間に分

割せられる。……併し乍ら、社會發達の異なる段階に於ては、地代、利潤及び賃銀なる名稱の下に、是等諸階級の各個に割り當てらるべき土地全產物の比例も、亦た大に異なるであらう。……此分配を左右する諸法則を決定することこれが經濟學の主要問題たるものである」（小泉教授邦譯本三頁。堀教授同上一頁。）併し乍ら、カッセル教授のいとも明快に示した如く、リカルドは、先づ地代を生產費以外に驅逐し、利潤を勞銀に還元することによつて、其費用原則を勞働原則に歸一したのである。從つて、此立場より見れば、主要問題たる分配は三階級間の分割としては殘るに相違ないが、『此分配を左右する諸法則の決定』は、勞働原則――費用原則――の一の運用に外ならないこととなり、其れが經濟學の主要問題たる實は、殆んど意味を失つて仕舞つたと云はねばならぬのではないか。

唯茲に、勞賃と平均利潤との問題が殘る。而も、其れは、リカルドにあつて問題たりしのみではない、マルクスにあつても、一の重要なる問題であつたのである。否、堀教授は斷言していふ。『彼（マルクス）は、リカルドの學説を十分に理解し、しかも、正當なる論理を以て、之を發展せしめたといふ特徴を有つてゐる。これ、私が、彼れを以つて勞働價値論の完成者なりとなす所以である。而して、彼れの功績の中、最も大なるものは、勞働價値より生產價格への「轉化」を論じて、リカルドウを、眞に惱ました所の難點を解決したることこれである、かくの如く、マルクスに至るまでのリカルドウの勞働價値論は、或は通俗化せられ、或は變形せられ、或は否定せられつゝ、可なり數奇なる運命を辿り來つたのであるが、惟ふにそれは、リカルドウ自身が、十分に取除き得ざりし『平均利潤』てふ躓き石の存在に基因するものであつた。……最後に、この石の周圍を掘つて、之を沈下せしむることによつて……この難所を平坦ならしむることを主張せる者（マルクス）が勝を制したのである』（『リカルドウの價値論及び其の批判史』五七七――五七八頁。因に云ふ、堀教授の此書は、邦譯された經濟學説批判の書（マルクスについてのものまでも含めて）中、私が今日まで寓目し得た限りに於いて嶄然一頭地を拔くもので、『研究』なる甚だ濫用せられた語は、此書に就いては、一の混淆物を交へすこれを適用し得るものと信ずる。但し所論の內容については、私に異存なきわけではない。）

『平均利潤』の謎の解答は、生產の問題ではない、分配の問題である。マルクスが、リカルドを惱ました此問題を解答したことは、たしかに、大なる業績であつた、乍併、其れと同時に『消費手段の其時々の分配』を、經濟學の領域から驅逐すべしとの主張は、其の努力の中に、其影を著しく薄くしたことは否み難い。『資本論』第一卷對第三卷矛盾云々の淺薄な觀察

は、其處に惠まれた沃土を見出した。

四　餘剰と生産及流通

費用原則の上に立つ正統經濟學は、決して、餘剰の存在を無視したものではない。シュムペーター氏が、其昔し、『交換原則』と『餘剰原則』とを對立せしめた立論は、若き日に於けるシュムペーター其人の如何に、其時すでに優秀なる理論學者たりしかを優に示した所以であらうと思ふ。カウツキーはいふ『マルクスは、餘剰價値の本體を發見したものではない。アダム・スミス以來、誰人も眞面目に、經濟學を學んだ人ならば、餘剰價値の存在することを知つてゐる。乍去、マルクスは、餘剰價値は、其れが生産せられるとき、すでに成立するものなるを示した第一人者である。此れによつて、餘剰價値は、資本主義的生産方法を理解すべき鍵となるを得たのである』（『ノイエ・ツアイト』一八八六年第五五頁。）

餘剰價値の生ずる源は、生産先行的なる生産諸條件の配分の中にすでに存してゐる。其れが、生産せられるとき、すでに成立する所以は『勞働力の賣買』てふ交換過程によつて説明される。エンゲルスは『資本論』第二卷の序中にいふ『ラヴオアシエーがブリーストレー及びシエーレに於ける關係は、マルクスの餘剰價値理論の諸先輩に於ける關係である。我らが今餘剰價値と名くる生産物價値部分の存在は、マルクス以前すでに久しく確認されてゐた。同樣に、其れが何から成立つか、卽ち其れは、勞働の生産物から成立ち、其れに對しては、其收得者は、何等の對價を支拂はぬものであることも大なり小なりの明瞭さを以て主張されてゐたのである。……彼れ（マルクス）は、貨幣の資本への轉化を研究し、而して、其れは、勞働力の賣買に存することを證明した。彼は、玆に、勞働力卽ち價値創造的性能を、勞働に代位することによつて、リカルド學派を斃した困難、卽ち資本と勞働との相互交換をリカルドの勞働による價値決定の法則と一致せしむるの不可能を一擧にして解決したのである。……一の價値を有するものは勞働ではない。……商品として買はれ而して賣られるものは、勞働ではなく、勞働力である』（序の二一―二二頁。）

乍併、マルクスの此發見は、割合に永い時間を要した後、完成したものであつて、其以前には、此點についての彼の説は、甚だ不徹底のものであつたことは、周知の事實である（私が曾て河上博士

の『勞賃と資本』の第一邦譯に對して妄言を敢てしたのは、此順末の重要性を明かにしたい爲めであつた。宰に河上博士は、拙言を悉く容れて、其邦譯を改められた。同順すれば、其は一昔前のこととなつた。

他方に於いて、リカルドは、必ずしも、此點について、全く何事もなさなかつたものでないことは、堀教授の力作これを詳細に論究して、殆んど遺憾ない。此一事だけを以てしても、私は堀教授の純一無雜の研究者としての態度に深厚なる敬意を捧げざるを得ない。乍去、マルクスの透明は、たしかに、前人未踏の分野を開拓したものであつて、堀教授の詳論を以てしても、リカルドにまつはる陰影は、これを一掃することは出來ない。

併し、茲に、私は公平無私なる諸研究者に一考を煩したい。賣られ而て買はれるものは、勞働にあらず、勞働力であるといふことは、生産過程に於ける問題ではない。其れは交換(賣買)の問題である。無論其の賣買は、資本主義的生産方法の一特徴たるに相違ない、しかし、其特徴を成立せしめたものは、生産に先行する生産諸條件の分配關係これである。

かくてエンゲルスが、リカルドが之が釋き能はずして斃れたと云ふ二つの難問の解答は、何れも、生産方法の上に於いて與へられず、交換及分配過程の中に於いて與へられたのである。二つの難問とは、(一)『生きた勞働の一定量の價値たる勞賃は、常に生きた勞働の此の量によつて生産せられる生産物の價値より小である』(二)『同一額の資本は其適用する生きた勞働が如何に多くとも、少くとも、同一時間には、平均的に同一の利潤を生産する』これである。(一)は勞働力の賣買を以て　(二)は平均利潤率の謎の解答を以つて、解かれた。二つの解答、其何れもが生産方法の上に於いては、與へられてないのである。解答の場面は、明かに流通行程の上に置かれてある。

餘剰は、生産方法の對象たるのみに止まらない。生産先行的なる分配過程の内に、すでに孕まれて居り、生産直前に於ける、勞働力の賣買てふ交換過程の中に、はぐくまれてゐる。其生れ出づるは、資本主義的生産過程の中にあるには相違ないが、生れたものは、其瞬間に成立したものではない。出生は、唯一つの『ツギ*シエン・フォアガング』である。而して、人は木の股からは生れず。

商品の解剖を以つて、資本主義的生産の考察を始めるは、價格經濟學に取つては、而して、

殊に費用原則を固守する限りは、正しい。併し、其れは、唯一の出立點ではない。

五　資本主義社會に於ける餘剰と所得

資本主義社會の實體を暴露するに、費用原則は役立つ。甚だ役立つ。併し乍ら、然る限り、費用原則と利用原則との葛藤から、脱出することは出來ない。ボエーム・バヴエルク教授の研究室へ學問的スパイとして這入り込んだブバーリンが、利喰經濟學に向けた嘲笑は、唯二三十冊の本を讀んで、價値論を知り得たりとする人々の耳には痛快に響く。しかし乍ら費用對利用原則の『クラデラッチ』は、其の爲めに、些も釋け能ふものではない。

ロバート・リーフマンが出世作たる『主觀的評價よりする價格の成立』は不遇の作であつた。しかし、私は其中に一の大きなものあるを見出した。氏の其自傳に於ける私に對する感謝は、私は心から喜んでこれを拜受する。餘剰原則の確認は、即ち其れである。其れは、エンゲルスの言葉を借りれば、一のラヴォアシエー的回轉であつた。氏の其後の作については、今言及せず。

資本主義社會に分配の問題の存するは、否、抑も我が學に分配の問題の存し、深き洞察者リカルドが、其れを經濟學の主要問題――私は、あへて中心問題と云ふ――としたのは、餘剰原則こそ、資本主義社會を支配する根本原則であるからである。費用原則でもない、利用原則でもない。だから、リカルドは、分配の問題は、其の勞働價値說と無關係に說き得るとさへ斷言したのである。曰く、『これを要するに地代勞賃並に利潤の諸大問題は、全生產物が、地主、資本主、及勞働者の間に分割せらるゝ比例によつて說明せられねばならぬ。而して、此比例は價値の理論と、本質的に結び付いてゐないものである』（マカロックへの書簡集七二頁）此一節こそトウガン・バラノフスキーが其の無價値的分配論、權力分配論の出立點としたものである。（餘後段參照）唯だリーフマンの如く――而して私が長く雷同し來つた如くに――此餘剰を、利用と費用との較差などと見てゐては、發見以上一歩も進出することは出來ぬ。發見せられた餘剰原則は、更らに尋究せられねばならぬ。而して其の眞の所在が見究られねばならぬ。其眞の見究めはこれを資本主義社會に於る共產原則の展開にまで、導くものでなければならぬ。

資本主義社會は、所得獲得社會である。何となれば、それは餘剰の分配によつて活き、而して發展して行く社會であるから。餘剰のなきところ、餘剰の分配のなきところ、所得の

問題は存し得ぬ。單なる『消費手段の其時々の分配』は、決して適當の意味に於て云ふ分配の問題を提供するものではない。ジエ・エー・ホブソンが、發展なき假定社會には分配の問題なしと斷言せるは、今猶私の耳朶に鏘々たる響を殘してゐる。（『産業組織』第一版（一九一〇年刊）に於いて、猶一九二七年の其第二版をも見よ。一九二六年私は倫敦に於て氏と會することを樂としてゐた。『エコノミスト』の舊主筆ハースト氏は私の意を諒として氏を招かれた。不幸にして、氏は病ありて來會せられず、私は其の夫人と長時會談した。夫人亦一個の經濟學者である。私は、ホブソン氏に憬れる所以を述べた。夫人卽ち諄々として、其人の持説を布演して敎へられた。茲に一言して深き敬仰の意を新にしておく。）費用原則や利用原則の立場に立つ限り、其の經濟理論體系に、眞の分配の問題――單なる比例にあらざる――の全く存せざることは、其原則の假定の上に立つ發展なき産業社會に分配の事實の存し得ざるに同じ。マルクスが、此理を道破したことは、其一事だけを以てして千古の卓見なりと云はざるを得ぬ。マルクスに少しもかゝはることなく、同じ洞察に到達したホブソン氏を私が現代英國理論家の第一位（ホートレー、ビグー兩氏と並べて而して、ケーンズ氏などは與らず、）に置く所以は、其處にある。

餘剩の原則の上に立つ資本主義社會にして、始めて眞の分配の問題は起る。其れは、『消費手段の其時々の分配』と斷然混同すべきものではない。資本主義社會は、餘剩の生産・交換・分配の社會である。言を換へて云へば所得中心の社會である。階級の本質は、此所得の性質に存する、其の多寡に存するのではない。（其昔し河津、河田其他諸博士に對して私の論じたところ、社會政策學會論叢にかゝげあり。）所得の性質とは、卽ち、マルクスの所謂『生産方法』に對向するものである。其れを名けて、眞の意味に於ける『分配』といふのである。資本主義社會にあつては、欲望充足の行爲は、決して、經濟行爲ではない。欲望充足の準備行爲、準備行爲の中所得の配分（大熊敎授の語を借用すれば）にかゝはる商量・適合の計慮的合理行爲こそ、經濟行爲である。マルクスの口吻を單に摸して、經濟行爲は生産行爲なりとするはマルクスの意を裏切るものであつて、而して資本主義理論としては、沒理に墮するものである。言葉の整頓は思想の混迷を掩ふことは出來ぬ。所得にかゝはる商量適合の計慮的合理行爲は、略して、これを所得行爲（アーニング、アクチヴキチース）と名け得る。其れが卽ち經濟行爲の全體である。（私の『敎科書』に於ける記述は、此意味を不十分にしか述べてゐない。）

資本主義社會にあつては、物は保持せられず、所有せられる。所有も亦た、『エルヴエルブ』の故を以て、所得行爲であり、從つて經濟行爲である。勞働も亦『エルヴエルブ』（曾て當時新進の某博士の經濟卽所有云々の論に接して私信を以て『エルヴエルブ』の考察缺く可からずと開陳した。答書に曰く『私は「營利」を所有と同樣に考へたくはありません』と。此の『博士』は、『エルヴエルブ』てふ、デュクセンシエッツ以來の成語の其の格段の意味をすら、知らなかつたのである。私はついに對論を斷念した。事は、數年の昔に屬する。今は、忘れられたであらう？）たるの故を以て、經濟行爲となる。否、否、貨幣も亦『エルヴエルブ』

の故を以て、經濟圏内に入り來る。（左右田博士の貨幣概念文化價値の説に、私が如何にしても、追從する能はざりしは、これが爲めである。私は問ふた。何故に、同じ樣に、所得概念文化價値を主張し得ざるやと。アモン氏も亦問ふた。何故に資本概念文化價値を主張し得ざるやと。これはアモン氏の處女評論であつた。私は其時すでに同氏の輕視するを許さゞる理論家たるを知つた。今や我々の質問は、永しなへに、其答を得る機會なくして已む。）經濟行爲は、欲望充足行爲にあらず、欲望の經濟的充足行爲なりと言つた其昔しのオッペンハイマー氏は、此消息を半ば解して已んだものであらう。

六　價格と所得。二つの流れ

價格を以て理論經濟學の中心問題とするは、費用原則又は利用原則のみの上に立つプルヂオア學としては、正しい。人間の厚生經濟學としては、唯一つの便法たるにすぎない。マルクスは町人の經濟學を以て町人經濟社會の實體を痛快に暴露した。然し、後には、其便法の爲めに甚しい不便に遭遇した。餘剰原則の上に立ち、而して、資本的生産方法の下に、共産原則を展開しつゝある資本主義社會の實體は、かくして唯其一つの姿を現はしたにすぎない。

我々は所得を以て生きて行く。我資本主義社會は、生産に先行し、更らに生産諸條件の分配に先行するこの所得の分配によりて、維持せられ而して發展して行く。價格は此所得を決定する一の道具たるのみ。道具の吟味は肝要である。然し、其れは必竟道具の吟味たるに止る。其れ以上の何ものでもない。我々の經濟的存在に取つて、而て其を通して、我〻の眞の生存に取つて、意味を有つものは、獨り所得である。價格ではない。價格は意味を有つものゝ、其意味を測るメートルにすぎない。所有も、貨幣も、我々の經濟生活に取つて眞の意味を有つものではない。其れは、所得の形成上の現象態たるに外ならない。

だから、資本主義社會の止揚は、所得の止揚でなければならない。所得の存在にして、今日の儘なる限り、資本主義社會は止揚せられ能はぬ。從つて、資本主義社會の眞の檢討は所得の檢討であらねばならぬ。商品の解剖・價格の吟味は、其れが所得の檢討に役立つ限りに於てのみ、意味を有つ。其以外には、一の意味をも有つものではない。リカルドが或は躓いたと云はれ、或は斃れたと云はれるところの難問を釋いたマルクスは、其れをリカルドが提出した姿に於てゞなく、所得の生産・交換・分配の問題に轉化するによつて、成し遂げたことは、我々をして、反省せしむ可きではないか。

所得は貨幣の一定額を以つて言表はされる。しかし、其れは云ふまでもなく、名目所得である。眞の所得は、其貨幣額の購ひ得るところのものである。發展なき社會――人口數、需要、生産方法に異動なき――を假定すれば、一定時期に於ける所得とは、消費の爲めに生産せられ、而して其一定期間に於いて、消費者に引渡される一切の貨物及び勤勞の總量であらう。但し其外に、物的生産要素の消耗補塡に當るものは生産せられなければならない。此補塡を差引いた殘餘について云へば、生産＝所得＝消費となる。而して、貨幣の流通額は、此の生産額＝所得額＝消費額と正確に一致するであらう。一社會の眞の所得は消費者の手に引渡された貨物及勤勞の總量であると云ふことは、貨幣所得の受取者が消費の爲めに購つた貨物及勤勞の總量であると云ふことと同一となる。更らに詳しく云へば、勞賃、地代、利潤等の形に於いて支拂はれた貨幣所得の總和は、消費用の諸貨物及び勤勞を購ふに費される。從つて、其處には、貯蓄と云ふことは起らぬ、起り得ぬ、また起る必要もない。從つて眞の意味に於ける所得は存せぬ。眞の意味に於ける分配の問題は見出し能はぬ。アダム・スミスが、需要＝供給の均衡を破る除外例として認めた（一）技術及需要種類の變化（二）市場の景氣變動の二つは、發展なき經濟社會の前提によつて、之を考慮の外に置き得るとしたのは、理論的研究として許されたことである。（カツセル『理論經濟學の出立點』前掲書六七〇頁。）

現實の資本主義社會は、無論これとは異る。（シユムペーター『經濟發展の理論』第一版及第二版共に）其處には、人口の增加がある。消費程度の向上がある、生産技術の進歩と變遷がある。增加する人口の需要に應ずる爲めには、より多くの生産物が生産せられなければならぬ。即ち社會の生産は、其すべてを通じて、生産手段の增加を要求する。增加する人口の求めに應じてより多くの商品が賣られ得る爲めには、其れに先つて生産行程の各階段に於いて、より多くの資本、より多くの勞働が具へられてあらねばならぬ。其れを爲すの道は唯一つあるのみ、社會の貨幣所得の全額を産業行程の終末に於いて、消費用の完製品を購ふに用ひ盡さず、其或部分を割いて、生産の各部面に亘りて、より多くの生産設備、より多くの機械等を作る爲めに、勞働者に支拂ふ可く充用せられねばならぬ。また、此の增加した資本を各種の生産行程に於いて、原料の加工精製に充用せねばならぬ。かくて、消費者に賣らるべき商品の量は、より大なるものとせられなければならぬ。

發展なき社會に於いては、社會に流通する貨幣の全額は生産行程の各段階に於いて、生

産行爲を活かし、動かすことによつて、貨物の消費への進行を促しつゝ、全行程を通じて流通して行つて、其終末に及んで、生産品の一切を購ふに充てられ終る。支拂はれたる貨幣の全體は、生産せられ而して消費せらるゝ商品の全體と全く一致する。販賣者が受取りたる貨幣所得の全部は、再び同一の行程を繰返すことに當てらる。かくて、限りなき循環が繼續する。現實の資本主義社會に於いては、左樣ではない。其受取らるゝ貨幣所得の或ものは、生産行程の進行中諸々の關所に喰ひ止められる。喰止められた貨幣所得は、其場所に於いて、從前の生産活動を維持するに要するより、より以上に、生産を促進する用に充てられるのである。だから、此の二つの流れを、マルクス流に表示して見れば、發展なき社會に於いては、

$$G-W-G$$

であるが、發展する資本主義社會に於いては、

$$G-W-G'$$
$$(G'=G+\Delta G)$$

である。

七　發展する資本主義社會に於ける貨幣所得の流れ

發展する資本主義社會に於ける最終の購買者(A)――最終の貨幣所得收得者――は、發展なき社會に於ける同一假定の場合に比しては、より少き貨幣所得しか收得しない。從つて、彼れは其次の貨幣所得收得者(B)に對しても、より少き貨幣額をしか支拂ひ得ない。(B)はまた、其次の貨幣所得收得者(C)に對しても、同樣の地位に立つ。かくて、全産業行程に亘つて、より少き貨幣所得の額しか流通せぬこととなる。これは最終段に於ける商品の消費量の減少の作用である、其減少額は、卽ち貯蓄せられたと云はれる。貯蓄せられたとは、貨幣所得の促進作用を全く停止することの謂ではない。其れは、消費者の手に商品の移り行く階段に於いて、商品に對する需要に對して此の促進作用を及ぼすことを停止するの謂に外ならぬ。（パレト『マヌアーレ』（一九〇九年刊）第九章四三八頁以下。佛譯では、四五九頁以下。バンフキールド『産業組織四講』（一八四五年）。ホブソン『産業組織』一九二七年改訂版三九頁以下。）

消費者の商品に對する需要額の減少は、生産全行程の進行中、何れかの一又は數階段に於いて、誰人かゞこれを餘儀なからしめたものである。其れは、需要の全體を減少するのではない、最終階段に於ける商品需要を減少するのである。此の減少は、其の先行過程中

の或る一又は數階段に於ける需要の增加となつて現はれてゐるものである。需要全體として見れば減＝增、其間何等の差違はないのである。唯だ價格經濟學に於いては、最終階段に於ける商品需要のみを需要其ものと見ることに限るにより、一般に此れを需要の減少と稱するにすぎない。マーシアルは消費者需要と『トレーダース・デマンド』とを區別した。其れは、價格經濟學の中にあつては、實に卓越した見解と云はねばならぬ。

最終段の商品需要の促進から取り去られた貨幣所得は、生産行程の何れかの階段に在つて、依然として其促進作用を營む。其れはひとり、或る與へられた商品其ものゝ生産行程の上に限られない、幾多の旁系行程へも押し進み行く。諸價格相關の理は、近頃カッセルの力を置いて説くところである。諸所得相關の理に至つては、未だ斯くの如き力説者を見出し得ない。（諸價格相關の理については、私の『教科書』中の其題名の節を見よ。）

發展なき社會にあつては、資本に向けられる生産活動は、唯だ其の消耗を補塡することに止る。（マルクスの『不變資本』）これは、決して貯蓄ではない。發展する經濟社會に於いては、生産活動は、より多くの資本を作り出すことに向けられる。其れは卽ち貯蓄である。（ロバート・リーフマン『貯蓄の理論』シュモラー年報掲載）現代の流通社會にあつては、消費は所得を以て消費品を購ふことを意味する。貯蓄は、所得を以て、生産財を購ふことを意味する。消費は商品の生産を促し、貯蓄は資本の生産を促す。消費の節約とは需要の節約ではない。唯其の充用階段の轉化を意味する。乍去、所得は如何なる場合にも之れを貯蓄することによりてより多くの用を爲し得るものと考へてはならぬ。發展する社會は、これなき社會に比して、貯蓄の彈力性を著しく多く有つには相違ない。然し其れは無限なるものでもなく、また如何なる場合にも用あるものでもない。其處に必ず限度あり、其處に必ず選擇あるを要する。大熊教授の所謂『配分の原理』なるものが此事を意味するならば、其れは正しい。マルクスの所謂『社會的必要勞働時間』の考へ方は、茲に甚だ深き洞察を與へる。社會的に必要な貯蓄のみが、眞の貯蓄である。『社會的に必要』といふことが曖昧なりと難ずる人は、先づマルクスについて、『社會的に必要な勞働時間』の曖昧なりや否やを吟味して見なくてはならない。社會的に必要ならざる貯蓄は、厚生を害する。其れと同樣に、社會的に必要な貯蓄を減ずる消費も亦た厚生を害する。何となれば、兩者何れも、社會の生産力を浪費するものであるから。前者を名けて、過超貯蓄と云ひ、後者を名つけて過超消費と云ふ。而てまた同樣に、過少貯蓄、過少

消費も、厚生を害する。何となれば、其れは、社會の生産力を萎縮せしむるものであるから、現代の産業社會は一定期間の所得の總額以上を消費し能はざるは言ふまでもない。從つて、過超消費とは、所得以上を消費することを意味するものではない。生産力の維持と增進とに充てらるべきものを直ちに消費することの謂である。生産力の維持と增進とに社會的に必要なる貯蓄と、同じく生産力の維持と增進とに社會的に必要なる消費との間には、其時々に應じた一の正しい配分の此例が存する。此比例を保つことが眞の均衡である。(所謂エキリーブル・エコノミック、需要と供給との均衡は其れではない)。

此の均衡を破るものは、生産に先行する生産諸條件の分配關係の中にも存する。其れと共に、生産行程の進行中に於ける貯蓄と消費との相互關係の間にも存する。更らにまた、マルクスがこれを大事さうに取扱ふことを嘲つた『消費手段の其時々の分配』關係の間にも存する。言葉を換へて云へば、生産方法の特徴の中にも存するし、勞働力賣買の交換過程の中に存するし、更らにまた、諸々の生産關與者と諸々の生産非關與者との間にも存する。而してまた、所得收得者と所得徴發者たる國家、自治體、其他の團體との間にも存する。『餘剰價値鬪爭』は、元より、資本主義社會にあつては、先づ第一に、利潤所得者と雇傭勞賃所得者との間に行はれる。これは、誰人の眼にも明なるところである。しかし乍ら、厚生經濟の立場から見れば、社會的に必要なる所得と、社會的に必要ならざる所得――前者を『値する所得』、後者を『値せざる所得』と名けよう――との間に於ける鬪爭こそ、眞の厚生的意義を有つものであつて、雇主と雇傭勞働者との階級鬪爭は、其れが、此意味の眞の厚生鬪爭であるが故に、重大なる厚生的意義を有つものとなるのである。

國家、自治體、其他の公私の團體の强制的竝びに任意的徴發は、所得の正しい分配を、或は助長し、或は阻碍する。また、國家、自治體の公企業も、同樣の作用を有する。租税公課を以て、單に國家、自治體の消費の爲めの徴發と見るは、專制國家時代についても、全く誤つた觀察である。少しでも、社會政策的に目ざめた國家、自治體については、其の冒瀆は更らに甚しい。私は自治團體の公企業については、久しい以前から、此説を持して、所謂營造物手數料論に對抗しつゝあつた。辛ひに關博士は、當時に於いて私の論に非とせられたところを近頃に至つて、翻へされた。(市營事業に關する同博士の論文、東京市政調査會發行。)

今日に於いて、所得の厚生的分配の立場から見れば、國家、自治體の租税、公課、竝に、其の諸々の公企業及事業、社會政策的の諸々の事業及び施設は、幾多の過誤あるにも拘らず、これ

を、他の生産非關與者の所得、並びに生産關與者の不必要貯蓄及び消費――是らを一括して、不勞所得と名けてもいい。『値せざる所得』『ウンフェルヂーンテス・アインコメン』の意に於て――に比する時は、正しき均衡の持ち來しに著しく役立つことは、是を拒むことは出來ない。租稅論を經濟原理と並べて説くことを忘れなかつたアダム・スミスとリカルドとは、學問の體系に拘泥するものからは、非難されよう。現代資本主義社會の實相を捉らへる點に於いては、たしかに透徹した取扱を爲したものである。財政學を國家の家計學に追ひ落した獨逸の學問體系は、これに比すれば、遙かなる退歩を示すものである。（私は過ぐる二十八年間、唯一回財政學の講義をしたことがある。それは明治四十一年堀江教授外遊中の代講であつた。其時此考へを始めて述べて見た。しかし、一人の贊成者をも見出さなかつた。追記。最近ロッタ先生の大著『財政學』の第二版第一分冊來る。ついて見るに、先生は、財政學を以つて、『公共團體の家計を研究するものなり』と定義して居られる。よつて、私は、本文の意味を略陳して異存を申述べた。先生の答書に曰く、自分も其邊のことは考へつゝあるも、今は姑く通説に從ふと。）

（八）共産原則の展開

現代の資本主義社會に於いて生産せらるゝ餘剰は、何人かの手に所得となつて流れ込む。其の流込みは、交換流通の課程を經過せざるを得ない。所得の流れ込みは、これを分配と名ける。餘剰は生産せられつゝ直ちに流れ込むと見るは費用原則に囚はれすぎた見方である。其の見方は、國家、自治體、其他の團體に流れ込む餘剰を説くことは出來ない。尤も獨逸の財政學はこれらを、派生的所得と見て、親のすねをかぢる遊蕩兒の小使錢と同樣に取扱ふ。公企業の主體を、單なる資本的企業者扱にするときは、勞農露國の社會組織をすら説くことも出來ぬ。

發展なき社會には、眞の分配の問題はない。適當の意味に於ける所得はない。其處には、單なる價格均衡經濟が存するのみである。單なる費用原則が支配するのみである。其處では、『すべてのもの皆其價を受く』るに止る。『其處では、各人へは、其給付に應じて』なる報復原則が行れるに止る。其處では、『與ふるもの』＝『受くるもの』てふ均衡が存するのみである。現代の資本主義社會に於ける經濟的均衡（ワラス及びパレト）とは、其れではない。其れは單なる『ギヴ・エンド・テーキ』ではない。『テーキ・モーア・エンド・ギヴ・モーア』である。アリストテレースの所謂『幾何比例的均等』である。私は、其れを共産原則展開の一場面と見る。

發展なき産業社會、シュムペーターの意味に於ける『靜態經濟』の假定は、餘りに便利であつたが故に、永く我が學を支配した。而して費用原則と利用原則との葛藤は、我々を惱殺

した。利潤なく利子なき經濟社會の假定は論理の玩具としては、甚だ調法であつたであらう、然し畢竟玩具である。獨逸の經濟學が大戰の苦を嘗めて、俄かに景氣變動論に於いて、アメリカに追從し始めたのも、靜態經濟學のチャムピオンたるシュムペーターが、其の『經濟發展の理論』改訂第二版に於いて、全く別人の觀を示し來り、更らにまた、銀行、取引所、金融市場、國際的資本市場から遊離した經濟理論の無用を、俄かに高調力說すべく始めたのも單に玩具に飽いた、成童の目ざめとのみ見るべきではない。

『資本主義社會に於ける共產原則の展開』これが私の暫定的結論である。

『各人よりは、其能力に應じて』而して、『各人へは、其需要に應じて』てふ原則は、餘剩の生產・交換・分配の一切を通じて、一の赤き絲の如くに、現代の資本主義社會の機構の中に、織り込まれてゐる。價格經濟理論の中には、これは現れない。ひとり所得經濟理論の中にのみ現はれる。費用原則と利用原則との葛藤の中には、それは見ることは出來ない。餘剩原則の所在に目ざめ、端的に餘剩の流れ其ものを見るとき、其處にかすかとはいへど――見る人によつては著しく――其姿を現はしてゐる。

（これを、『經濟外力』の問題と見るは、トウガン・バラノフスキーの『社會的分配の理論』の死用である。私が價格決定に於ける權力の關與を力說したのは、今は昔しのこととなつたが、其れはホブソンが近く其の『產業組織』の改訂版第九章に說くが如き意であつた。）

元より、現實の經濟社會は資本主義社會であつて、共產社會ではない。『各人へは、其需要に應じて』とは、元より、『資本主義的有效需要に應じて』の意に於てのみ、其姿を示すにすぎない。乍併、共產社會に於いてといへども、其の『需要』とは、單なる『直接生活資料』『享樂の對象』の其れではなかるべき筈である。共產社會が必要なりとする需要――『これを共產的有效需要』と名づけて差支あるまい――のことである。資本主義社會は、其の階級鬪爭により、其の『勞働協約』により、其の『最低又は生存勞賃』により、其の勞働保險其の失業保險により、而して、又、其の資本主義的國家及公團體の租稅、公課と、而して、諸々の公企業、公營造物により、『餘剩價値鬪爭』（拙著『階級鬪爭とその當事者』第一・二章　經濟學全集第五集二六五――四六三頁）を、漸次に展開せしめつゝある。否、高度資本主義國の或もの（英國）に於いては、其れらに勝つて、其の失業問題に關する惱み、而して他方には、新資本主義國の或もの（日本）に於いては、其人口問題にまつはる惱み、更らに歪められた高度資本主義國の或もの（獨逸）に於いては、生產力增進にかゝる惱み（ゾムバルトの社會政策學會に於ける有名なる報告『資本主義の變遷』（同會論叢第一七五卷一九二九年刊）並にポン氏の『獨逸資本主義の運命』一九二六年刊）並びに、人口增加率支持又は引上げに關する煩悶（佛

蘭西、伊太利、獨逸、但し夫れ〳〵に異なる意味に於いて)而してまた、米國や獨逸に於ける『産業合理化』運動など、などは、何れも資本主義社會に於ける共産原則展開のエピソーデでなくして、何であらうぞ？

私は右の如き考へ方の最初の叙述を試みた『階級闘爭と其當事者』なる拙文へ、第三章として『資本增殖の理法と資本主義の崩壞』なる文を點綴したことを今に至つて甚だ誤れることなりと知る。彼文の如きは、單なる算術遊戯をマルクスとトウガン・バラノフスキーとに模倣した愚擧にすぎない。さりとてゾムバルト教授の『晩期資本主義』の説（前掲報告を見よ）に追從するつもりをも有たぬ。私が、資本主義社會は内在的矛盾を有つとの見解に服し能はざることは依然たるのである。其れと同時に資本主義社會は、其進行に從つて、少く共、ゾムバルトの所謂『高度資本主義』の姿の中に於いて、共産原則の展開――著しきと云ふことを許さるゝならば、左樣言ふ――を、現實に、端的に示めしつゝあることを認めざる能はざるものである。

九　マルクスの解いた二つの難問

マルクスが解いたといはれる二つの難問。其一つは、勞働力の賣買。其の勞働力の賣買は、何故これを賣買と見なければならぬか。ブルヂオア民法でさへも、これを『雇傭』として、特別に取扱ふ。羅馬法の『ロカチオ・コンドクチョ・オペラリス』竝に同く『オペリス』は、明かに、一つの貸借(雇傭及請負)である。勞働力は貸されるのであつて、賣られるのではない。引渡されるものは、マルクスに從つて勞働とするも、勞働力は唯其の使用を引渡さるゝにすぎない。勞働力其ものを引渡すのではない。茲に、勞働組合あり、茲に社會政策あり、茲に社會立法あり、其引渡しを、單なる賣買たらしめざる可く、少くとも努力だけはする。其處に『各人へは其需要に應じて』なる原則は、甚だ微弱ながら、其姿を現はす。しかし、其れは、勘定に入れずともいゝ。資本主義社會其ものゝ支持、其ものゝ發展は、此の共産原則を蹂躙することを斷乎として拒む。相對的餘剰價値の增加は、此の拒否を支持する。無論其支持は、資本主義の爲めにされる。しかし、厚生社會其ものゝ立場から見れば、其れは、共産原則の展開を意味するに外ならぬ。

マルクスの解いたといはれる第二の難問、平均利潤率の謎。平均利潤率の現實的存在は、經驗的には、無論立證されぬ。しかし、假りにこれを許す。これを許すとき、其は、何を意味するか。産業の合理化は必竟するに、此の苦悶を免れんとの努力である。産業の合理化とは其れが技術の上に限られるとするも、猶、『各人へは、其需要に應じて』てふ原則を漸次に展開せしめる外はない。況んや、これを、經濟的に實現せんとすれば、先づ此原則の前に跪くにあらざる限り、其努力は徒勞に歸する。『テーラー主義』のすたれ、『フォルヂズム』の起ることの説明は、かくせざれば與へられぬ。（ゴットル・オチリエンフエルド氏の諸文を見よ。宮田喜代藏教授のマーケト・シユライエリツシユならざる諸文往見すべし。經濟調査聯合會に於ける私の講演『産業の合理化と資本主義の前途』（本書後段所收）あり。言甚だ蕪雜なれども、私の考は正直に述べて置いた。）

一九二五年の夏、私は伯林に於いて、ボン教授の厚意により、一夜を同氏の家に於いて特に私と語る可く來會せられたゾムバルト、ヒルファデング、ユイレンブルグ其他の諸先輩と過した。其夜の會話題は主として、『資本主義の前途』であつた。ゾムバルト氏最も多く語り、私は最も少く語つた。ヒルファデング氏は、切りと私の發言を促した。ボン氏は其後一書として刊行した『獨逸資本主義の運命』の要旨を示して、私の評言を求めた。爾來烏兎匆々四ヶ年の時間を空過し、私は、今漸く、此の一短文を草するを得た。唯だ恐る。其れは、諸先輩の一顧にも値せぬであらうことを。（二九・五・五―二九・六・三）

追記。此文を草し終れる日の朝ブレンタノ先生の『英國經濟發展史』の最終卷（第三卷の下）到着。八十五歳の老翁宿痾の眼病と闘ひつゝ、ついに此大著を完成されたことに驚畏せざるを得ぬ。而して、其總結論は、英國資本主義の運命論と日本、印度、支那其他有色人種の勃興に關する先生の斷案とから成る。私は過る若干月、先生と粗ぼ同一の問題について、商量した結果を、今本文に綴つたものなるを知り尠からざる興味を覺へた。更らに、今朝の新聞紙上、マクドナルド氏が去八日親任式の夜の放送演説に於いて、産業組織の改造と失業問題の解決とを、新内閣の二大事業とする旨聲明したことを知つた。此内閣の成立が英國に於ける『共産原則の展開』に重大なる意義を有つに至るかも知れぬこと、而して、其れが英國資本主義の前途に、些少ならざる關係を有つであらうことを思ひ、私の興味は更らに一段の刺戟を覺へる。（二九・六・十・）

（『改造』昭和四年七月號掲載）

三　失業の必然・不必然と失業對策の可能・不可能

目次

一　社會三大基礎權
二　勞働權の乞索原理
三　封建社會からのインヴェントリー
四　正統學派と自然均衡
五　雇傭社會と失業の發生
六　資本的企業の寄生虫性
七　英國の莫大なる失業と景氣循環相關論
八　産業の振興と産業豫備軍
九　利潤期待場裡に於ける競爭
十　錯綜せる失業原因論
三　失業の必然・不必然と失業對策の可能・不可能

十一　所得の原則的統制
附　記　濱口内閣の緊縮政策と失業及金輸解禁
追　記　井上藏相の失業論

一　社會三大基礎權

勞働權、勞働全收權、生存權てふ三大主張は、嘗つては、學究者のブレーン・ウォークに過ぎなかつた。今日は左樣ではない。世界を支配する三つの大きな原則のスローガンとなつて居る。

私がアントン・メンガーの説を執つて、これら三大社會權主張の要旨を紹介したのは、すでに十數年の昔に屬する。然るに、其後に於ける世界の實際運動と此の運動を支持する思想の展開とは此の三大主張のそれ〳〵を以つて、明かに、若くは暗に、其の旗印とする三つの大きな社會體系の實現を促成した。

英國に於て今政權を握る勞働黨は、明かに勞働權の原則の上に其政綱を立てゝ居る。其の反對極に於いて勞農露國の社會政治的綱領は、要するところ、生存權の原則の上に築かれたものである。無論此の兩國に於ける二原則の展開は、アントン・メンガーの示した歴史的背景に必ずしも拘泥するものでなく、また其の生存權は、彼の主張する社會主義的勞働國』の理想を其儘に認めるものではない。其れと同時に此二つの國に於ける二大原則展開の出立點は、メンガーのいとも明瞭に説き示した史的發展の行程の上に置かれてあることは、これを疑ふことは出來ない。而して更らに第三の一例として私は獨逸其他の社會民主主義諸國をあげ得ると思ふ。（但し獨逸共和國憲法の第百五十七條に『勞働力は國の特別なる保護の下に立つ。國は統一的勞働法を制定す』としたのは、勞働權承認のみに止らず、更らに一歩を進出したものであり、更らに第百六十三條第二項に『各獨逸人には、經濟的勞働によつて、其の生計の資を獲得すべき可能與らるべし。適當なる勞働の機會が紹介せられ能はざるときは、其の必要なる生計に對して扶養せらるべし、其詳細は特別なる國の諸法律によつて規定せらるべし』と規定したのは、むしろ生存權原則の上に立つものと認めねばならぬ。但し具體的な生存權の保障が、直ちに、此條文によつて與へられたものと見るは、早計に失する。實際に於いて、今日迄、未だ其樣の推定を許す可き事實はこれあるを見ない。）此等諸國に於いては、其所依の原則は、英露兩國に於ける程は明瞭ではない。乍併、大體に於いて、今日受取られる意味に於ける社會民主々義は其根本主張を勞働全收權の原則――生存權原則を同時

に認め、或は認めずして――の上に置くものであるとは、爭を容れる餘地はないものと思ふ。

かくて、メンガーが說き、私がこれを祖述した三大社會基礎權の主張は、今や我れら學究者の書齋裡のものでなく、端的に世界の思想と世界の社會運動とを支配する三大原則となり、若くは、ならんとしつゝありと言はざるを得ぬことゝなつた。

勞働全收權の主張は、給付原則の徹底化に外ならぬ。從つて其れはまた交換原則に據り、勞働原則の上に立つものである。『各人よりは其能力に應じて、各人へは其給付に應じて』なる要求を、遺憾なく貫徹せしめんとするものである。其の反對に、生存權の主張は、『各人へは、其の所要――需要、欲望――に應じて』なる共產原則を、端的に實現せんとするものである。

以上の二者に對照するとき、勞働權の主張は、原則として、甚だ不鮮明なるを免れない。其れは、或る場合には、勞働全收權主張の一過程たることもあり、また、他の場合には、生存權主張の一手段たることもある。其れは、社會基礎權の要求と個人自由主義との混血兒と見らるゝものである。語を强くしてこれを云へば、其れは、社會主義と自由主義、共產主義と資本主義との間に生れたる一私生兒である。更らに今日の實狀について云へば、其れは一の主張にして、其實何等の主張たらざる『新資本主義』『產業合理化主義』（コールの新著『英國の社會並經濟政策に於ける次ぎの十ヶ年』一九二九年刊、第五章八十八頁以下を見よ）一の主義にして、其實何等の主義たらざる『新自由主義』（ケーンズ等の唱ふる其れ、若くは、其れほどの『原理値』（プリンチピエン・ヴェルト）すら有せざる我邦某々名士等の唱ふるところの其れ、其れら一切を一括して）と、一の馴れ合ひを演じつゝある禍的思潮であると云ふべきである。

二　勞働權の乞索原理

失業必然・不必然、失業對策可能・不可能の討究は、勞働權認承の原則の上に立つ社會に於いては、初めから、明瞭なる解答を與へられてゐるものである。何となれば、勞働權の要求なるものは、一の乞索原理の上に立つもので、『各人には、其の適能とする勞働を與ふ可し』とは、其の主張を認承する社會では　(一)各人に必ず適能なる勞働の存在すること　(二)其社會の體系其儘にして、斯く存在する勞働を與ふるの可能なることの二條件を、初めから認承するものであるから。

此の乞索原理は、決して、英國勞働黨によつて、創案せられたものではない。之れは、一方には、封建社會から資本主義社會へ引繼れたインヴエントリーの一であり、而して、他方には、又實に、正統派經濟學の根本命題であつたのである。

封建社會には、今日謂ふ意味にての失業は、全く存在して居らなかつた。資本主義社會のアドヴエントと共に『失業』の現象は起つた。此の端的なる事實は、多くの誤見を産み出した。其れら誤見は、今日も猶甚だ大なる勢力を有つ。資本主義社會と失業とを不可分的なものと見る失業必然論は、茲に豐かなる土壤を見出した。

封建社會には、元より今日謂ふ意味にての失業は存在せぬ。何となれば、其れは當然であるから。今日謂ふところの失業とは、英語の『アン・エムプロイメント』が最もよく示してゐる通り『雇傭機會の缺如』の意である。從つて、其れは雇傭社會を前提するは言ふまでもない。(ドイツ語の『アルバイツ・ロージヒカート』は沒理的な蠻語である。『アルバイト』(勞働)の存在せざることなどと云ふノンセンスはあり得ない。他のドイツ語『エルヴエルブス・ロージヒカイト』は、聊かこれに勝る。乍去英語の『アン・エムプロイメント』ほど理義明晰ではない)。社會の大衆が、雇傭勞働者でない封建社會に於いて、雇傭の機會を見出し得ぬと云ふ意味にての『失業』なる現象の存在せざることは、當然過ぎる當然事ではないか。其反對に社會の大衆が、雇傭者たるより外に糊口の道(エルヴエルブ。トレード)を有せざる『雇傭社會』たる資本主義社會に於いて、初めて、雇傭の機會の缺陷としての失業の現象の起るのも、亦當然過ぎる當然事でなくて、何であらうぞ。

乍去、若し『エルヴエルブス・ロージヒカイト』を廣く且つ其文字通りに解釋して、『糊口の道の缺如』とするときは、封建社會に於いても、此の『エルヴエルブス・ロージヒカイト』は全く存在せなかつたのではない。否々、大いに存在してゐたのである。農業國に於ける凶作、これに伴ふ饑饉は、其最も殘酷なる適例であつた。(今から二十數年前故山路愛山氏主宰の『獨立雜誌』に、當時の東北四縣大飢饉見聞の印象記として寄稿した拙稿『社會問題としての飢饉』に、今茲に開陳する考へ方の一端を述べて置いた。其文今收めて拙著『經濟學全集』中にあり。)武士國に於ける『浪人』は、又他の一例であらう。

而して、更らに、現在の雇傭社會にありても、『雇傭機會の缺如』の意味に於てゞない廣い意味の『失業』の例は、數限りなく存する。殊に『二大政黨の對立』を憲政の常道だなどゝ見る虚僞の政治社會に於いては、尠くとも、政府の官吏の主要なるものは、得職者と同數の失職

者の必然的存在を前提する。内閣の更迭の度毎に、何人かの大臣、何人かの次官、何十人かの知事、其他何百人かの大小の官吏は、失職者となつて、次の政變を待たざるを得ぬ。これらの失職大臣、次官、知事等の『政治豫備軍』の存在することが、今日所謂『憲政の常道』の必然的前提であるのである。幸にして、銀行、會社、取引所、組合にも、學校、教會、寺院其他の社會にも此の『常道』の存せざるが爲めに、我々は無用なる『社會豫備軍』を有つことを、幾分か免れてゐるのである。更らにまた、封建社會に、此の『常道』が存してゐたとするなれば、其社會は、何十人か何百人か何千人かの殿樣や家老や侍やの、『封建豫備軍』を有して居らねばならぬので、厄介は更らに大であつたに相違ない。否、其の『常道』は存在しなかつたが、所謂『御家騷動』の或ものは、『豫備軍』の『常備軍』に對する『倒閣運動』に屬して居たのであらう。

失業が社會の重大事となるは、それが被雇傭者の問題であるからである。封建社會に於ける、又現社會に於ける、廣い意味の失業、失職は未だ社會の重大事とはならない。此意味に於いて問題は『失業』(アン・エムプロイメント)であつて、『失業者』(アン・エムプロイド)でないと、ウヰリアム・ペヴェリッヂ氏の主張したのは、名言と云はざるを得ぬ。『失業者』は常にある。何故に『失業』が必然であらねばならぬかのみが、中心の問題を成すのである。

今日の資本主義社會に於いて、『充用の機會の缺如』は、決してひとり、雇傭勞働のみについて存するのではない。否雇傭勞働の失業は、同時にまた、多くの場合に於て、他の生産要素の『失業』(充用機會の缺如の意味で)を伴はざるを得ないものである。伴ふと云ふは、或は當を得て居らぬ。何となれば、雇傭勞働の雇傭機會の缺如は、他の生産要素充用機會の缺如に、先つことあり、これに追從することあり、或はまた同時的に起ることもあるから。

即ち、今日失業問題を論ずるものゝ最大多數は、失業を以つて、經濟界の景氣の變動と密接の關係を有つて居るとするものである。景氣の變動を測知する他のインデッキスは或は當ることあり、或は當らざることあり、今日に於ても、誰人も一樣に認承するバロメーターは見出されてゐない。獨逸に於て、『ヴキルトシアフツ・デーンスト』誌を中心とするシュピートホフ及其の門弟のシンガーのインデッキスと、伯林の景氣變動研究所に楯籠るワーゲマン一派のインデッキスと、互に其優劣を爭ひ、兩者の間に絶へざる論爭の交され

つゝある一事を見ても察知すべきである。乍去、何れの國に於ても、失業が景氣變動のインデッキスとして、他の何れのものにも優る證明力を有することを爭ふものはない。

失業の增加するときは、卽ちまた、多くの場合に於て、資本に對する需要の減退するときである。而してまた同時に、企業の縮少するときである。言葉を換へて云へば、雇傭勞働に對する充用機會の減少は、資本及企業に對する充用機會の減少と、或は同時に、或は前後して、相提携するのである——其度合は必ずしも、同一ではない——。故に失業の語を、汎く解して、『充用機會の缺如』(ベシエフチグングス・ロージヒカイト)とするならば、勞働の失業は、また、資本の失業、企業の失業と、相伴ふものなのである。但し、これには、無論幾多の留保を爲さねばならぬ。讀者願くば速斷することなかれ。

然るに、雇傭勞働の失業のみが、失業問題として取扱はれ、而して重大視せらるゝ所以は其れが、失業の問題であつて失業者の問題でないことを明示するのである。失業者の問題は、元より存する。而して、其は重大な問題である。然し、其れは、一の統一原理を以て、釋くこと能はざるものである。殊に、私が今問題とする必然、不必然の考察を、全く不可能ならしめるものである。否、其の考察は、全然無用なりと言ひ得るのである。何となれば、其は恰も、二大政黨對立を、『憲政の常道』とする——私から見れば、全く沒理的な——一のコンヴエンションから來る大臣、次官、知事豫備軍の存在、若くは、封建社會に於ける諸々の『營利若くは、糊口機會の缺如』と同性質に屬するものをも含むから。

これに反し、失業其もの、雇傭社會に於ける雇傭機會の缺如其ことこそは、一の原理的取扱を許し、其の必然、不必然に關する考察を充分に容れるものである。

三　封建社會からのインヴエントリー

勞働權の要求は、一の乞索論理に立脚するものであつて、其は封建社會から現資本主義社會が引繼いだ一のインヴエントリーに屬すると、私は言つた。今其意味を說明して見よう。

封建社會とは、實物搾取り原則の上に築かれた社會の謂である。此の意味に於て、其れに先つ社會を承繼したものであると共に、此の實物搾取りを最も巧妙な形態に於て徹底せしめた一の社會である。私は『共產宣言』の『人類の歷史は、階級鬪爭の歷史である』を言ひ

換へて、『人類の歴史は、搾取りの歴史である』と、屢々主張した。封建社會の經濟組織を疑視すればするほど、其の實物搾取り原則の如何にも巧妙に運營されてゐたことに驚かざるを得ないのである。『百姓は財の餘らぬ様に、不足なき様に治ること道なり』と云つたといふ本多佐渡守と

Thou shalt not kill, but needst not strive,
officiously to keep alive.

と言つたといふクラウ（コール前掲書一九〇頁）とは、此消息を道破したものであらう。搾取りが、資本主義社會に於て初めて起つたと考へるは、一の錯覺である。許すべからざる速斷である。

搾取り社會として、資本主義社會が封建社會と異るところは、其れが貨幣――今日に於ては、金融信用――搾取り社會であることに存する。一は搾取り社會で、他は非搾取り社會であるなどとの差異は、寸毫も存するものではない。其れと同時に、實物搾取りと貨幣搾取りとは、搾取り形式を異にするのみと速斷してはならぬ。其のインテンシテートも又甚だ異ることを知らねばならぬ。實物搾取りのインテンシテートには限度がある。貨幣搾取には限度が存せぬ。アリストテレースの無限の經濟と有限の經濟との區別は、

茲にも發動する。貨幣搾取り社會に於ては、資本主義經濟が、無限の經濟であるが如く――であることを最も有力に支持すべく――其の中に行はるゝ搾取りは、無限であり得る。實物搾取り社會たる封建經濟が、有限經濟である如く――爾あることを原則的に餘儀なからしむべく――其の中に行はるゝ搾取りは、有限たらざるを得ないのである。即ち『財の餘らず不足なき様に』『shalt not kill』てふ限度が存する。（瀧本誠一博士は本佐錄中の此一言の眞意を曲解するものなりと、或農政學者が主張したことを傳聞した。今姑く瀧本博士の解釋に從ふ。）百姓の收穫は、其全部を奪ひ取ることは出來ない。少くとも其生活の最低限だけは殘し與へねばならぬ。これは、封建經濟が奴隷經濟社會から受け繼いだ一のインヴエントリーである。奴隷は何ほどにも酷使するを得る。乍去、賢き奴隷所有者は、無限の酷使は、自家の損たることを知つて居る。奴隷病めば其生産力は減ずる、奴隷死せば、恰かも、家畜の斃れたと同様の損を被むる。奴隷主は、奴隷を病ましめず、死なしめざることに大なる、利害關係を有つ。其の酷使は病ましめず、死なしめざるを以て限度とせねばならぬ。封建時代の百姓に於けるも亦同様である。

資本主義社會は、此のインヴエントリーを封建社會から――更らに溯つては奴隷社會

から――引き繼いだのである。トコロで、奴隷社會に於ては、一の素朴的用意であり、封建社會に於ては、周到に計慮せられた原則たる、此の『限度』の認承は、貨幣搾取り社會たる資本主義社會に入りては、一の乞索原理とならざるを得なかつたのである。何となれば、封建社會に於ては、(一)各人に必ず適能なる勞働の存在すること　(二)其の社會の體系其儘にして、斯く存在する勞働を與ふるの可能なることの二條件は、當然に、其の社會の成立條件を形づくつて居たに反し、資本主義は、其成立條件を撤回することによりて、初めて、雇傭關係に立脚する貨幣搾取りを徹底的に行ふを得るに至つたものであるから。貨幣搾取りの特徴は、其が無限の搾取りにあること、資本主義經濟の特徴は、アリストテレースにゝつて無限の經濟なりとせられた營利經濟の中、其の最も徹底的――今日までに知られてゐる限りに於て――なものたることに存する。其の無限性は、『限度』の撤廢を必然に前提する。『限度』の撤廢は、封建社會存立の二大要件なる　(一)各人に必ず適能なる勞働の存在すること　(二)其の社會の體系其儘にして、斯く存在する勞働を與ふるの可能なることの二條件の撤廢を意味するに外ならないのである。

元より封建社會にも、貨幣經濟は存してゐた。而して、其の限りに於て或度までの貨幣搾取りは行はれたことは勿論である。乍併、封建社會の搾取階級の中堅を爲す知行主は、實物搾取りの殿樣であつて、貨幣搾取りの資本主ではなかつた。貨幣搾取りの上から見れば、甚だ多くの場合、此れらの殿樣は、むしろ被搾取者であつたのである。私は更らに進んで云はんと欲する。封建經濟の普及は、すでに其以前に存在してゐたところの貨幣搾取りの進出を幾世紀かに亙つて防止するの一大機能を有してゐたものであると。

貨幣の人類社會への『アドヴエント』は、貨幣學者の普通に敎へる如くに、流通交換の用の爲めに起つたものでは決してないことは、私が既に二十年近くの昔から主張しつゝあるところである。貨幣は最も巧妙なる搾取り道具として發生し、また發達普及したものである。羅馬の『デナリ』を見て『カイザルのものはカイザルに返し、神のものは神に返すべし』と敎へた基督は、いとも明瞭に此の消息を道破したのである。之れに反し『貨幣のヴエール』を引剝したりとするマルクスの洞察は、引剝しを半途にして止めたものである。資本が勞働の搾取り道具たることを看破したことは、半途的引剝したるに止る。貨幣が卽ち

其れであることまで引剝さゞれば、其仕事は完いものではない。ジョン・ロックはむしろ遙かによく、此間の消息を看破した『經濟學全集』所收の私のジョン・ロック論を參照　アリストテレースに至つては、其の無限經濟の論を以つて更らに一頭地を拔いてゐる。否プラトーンすらも、其の『ソフキスト』に於て優に此の理解を示してゐる。

封建社會は『死なぬ樣に、生かし』置いて貰ふ權利の意味に於ての勞働權または生存權の一小片の認承の上に立つ一の社會であつた。其れは元より、今日云ふ意味にての勞働權でもなければ、また、生存權でもないことは云ふまでもない。むしろ『殺されざるの恩典』であつた。しかし、此の恩典の認承は、前にあげた若干の取除けの場合を別にして（一）各人に必ず適能なる勞働あり　（二）其勞働は必ず與へられ得ることの二事實を可能ならしめてゐたのである。

資本主義社會は、此『恩典』を一のインヴエントリーとして繼承し、而して、此れに個人主義の洗禮を施して、權利化せんとした。此努力を學問上に於て代表したものは、實に我が正統經濟學であつたのである。

四　正統學派と自然均衡

正統派經濟學は、自由競爭の完全に行はるゝ社會を前提とする。而して、其の前提の下に於て、勞働の自由の完全なる實現を主張する。アダム・スミスが、ギルドを攻擊し、株式會社を非難し、あらゆる勞働團結を否認したのは、それらを勞働の自由の實現を碍ぐるものと見たからである。これらの人爲的制限の存在せざる『自然的自由社會』に於ては、『各人よりは、其能力に應じて』なる原則は、單なる要求たるに止まらず、端的現成の事實となると主張したのである。何となれば、此の社會に於ては（一）各生產物に對しては、唯一つの價格のみが成立　（二）其の價格は生產費と一致する　（三）各生產要因に對しても亦唯一の價格のみが成立つ。而して、一方に於ては、すべての有效需要――價格を支拂ひ得る需要――は必ず充され、他方に於ては、また、すべての生產給付は、悉く所要せらるゝ樣に、生產は嚮導せられる所謂『費用原則』に支配せられ、かくて、需要＝供給、供給＝需要　價格＝費用、費用＝價格てふ均衡が成立するものであるから。從つて、資本についても、土地について

も勞働についても、供給＝需要であり、需要＝供給であらねばならぬ。各人は其適能する勞働を必ず見出し、其勞働の供給は必ず需要によつて迎へられる。需要せられざる供給なるものなく、供給せられざる需要なるものは存し得ない。兩者の間には、嚴として紊すを得ざる自然的均衡が存在するといふのである。

而して、これと共に、また生産＝消費、消費＝生産の自然的均衡も疑ふ可からざる存在を有つとせられる。すべての生産せらるゝものは、必ず消費せられる、すべての消費せらるべきものは、必ず生産せられる。從つて、過超生産、過超貯蓄の現象は起ることなく、而して市場の過狹も過大も共に存し得ないとせられる。（ホートレー『產業と信用』一九二八年刊八四頁。並に、ジェー・エー・ホブソン『失業の經濟學』一九二二年刊五一頁。）

此の均衡は、二つの自動的制限の發動によつて實現せられる。（一）過超貯蓄は不可能である。何となれば、此傾向一度起るときは資本の過剩を惹起す、資本の過剩は、直ちに利子率の低下を招來し、それによつて、自動的に喰ひ止められる。（二）過超生產は不可能である。何となれば、其傾向の起るとき、其處に直ちに、價格の下落が追從する。而して、價格の下落は、消費の增大を招來して、生產の過超と相殺すると。

此の自動調節論は、今日猶未だ失業並に景氣變動の理論に於て、過超生產、過超貯蓄を原因とする諸々の理論を擊破するに方つて屢〻——換骨奪胎されて——應用せられるところである。しかる限りに於て、其れら駁論が、殆んど一顧の値なきものであることは、言ふまでもないところであるが、其の反對に、資本主義社會が、貨幣搾取り社會であることを知らざる過超生產論は、如何に周到なる修正を加へられた上であつても、此の一顧の値なき自然調節論に對抗すること能はざることも確かな事實である。英國現代の大家たるピグー教授が同じく一流の學者たるホートレー氏に對して今日にまで繼續して挑みつゝある論戰は、私を以て見れば、確かに此の評を免れ難いものである。私は元より、ホートレー氏の信用一點張論に加擔するものではない。しかし、ピグー教授との論戰に於けるホートレー氏、（就中前揭書第六、第八の兩章並に第五章に於ける）の立論は、如何なるケムブリッヂ黨と雖も、讃歎せざるを得ざるほど、水際立つて優越の地位を確保するものなることを認めざるを得ぬものである。

これに對抗すべくピグー教授が其の四百頁に近い大冊『產業變動論』（一九二七年刊）の全篇を捧

げて提出した答案は、『樂觀の誤謬、悲觀の誤謬』てふ、プソイド心理學の外に何ものもないのである。――一九二四年刊『失業は不可避的なりや』に同樣の趣意を簡潔に述べたピグー氏の一短文がのせてあるが、其一二四―五頁にのせた數學式は一の數理遊戯に屬するものである――此の素朴なる命題をマーシアル張りの累重加減論法を以つて、娓々として說き、自家の玩具たる "distorting veil of money" (貨幣の人を迷はせるヴエール)の引剝してふスローガンを縱横に葛藤せしめたに過ぎない。

五　雇傭社會と失業の發生

正統學派が封建社會からのインヴエントリーを個人主義化し、自由主義化し、權利化したことは、永く我經濟理論に一の大なる乞索原理の纏綿を胎したものである。個人主義化せられ、自由主義化せられ、權利化せられたる勞働權は、自由競爭の前提あつて、初めて意味を有つ。然るに、其自由競爭は、更らに、自由に競爭し得る適能、經濟力が各競爭人に存することを前提せねばならぬ。此適能なく、此經濟力なきものに取つては、勞働權は空名である。權利はこれを行使し得ることを意味する。適能なく、經濟力なきものは、自由競爭が如何に完全に行はるゝ社會にあつても、抑も競爭人たることが出來ないのである。

封建社會にあつては、此の適能、此の經濟力は、勞働力の所有と同一義であつた。元より百姓は土地なくしては、耕作を營むことは出來ない。乍去其土地は必ず與へられると云ふのが、『殺されざる恩典』の內容を形作くつてゐた。勞働力は、普通の心力、體力を有するものは皆これを有つ。從つて、此の勞働力は、與へられた恩典と何時にても結び付くことを得るのであつた。――元より例外の存在はこれを認めねばならぬが――。されば封建社會の實物搾取りは、すべての人に對して、一樣に向けられるを原則とする。搾取らるべき運命は、人の存在と同延的であつた。

これに反し、資本主義社會にあつては、勞働力の行使は、先づ雇傭關係の成立によつて先立られねばならぬといふことを以つて、特徵とする。雇傭關係は、實物搾取りと兩立せぬ。何となれば、其の關係は初めから、一切の實物は被雇傭者の手に歸せず、雇傭者のみに專屬することを前提とするものであるから。雇傭關係の成立は貨幣搾取の可能を待つて、初めて可能となるのである。而して、また、貨幣搾取りは、雇傭關係の成立を待つて發動する。

雇傭とは貨幣搾取りを『アイン・ゲーエン』することである。實物搾取りが、人の存在と同延的なるに反し、貨幣搾取りは、雇傭關係とのみ同延的であるのである。

自由競爭の前提は、被雇傭者に取つて空名であると同時に、雇傭者に取つては、完全なる事實である。雇傭するとせざるとは、一に雇傭者の自由に屬する。彼は、封建時代の知行主を束縛した制限から全く解放せられたものである。被傭者の勞働權は、全く其の對象なきものとなつた。ブレンタノ先生が、今より四十年もの昔著された『現在の社會的窮乏の原因』は此般の消息を說いて極めて明晰なものであつた。

勞働權の全然存在せざると云ふことが、資本主義企業存立の條件なのである。存するものは、雇傭者の自由雇傭權これのみ。被傭者は形式的には雇傭を拒みこれを諾せざるの權ありと云ふけれども、彼が人間として生活する必要を有つ限り、其は空名にすぎないものである。

乍去、若し資本主義の實情が、需要＝供給、供給＝需要、生産＝消費、消費＝生産てふ公式を、如實に體化してゐるものならば、其の實情の中に、勞働權の對象は含まれてゐると云ふべきであらう。從つて、問題は、勞働權の承認其のものに存せずして、右の二つの公式の體化されありや否やに繫ることゝならざるを得ない。

私は、今理論の糸を手繰りゆくことを無用と見る。現實に存する失業問題は、一切の理論的葛藤を一蹴する。私は今ベヴエリッヂ氏から、次の表を借りて掲げる。

英國に於ける一八九四年より一九〇七年に至る失業率

（失業報告を提出せる勞働組合の全部について、全年の中數のみを掲ぐ）

年	組合員數の百分率	年	組合員數の百分率
一八九四	六・九	一九〇一	三・八
一八九五	五・八	一九〇二	四・四
一八九六	三・四	一九〇三	五・一
一八九七	三・五	一九〇四	六・五
一八九八	三・〇	一九〇五	五・四
一八九九	二・四	一九〇六	四・一
一九〇〇	二・九	一九〇七	四・二

（此時代については實數の知り得られざること英國も亦た他の國と同じ）

雇傭主の自由競爭に一任する資本主義社會が、すべての雇傭機會需要者に、其機會を確保する能はざるの事實が、漸く明瞭となつたとき、英國に於ては、此缺陷に應ずべく先づ動員されたものは、地方公共團體であつたが、次いで、國家これに代つた。即ち一八八六年（明治十九年）時の地方局總裁チアムバレーン氏は地方官憲に移牒して、不景氣の甚だしき時に於て、失業者に職を與ふることに盡力せよと勸誘した其主義を改めて、一九〇五年（明治三十八年）此の地方救濟の原則を引揚げて、國家的救濟の原則とした有名な『失業勞働者條例』が、法令として發布された。一九〇八年（明治四十一年）には、更らに、明かに、勞働黨の主張にかゝる一般國民の勞働權を認承する法案が多數を以つて議會を通過した。曰く、英國臣民は、公けの官憲によつて、職を與へらるべき權利を有すと。（コーエン『失業に對する保險特に英米の事情に照らして』一九二一年第三篇一五九頁以下に詳しき記述あり。）革命獨逸の帝國憲法が、獨逸臣民は適當の勞働の機會を紹介し得られざるとき、國によつて其生計に對して扶養せらるべしと規定したのは、玆に先例を有つ。但し、後者はむしろ、生存權原則の上に立つことは、前段に述べた通りである。

國家が、臣民の勞働權を認承し、これに適當なる勞働の機會を與ふべき義務を荷ふべしとすることは、明かに、正統經濟學の乞索原理を暴露した所以に外ならない。即ち、之れは、自由競爭の下に於ける自由企業の產業が、すべての雇傭需要を充たし能はざることを、公認する所以である。而して、之れは形式的には勞働權の原則を、これにまつはる乞索原理から解放することになるのである。他の言葉を以て云へば、自由產業社會は、少くとも、勞働については、需要＝供給、供給＝需要てふ公式を實現し得ざることを確認するものである。其れは、取りも直さず、資本主義社會に於ける失業の必然性の法令的公認を意味するに外ならないと共に、資本的產業以外の力を借るにあらざれば、失業の絕滅の不可能なることを、國家の法令によつて、確認するものである。勞働權の對象はかくして、資本的自由企業でなく、國家其ものであることが、認められる。此一事は、一般の勞働保護法制と、根本的に異なる立場に立つものであることを忘れてはならぬ。

繰返していふ。失業問題は、勞働權の原則を執る限り、永久に消滅するを得ざる運命を有つ一の問題である。其必然、不必然の討究は、勞働權認承の原則の上に立つ社會に於ては、初めから明瞭なる解答を與へられてゐるものである。何となれば、勞働權の要求なる

ものは、一の乞索原理の上に立つものであるからと。此の乞索原理を撤廢せんとするものは、英國勞働黨の一九〇八年の『失業勞働者條例』これである。其れは、資本主義企業が――少くとも、英國に於ては、また遙かに小なる程度に於て、獨逸に於ても――『失業の輸出』によりて、問題の(一部的ではあるが)解決を付けんとするに對して、國家(並に地方公共團體)を以て失業の販賣先とせんとするものである。

『失業の輸出』とは、極めて奇拔な言ひ前である。私は此語をジエー・エー・ホブソン氏『失業の經濟學』二〇頁から借用する。其れは『保護關稅論』の肺腑をえぐつた苦言である。曰く、世界的不景氣は世界的失業を伴ふ、乍去、保護關稅論者はいふ『保護關稅の作用によつて、自國の產業を人爲的に振興せしめて、其の失業を尠くすることが出來る』と。これ自國の失業を、他の競爭外國に輸出せんとする企てに外ならぬと。私はホブソンの此の危言を更らに擴充して、多くの海外移民論、海外企業論に及すべきものと思ふ。而して、更らにまた『失業の輸入』の場合を考へ得ると思ふ。我邦現在に於て行はるゝ六大都市に於ける失業救濟事業は、事實に於て、一の大なる失業輸入事業である。此の失業救濟の惠に浴するものゝ大部分――例へば私の親しく見聞した名古屋市に於いては、九割以上（追記。昭和四年十一月に於ては六割五分と聞く）――は朝鮮人であつて、而して、其の作用は多々益々失業又は無業朝鮮人の招來を促がしつゝある。これ、失業に苦しむ我が日本が、自ら求めて失業を遞加すべく、朝鮮から失業を輸入しつゝある所以に外ならない。

六　資本的企業の寄生蟲性

英國に於ける勞働權の認承、獨逸憲法に於ける勞働機會の確保は、失業を競爭國へ輸出するに代へて、國家自らがこれを引受けるてふ原則を公認するものである。かくして、封建社會よりインヴエントリーとして繼承した乞索原理は、形式的には、撤廢せられ得る。

然り、乞索原理は撤廢せられ得る。しかし乍ら、それによつて、資本的產業の寄生蟲的性質は端的に曝露せらるゝものなることを忘れてはならぬ。グスタフ・カッセルは、自由競爭の前提の下に於ては、『すべての物皆其價を受取る』『すべてのものは、皆其價を支拂ふ』てふアダム・スミスの公式は、たとへ自由競爭を前提とするも、猶維持し得ざる所以を『寄生蟲的產業』Parasitic tradesてふシドニー・ウエッブの造語を借り來つて、有力なる一適例とし

て評論した。（前段一五〇頁所引の論文に於いて）曰く、自由競爭が完全に行はるゝとして、企業者は其雇傭勞働者に對して、必ずしも、生活最低限を保障するに足る賃銀を支拂ふものではない。殊に所謂『再生産費』卽ち家族の扶養の費用を支拂ふものではない。支拂はずとも永續し行き得る産業は存する。何となれば現に雇傭する勞働者が雇傭に堪へざるに至るとき、雇傭主は解雇の自由を有する。若しも、雇傭勞働者の供給に限りあるなれば、彼は永久には、其れを爲し能はぬわけである。然るに、雇傭勞働者は、他の産業より之れを取る可能なしとするも、農村から、又は無職者の群から、容易にこれを取り得る。農村又廣く云へば社會全體は、マルクスの所謂産業豫備軍以外にも、雇傭勞働者を供給する。（福田註。歐羅巴現在の失業は、『産業豫備軍』説を一蹴する。何となれば、其の失業者數は遙かに此數を超過し、而も、其れが常備軍化しつゝあるから。）これを採る産業は、其被傭者の教育費を負擔せず、また其再生産費を負擔せず、唯だ雇傭期間のみの賃銀を支拂ふ。卽ちこれらの産業は、農村又は社會全體の費用に於いて、費用＝價格の公式を充たしつゝあるところの寄生蟲的存在を營むものに外ならぬと。

私は今此のウエッブ並にカッセルの考へ方を更らに擴充して云はんと欲す。其の失業の處置を國家に——而して、其の實は、國家を通じて、社會全體に——轉嫁するところの資本的企業は、かれこれの區別なく、一體としての寄生蟲的存在を營むものに外ならないと。國家による勞働權の確保は、實に事實に於て、社會に課するに、此の寄生蟲的資本主義企業の支持を以てするものである。これ實に、重大なる變革である。單なる失業救濟云々の技術的問題ではない。かくして、國家の存立と資本主義企業の家族とは、切つても切り得ざる腐れ縁を結ぶこととなる。（永井亨博士の『日本國體論』また近刊の『日本思想論』は、國家の支持と資本主義社會の支持との混同すべきにあらざることについて、甚だ暗示に富める思案を我らの前に呈示してゐる。讀者の往見を希望する。）

ウヰリアム・ベヴエリッヂは、一九〇八年の勞働黨提出の諸案を、其翌一九〇九年に著はした一世の名著『失業。産業の一問題』中に論評して云つた。各個人に失業に對する國家の保障を與ふることは、疑ひもなく、劣性を庇護し、而して勤勉への刺戟を弱からしむる所以である。これは國家又は其他の力によつて、雇傭（勞働の機會）を調節す可く努むることと、混同すべきではない。……兎に角、失業に對する國家の疑ふ可からざる責任は、公共の厚生に對する其の一般的責任の一部分として、取扱はるべきものであつて、個人に對する一の義務として取扱はる可きものではないと。（一九一〇年再版本一九四—五頁。脚註）而して、氏は實際の施設として、國家の雇傭によつて、産業界の景氣變動に對應すべく、勞働豫備軍を設置する案に對し、

次の三點をあげてこれを難じてゐる。(一)斯の如き雇傭は、甚だ大なる度に於て、救濟的恩惠的雇傭となるを免れず、從つて、勞働者は其當然受く可きより以上の賃銀を支拂はるゝことゝなる。(二)國家的雇傭の如何なる組織も、通常的勞働市場に對する貯水槽として作用することは實際上には不可能である。勞働者は、其の貯水槽に流れ込むであらう。然し一度流れ込むだ者は、國家雇傭が、普通の雇傭よりも、牽引力乏しきものでない限り、再び流れ出づることはないであらう。(三)國費を以て、勞働の貯水槽を設くることは、產業の組織缺陷――失業の續出――を永久化する所以である。……此方法は、現產業組織を其缺陷を有する儘に受け取り、唯だ聊か其外側に觸れるにすぎない。失業の經濟的諸原因は、其爲めに毫も觸れられることなく殘されると。（前掲書一九五―六頁）

戰後に於ける獨逸の『エルヴエールブスローゼン・フユルゾルゲ』は、此のべ氏の言を實證すべき、最も有力なる實例であつた。我邦に於ける所謂失業救濟事業は、其の規模は遙かに小なるものであるに拘らず、其不成績さは、彼に比して遜色なきを誇り得べきものであらう。我が新內閣が企てんとしつゝある失業救濟事業なるものが、其の歷史を再演し、更に、幾多の不應爲例を提供するであらうことは、殆んど自明の一事である。尠くとも、其れは失業の原則的對策として、何等の價値をも有たず、唯だ一內閣の壽命を若干永くし得るの作用を爲すに止ることは、些の疑を容れない。而して、其の價を支拂ふものは、我々國民に外ならぬのである。

英國勞働黨の勞働權原則の公認とは、唯だ一つの宣言的妥當性を有するに止る。實際に於て、英獨をはじめ、諸文明國に於て施設せらるゝ失業對策は、決して、此の原則の一貫的體現を示してゐるものではない。私から見れば正しき原則も、また其の間に混合的存在を見出しつゝあるのである。唯だ其のよつて立つ基調が、勞働權の原則に存する限り、所謂失業對策は、今日現在に於ては、何れの國に於ても、支離滅裂の狀態にあり、失業論者の大多數を支配する思想的環境は實に混沌を極めたものであるのである。

其れと共に私は此の混沌場裡に、猶一條の赤き絲の如く、正しき原則の漸次に擡頭しつつあることを認めざるを得ない。而して、私は、これを以て『資本主義社會に於ける共產原

則展開』（前段參照）の、更らに一つの例と見ざるを得ぬものである。就中、私は英國の新内閣を形作つた勞働黨中の或る人々について、其の著しき展開を認める。此の内閣が向後如何なることを爲すか、今よりこれを逆睹することは出來ない。乍併、其の『經濟參謀本部』の企畫は尠からず私の注意を惹くものである。（前文附記）　私は、嘗つてはギルト社會主義者たりしコールの新著『英國の社會及經濟政策に於ける次ぎの十年』（一九二九年刊）を、其の説明書として、有力なるものと見る。恐らく、新内閣の思想的臺帳は、此の書に於て見出されるであらう。而して、其の強みも其弱みも、其の長所も、其短所も、此の書に於て、やゝ十分に披瀝せられてあるかと思ふ。私の斯く云ふは、實際施設の上についてよりも、むしろ、其の學問的思向の上についてゞある。米國の智識界を傾け盡くして出來上つた一九二三年刊の『產業景氣循環と失業』てふ力作をこれと對比して見るとき、我々は僅か五六年の日子が、如何に大なる變化を齎らし來りつゝあるかを認めざるを得ぬ。

七　英國の莫大なる失業と景氣循環相關論

景氣の循環的變動と失業とを不可分的關係にあるものと見ての失業論は、我々の聞き飽きるほど聞かされたところである。其れは、嘗ては、たしかに一の天來的發見であつた。併し乍ら、歐洲大戰後の世界は、單に失業問題との關係に於てのみでなく、一般的に所謂景氣循環變動論の眞價値を暴露した。私は今其の一般的暴露に論及する暇を有たぬ。

我邦の讀者は、近刊の景氣變動論の一二册に往見して、其れらが多く語つて、實は殆ど何ものをも語らざるを看取し得るの便を有つ。之に反し勝田貞次氏の若干の論文及び著作は、小くとも歐米に於ける最新の思案の如何なる傾向を取りつゝあるかを――必ずしも、十分とは云ひ難はざるも――示してゐる。

其の失業問題に關する限りに於ては、コールの新著附錄にかゝげられてある左の一表を一瞥すれば足りやう。

一九二一年大正十年より一九二八昭和三年に至る英國及愛蘭に於ける被保險勞働者の失業實數竝に其の百分率

	總人員（單位千）	百分率
一九二一年十二月	二、〇三八	一七・九
一九二二年三月	一、八二七	一六・〇
六月	一、五六三	一三・七
九月	一、四四九	一二・七
十二月	一、四六四	一二・八
一九二三年三月	一、三三六	一一・七
六月	一、二九八	一一・三
九月	一、三四七	一一・七
十二月	一、二二九	一〇・六
一九二四年三月	一、一四一	九・八

六月	一、〇八七	九・三
九月	一、二四二	一〇・六
十二月	一、二六三	一〇・七
一九二五年		
三月	一、三一〇	一一・一
六月	一、四〇九	一一・九
九月	一、四二六	一二・〇
十二月	一、二四三	一〇、四
一九二六年		
三月	一、一七一	九・八
六月	一、七五一	一四・六
九月	一、六四八	一三・七
十二月	一、四三二	一一・九
一九二七年		
三月	一、一八八	九・八
六月	一、〇六九	八・八
九月	一、一二六	九・三
十二月	一、一九四	九・八
一九二八年		
三月	一、〇七一	九・五
六月	一、二三九	一〇・七
九月	一、三八四	一一・四
十二月	一、三一二	一一・二

此の莫大な失業者數は、決して、英國のすべての産業に一樣に分布せられてゐるのでなく若干の代表的産業に集中せられてゐるのである。コール氏によれば、本年一月二十一日に於ける全失業數の約三分の一は（一）鑛業及金屬工業に屬し、而して（二）纖維工業を之れに加算すれば、全數の約二分の一に屬する。之に次ぐものは（三）建築業である。其總人員數は（一）四十九萬三千人（二）二十三萬五千人、卽ち合計七十二萬八千人であり（三）は、二十一萬八千人である。（ベ氏の時は、人員數の決定は不可能事であつた。幸にも、英國には其後（一九一一年十二月十六日發布、一九一二年七月十五日實施）失業保險の制が布かれた爲めに、我々は實數を有つ。此制なき國に就いては、百分率は或は見出し得る、實數は知り能はぬ。）

大正九年は、我邦に於ける如く、英國に於ても、好景氣の絶頂に達し而して大瓦落の來つた年である。其の翌大正十年から本年に至る七ヶ年、英國は常に百何十萬人の失業者を有し、其の百分率は、最高一割七分九厘から、最低八分八厘の間を往來してゐるのである。戰前に於ては、二分二厘が所謂『不滅的失業率』であり、七分二厘が最高率であり、四分二厘が平均率であつた英國に於て、失業率の增大は斯くも著大なのである。（『失業は不可避的なりや』一九二四年刊に據る。）此の顯著なる事實の前には景氣循環相關論は、著しく其影を薄くせざるを得ぬ。

失業必然、不必然の問題は、此の顯著なる事實の前に其の取扱を一變せざるを得ぬ。景氣變動と不可分的に結び付けて考へられてゐた間は此の問題は、廣い景氣變動論並に景氣變動調節論の一部――其の代表的なる、部分ではあつたが――を形づくるに止つた。然る限りに於ては、ベヴエリッヂ氏の失業理論は爭ふ可からざる而して最高の權威であつ

た。失業問題は、本來的には勞働の問題でない、其は主として、賃銀の問題であると云つたのは、一の指導原理と做された。而して、失業の問題は、其の大部分をあげて産業豫備軍の取扱に集中す可きものであり、昔の勞働者は、勞働の需要に從ふを以て足れりとしたが、失業の起つた後の時代の勞働者は(一)需要に從ふ(二)需要を待つ（前掲書二三五―二三七頁）と云ふ二つの條件の下に立つとせられ、失業の對策は、此の(二)の需要起るを待つ爲めの、而して待つ間の對策に集中すべきものなりとせられたのである。私は、これらの對策を一括して、帆待ち的對策と呼ぶ。ペ氏は此の帆待ち的對策を以て、十分に可能なるものとした。從つて、然る限りに於て、失業の必然性は、これを肯定するを要せざるものである。唯だ氏の名づけて、失業の不滅的最低限 irreducible minimum of unemployment だけは、帆待ち對策を以てしては、除去すること能はざるものであり、而して然るが故に、また、然る限りに於て、其の必然性は肯定せられねばならぬものとせられてゐた。他の語を以てこれを云へば、失業の必然・不必然と失業對策の可能・不可能の問題とは、此の不滅的最低限にまで押詰められたのである。從つて其の産業豫備軍論は、名はマルクスの其れと同じであるけれども、其の意味は著しく異るものである。

景氣循環相關論は、かくて、失業問題の危險性を著しく緩和するの結果を産み出したと云ひ得よう。即ちペ氏が勞働に對する需要は資本及土地に對する需要と相關關係に立つ、然るに英國に於ては、土地の供給は不足せず、資本の供給も不足せざることは、地代、利子率の騰貴せざることを以て立證し得。また、勞働が機械によつて換位せらるゝことなく、勞働に對する需要が減退せざることは、賃銀が漸次騰貴する傾向あるを見て知る可し、かくて、人口過超の現象は全然存在せず、而して一般的生産過超――生産要具の過超生産――なる事實もまた認む可からず、失業の對策は、一に『デカジュアリゼーション』(機會性の取去り)に集中すべきものであるとした斷案は、多くの識者の追從するところとなつたのである。

英國勞働黨の主張する勞働權原則の支持し難いことは、ベヴエリッヂ卿の所謂『失業の不滅的最低限』の消滅によつて、いとも明瞭に示されてゐる。英國今日の失業問題は、此の限局内に押詰められた失業の問題ではない。百五十萬人内外の失業者の不滅的實在の問題である。而して其れはペ卿によつて緩和せられた失業必然・不必然の問題と、失業對策可能・不可能の問題とを、其限局から解放し、これを國民的死活の大問題となすに至つた

のである

一九二五年モスクヴァ計劃經濟省(ゴスプラン)に於ける討論に於て、私はケーンズ氏を難じて云つた。(後段第二篇三を見よ) 氏は、『チアーチル卿の經濟的結果』に於て、英國現在の失業の激增の原因の一半はチ卿の平價金輸解禁にありとした。これは、傳統的失業理論に囚はれた考へ方である。英國今日の莫大なる失業の最大原因は、英國産業組織の一大支柱たりし外國市場搾取りの漸次不可能に陷つた結果である。此の失業は、季節的でもなく、周期的でもない。又た景氣の變動と必ずしも相關するものでなくして、英國に於ける資本主義産業の世界的地位の變遷(産業機構のストルクトウーア・ヴァンデル)から來るものであると。ケーンズ氏は、私の論を容れず、私は再びやゝ、激しく氏を難じた。傍聽せる勞農政府の官吏諸君中には、私の論に贊するものも、たしかにあつた。今一九二九年コール氏の新著を見るに、其の論當時の私の言と全く符節を合すが如きものがある。(前掲書第二章『英國の貿易と其將來』を見よ。)

右の意味にては、英國の失業問題は、英國だけの問題であつて、世界の問題ではない。況してや、我日本の問題ではない。唯我邦には、ケーンズ、カッセル兩氏の盲目的信仰者尠からず、我邦當面の問題たる金輸解禁についても、ケーンズ氏の右小冊子またカッセル教授の購買力平價説を、殆んど『一つ覺え』的に尊奉して、平價切下げ解禁論の根據とする論者あり、而してケーンズ氏が一の戰術として、(グレゴリー及ホートレー兩氏の評を見よ。) 勞働階級の利益が平價解禁による失業の激增によつて、痛く害せられたと主張した其の言を鵜呑みにして、プロレタリア政黨は、平價切下げ解禁論を主張せざる可からずとする人士のあるを見出す。此の限りに於ては英國の問題は卽ち我日本の問題であるのである。

更らに、英國の問題が日本の問題となるべき一の點がある。其れは、コールが其の著に於て極めて婉曲に、(乍併其の眞意を掩ひ能はずして)説いて居る次の一事である。英國現在の失業は其の勞働條件の高度なる事も一の原因である。此の高度なる勞働條件を支持するの道は (一)帝國主義の擴張か (二)自由通商主義の世界化かの二つを措いて外にない。帝國主義の擴張は勞働黨内閣の主義と兩立せぬ、自由通商主義の世界化のみが其の採るべきところである。乍併、國際經濟會議の自由通商協議には、英國は毒にもならず藥にもならざる第二三流の人物を以つて代表せられたに止る。(福田註。其れはひとり英國のみのことではない。) 其れは、國際經濟會議が果して實行力あるものなりや否やの判然せざる今日、英國としては、不卽

不離の態度を採るが至當なりとする見解が支配してゐたからである。唯だ諸外國、殊に現に英國と競爭の地位にある歐米諸國若くは近き將來に於て、英國の競爭者として恐るべきものとなるかも知れぬアジア諸國が、國際經濟會議を重視し、其の自由通商協定を忠實に遵奉せんことは、最も希しいことである。これと共に、我々は是非國際勞働會議を善用して、これら競爭國就中アジアの新興諸國に於ける勞働條件の向上によつて、其の競爭力を控制するに努力せねばならぬと。

これは、精製された『失業輸出』論に外ならぬことは、慧眼なる讀者の看破するところであらう。私は、自由通商其ものに何の異議を持つものではない。殊に國際勞働會議によつて、外來的に、我邦の勞働立法と勞働保護の完成を刺激するの歡迎すべきことなるを認むるものである。乍併、其れが、英國『失業難の輸出』の目的の爲めに利用せられる虞あることを知るものなるが故に、一知半解の自由通商運動に雷同すること能はず、また國際勞働會議を唯一の庇護者と仰ぐ或る勞働運動者らの所爲に與みし得ざるものである。遮莫、英國の失業問題が、また我邦の問題となり得る他の一點は、實に、茲に在るのである。

八　産業の振興と産業豫備軍

ペヴェリッヂ卿は、其の失業論を要約していふ。失業は、産業の範圍大小の問題ではない、其れは、産業の組織の問題である。失業は、勞働に對する需要の分量の問題ではない。其の變化と變動との問題である。……此の結論は、從來提案せられた失業對策の多くのものが、他の點に於ける價値は如何あらうとも、失業問題其のものに取つては、何等直接の關係を有たざるものなる事を指示する。提案せられた對策の其の一つは、新産業の創造これである。……此等には、國の繁榮を招來したものもあらうし、また然らざるものもあらう。乍去すべての歴史は、勞働に對する需要の增大は、失業に對しては、何等の治療ともならないものであること、勞働供給の減少若くは其の能率の減少も、又何等の治療とならないものであることを示す。出産制限、海外移民、勞働時間の永久的短縮等もまた、何れも問題の核心に毫も觸るゝ所なきものである。これらの方策は何れも著しい範圍に於て試みられたが、毫も失業を除去する效を爲さなかつたものである。我々は次ぎのパラドックスに當面するものである。曰く、仕事の(勞働機會の)創造は、失業に對して何等救濟の用

を爲さぬ。其れは當面の困難を緩和することはあり得る。其れは、一般的に、國の繁榮を增すことはあり得る。其れは、一時的に、失業の存在を忘れしむることは出來よう。乍去、其れは、一國家から失業てふ現象を消滅し去らしむるものではないと。（前掲書一九二頁以下。）

べ卿の此論は、元より景氣の變動と不可分的關係に立つものと見ての失業に就て立てられたものであつて、其れは近頃米國の學者の謂ふ『トレンド』若くはドイツの學者の唱へ、私のモスクヴアに於て主張した『機構の變化』（ストルクトウーア・ヴアンデル又は、ヴエクセル）を、全然考慮の外に置くものである。（一九二六年、親しくべ卿に面接するの光榮を有したとき、卿は、私に向つて、或度までは、此の點を肯定せられた。）從つて、コールが取扱つた英國外國貿易の趨勢の根本的變化より來る英國經濟機構の變化てふ當面の大現象の前には、當然に、幾多修正を加へられなければならぬものである。其變化は、實に隔世的のものである。從つて、其修正も、或點に於ては、隔世的のものであらねばならぬ。

乍去、べ卿の論を以つて、マルクスの『產業豫備軍』の說に對照するとき、更に、其の反對極に立つ我邦論客の人口問題卽產業振興問題云々の愚論に對照するとき、我々は、未だ學ぶべき多くのものを見出さずして已む能はざるものである。

失業問題は、雇傭勞働の問題である。其の以外の何ものでもない。ジョン、スチアート・ミルが『貨物に對する需要は、勞働に對する需要にあらず』と喝破したのは、他の點に於て如何あらうとも、此の點に於ては、雇傭勞働の需給關係の眞相を道ひ得たものである。アダム・スミスを讀まず、リカルドを讀まず、ミルを讀まず、若くは、讀んでも、これを會得し能はざるヂレタントの徒が、僅かに近刊の若干文獻を亂讀して、幾多の卽興的論策を濫發するは我々の迷惑此上なきことであるが、人口の問題は、產業振興せば、卽ち解決す可しと市場に叫ぶ呼賣りの聲を聞くとき、我々は、敎科書的訓練の決して忽かにすべからざるを痛感せざるを得ぬ。資本主義產業は、如何に、これを振興せしめ、如何に、これを擴大するとも、其は必ずしも、雇傭勞働に對する需要增加を意味するものではない。否、雇傭勞働に對する需要如何に增大するとも、其は、決して失業の必然性を一掃するものではない。其の他方に於て、失業問題は、卽ち過剩人口問題なり、過剩人口問題は、卽ち失業問題なりとするマルキ

シスト一派の議論も、また失業問題をも、人口問題をも、釋き得るものではない。（茲に、再び永井享博士の『日本人口論』への往見を希望して置く。）

雇傭勞働に對する需要は、勞働に對する需要ではない。被搾取者に對する需要である。搾取り機會の缺如は、卽ち雇傭勞働に對する需要の縮少を意味し、其の機會の增大は、其の需要の擴張を意味する。此の點に於て、ビグー敎授が其の『產業變動論』に於て、產業の變動とは、一社會の『所得獲得力』の量に於ける變化、殊に、仕事――雇傭仕事の意に取る――に充用せらるゝ所得獲得力の割合に於ける變化より來るものなりとし、（其書十頁以下）更らに『景氣の變動を支配する原因的要因は、動的資源供給の側に存せず、利潤期待の側にある。』（同上二九頁）と し、また、更らに、此の利潤の期待とは、卽ち『產業へ動的資源を向けんとする願望』と同意義であるとしたのは、以上の意味を道ふものと見ることが出來よう。何となれば、『產業へ動的資源を向けんとする願望』『利潤の期待』とは、雇傭勞働によつて、生產を營む外ない今日の資本的企業者に取つては『雇傭勞働搾取りの可能の期待』に外ならず、而して、其れは『雇傭勞働を產業へ――自家の企業へ――向けんとする願望』に外ならないから。（但し、敎授は、此關係を、毫も明瞭ならしめず、而して、幾多の（私を以て見れば）無用なる論辯を重れてゐる。猶ほホートレーの『產業と信用』一四四頁以下の鋭き批評參考。）

ビグーの所謂『利潤の期待』私のいふところの『雇傭勞働搾取りの可能の期待』は、勞働其ものに對する需要を喚起するものではない。況んや、過剩人口に對する需要を喚起するものではない。其れは、唯だ『所得獲得力』の配分の變化を喚起するに過ぎない。其は、利潤獲得機會の增大、被搾取り雇傭機會の增大を意味するに外ならない。失業人口の數量、『產業豫備軍』の範圍は、其れが爲めに影響せられることもあらう。影響せられぬこともまたあらう。二者の間には、何等の有機的關係も存在せざるのである。

九　利潤期待場裡に於ける競爭

利潤獲得の可能は、雇傭勞働者の數と、必ずしも、同延的なものではない。マルクスの餘剩價値論は、これを必然的に同延的と見る。利潤獲得力の運用は、あらゆる生產並に販賣――並に其他の流通――要素の利用と其の組み合せとに存する。ひとり、マルクスの所謂『資本の有機的組み合せ』のみに存するものではない。而して其の利用、其の組み合せに、『定石』の存せぬと云ふことが、資本的企業の特徵なのである。（シュムペーター『經濟發展の理論』第二版に於ける『新組み合せ』の説參照）

の業に於て、最も有利なりし組み合せは、必ずしも、他の業に於て、有利であるとは限らない。否、一の業に於て、或時、有利なりし組み合せも、他の時に於ては、却つて不利なる組み合せたることが、屢々存する。又、其利用、其組み合せは、ひとり、生産行程の上にのみ存するのではない。生産行程の上に於て、全く同一の組み合せを採るものも、其販賣行程其他の流通行程に於て、異なれる組み合せを採るによつて、其の利潤獲得の可能性は、或は大となり、或は小となり得る。茲に、企業者間に『利潤期待』場裡に於ける競爭が起る。其の競爭は、マルクスが、資本論第三卷に說いた樣に、期待せられた利潤を平均化するものでは、決してない。

企業者間に於ける此の競爭は、利潤獲得の上から見れば、誰人よりも、より多く、而して大抵の場合に於ては、より先に、利益獲得の機會をつかみ、誰人よりも、より多く、而して、大抵の場合に於ては、より早く、利益減少若くは、損失負擔の機會を逃れんとする競爭となつて現はれる。所謂、『早く賣拔く』『早く買占めん』とする競爭はこれである。景氣變動の兆候の見え初むるとき、此の競爭は激成せられる。價格騰貴の兆候の看取せられるときは、誰人よりも先きに買占め、誰人よりも先きに生産し、誰人よりも先きに供給を確保せんとする。其の反對に、價格下落の兆候の見え初むるときは、誰人よりも先に『賣拔き』、誰人よりも、先に、需要を確保せんとする。雇傭勞働に對する需要は、此の競爭の一手段として取扱はれる。

此の競爭は、決して、ピグー教授の主張する『樂觀の誤謬』『悲觀の誤謬』に基くものではない。其れは、決して、『需要の過大期待』又は其の『過小期待』の過を犯すものではない。競爭する諸企業者の『期待』『見込み』は或は完全に、或は不完全に、合致することは、幾らもあり得る。例へば、船舶の需要の俄かに增大する事ありとせよ。其の增大の程度は例へば、三十萬噸二百艘なることは、當業者の間に、粗ぼ熟知せられてゐるとする。而も造船業者は競爭する。其れは、此の總噸數總艘數の中成る可く多くの部分を、自己の手に取らんとする競爭である。從來僅かに一萬噸を製造しつゝあつた造船業者はたしかに、二萬噸を供給し得と見込む。從來三萬噸を製造しつゝあつたものは、五萬噸を供給し得と見込む。かくて、必要の設備を增設し必要の材料を買入れ、必要の雇傭勞働者を雇入れる。然るに、これら競爭造船業者各個の期待噸數の合計は、三十萬噸とならず、八十萬噸となるとする。そこで、供給の過剩が起り、船價の下落が起り、或ものは、破産し、或ものは大損を招く。需要

の俄かに減少するとき、又其反對が起る。三十萬噸の需要減少は、粗ぼ豫知せられてある。而も、各造船業者の手控へ噸數の總計は、五十萬噸であつて、其處に、二十萬噸の供給不足が起る。船價は騰貴する。

施された設備、買入れられた材料は、供給過多の事實判明するに至るも、『失業』に陷ることはない。註文は、或は取消される。米國の景氣、及び失業調節對策中註文の取消し卽ち、『キアンセレーション』の禁止若くは嚴重なる制裁が、一の重要なる事として取扱はれてゐることについては、前掲『産業の周期と失業』の隨所、就中第二篇第十一章モンテーグ氏の論文を見よ。ひとり、雇傭勞働は然らず、其れは、直ちに解雇せられる。解雇せられたものは、卽ち失業者となる。曩きに、船舶需要增加の『ライオンス・シエーア』を獲得して、利潤獲得を擴大せんが爲めに相競つて雇入れられた勞働者は、また、相競つて驅逐せられる。其れは、決して、雇傭企業者が『樂觀の誤謬』に陷つた爲めではない。現實に而して多かれ少かれ、正確に見積られたる需要の增大の成る可く多くの分け前を、自家の手に獲得せんとする競爭の結果である。此の意味に於ては、『生産の過剩』とも云ひ得る。然し、其れは、誰人の見込み違ひによるものでもない。反對の場合は、『生産の過少』とも云ひ得る。其れも、また、誰人の過少見積りにもよるものでもない。生産の『過剩』も、『過少』も、決して誤算の結果ではない。産業が、生産が、競爭し合ふ多數の企業單位の集合によつて營まれる結果の累積である。生産の『過剩』以前に、買入れ、借入れの過剩がある。勞働者雇入れの過剩がある。反對の場合には、其れらの過少がある。自由競爭の前提と、勞働權の資本的企業による確保との、到底兩立すべきものでないことは、これを以て、明瞭であらう。ピグー教授が、これを心理的原因に歸せんとするは、明かに大なる誤謬である。教授の所謂『現實的諸原因』なるものは、教科書ならざる此論文に於いては、これを取扱ふ暇がない。タトへ、取扱つても、近刊某教授の經濟教科書に於ける樣に、結局、景氣の變動は、經濟學に於いては、これを取扱ふこと不可能なる由を、數十、數百頁を費して暴露することに終る。

十　錯綜せる失業原因論

ピグー教授の誤謬は、ひとり右の一事に止まらない。教授は、『貨幣の人を迷はせるヴエール』の引剝しに熱中するの餘り、貨幣的諸原因を、『自働的』として、これを輕視否殆んど無視せんとする。これ他の大なる誤謬である。斯くいふも、私は決して、其の反對論者たるホートレー氏に、追從するものではない。ホートレー氏は、貨幣的原因就中、信用創造を唯一原因の神壇に祭る。これも亦た明なる誤謬である。乍併、それが、貨幣――信用――搾取りの眞相を語ること詳なるは、私の推服を禁じ得ざるところである。

乍去、ホートレー氏立論の極端さは、其の『公共支出と勞働に對する需要』論（前掲書第六章一〇四頁以下）に

於いて、いとも、鮮かに展開されてゐる。氏は公共(國家、公共團體)事業の緩急調節による勞働需要の統制を論じていふ。公共事業を失業緩和の爲めに擴大するには、其の資金が必要である。此資金は、資本勘定に於いて具へられねばならぬ。換言すれば其れは起債借入金か、又は、公債償却の繰延べ、中止か、其何れかによつて、調達せられねばならぬ。これに二つの場合を想定し得る。(一)は國民の現實なる貯蓄から借入れる場合　(二)は單に銀行信用の創造による場合これである。(一)の場合には、其れは、朝三暮四に外ならぬ。國民の手によりて使用せられるに代へて、國家の手によつて使用せられるだけの違ひにすぎぬ。政府の失業緩和事業の支出額に該當するだけ一般の消費者支出(氏の云ふは、單に所謂消費のみではない、生産的消費をも包含して)は減少せざるを得ぬ。從つて其結果は自明的である。政府の增加支出は何の用も爲さず失業の量は依然として同一である。更らに(二)の場合、銀行信用の創造によつて、公共事業を營むときは、雇傭の量は增加する。然し乍ら、此場合、雇傭の量の增加を支ふるものは、創造せられた銀行信用であつて、新たに起された公共事業ではない。雇傭機會を增加して、失業を減せんとするは、臺所にある豚を、ロースト・ビッグにする爲めに其全家を燒却するが如き擧である。家を燒却せずして、ロースト、ビッグを得んが爲めには公共事業を起す必要は毫もない。銀行信用を作り出しさへすれば事は足りる。何となれば、失業者に對する支拂を可能ならしめるものは、公共事業でなく、作り出された銀行信用であるから。唯だ其借り入れが、國內よりせられず、外國からせられる場合は異る。此場合には、端的に、雇傭機會を增加する。然るに、公共事業論者が、嘗つて外資輸入に論及したことなきは、一奇とすべきである。故に曰く、公共事業によつて、雇傭機會を增し得可しとの主張は、根本的に誤謬である。雇傭機會の改善せられることありとすれば、其れは、信用に對する何らかの反作用の結果である。失業に對する眞の治療法は、健全なる方針に立脚する信用の直接統制を措いて外にないと。(前揭書一〇四—一一六頁の要略)

ベヴエリッヂ卿の競爭說、ピグー敎授の心理的誤謬論、ホートレー氏の信用の無統制論、更らにこれに加へてホブソン氏の過少消費論、其他失業原因論を列擧すれば、殆んど無數である。私は今敎科書的にこれを並べ立てる遑を有たず、又其の要を認めない。何となれば、其れらは、必然性を肯定するといふ一事に於いては何れも一致して居るのであるから。而してまた、同時にそれらの原因論に立脚する失業對策可能・不可能の解答は何れも

不徹底を極めたものであるから。陳列は、唯だ陳列たるに止る。我々の認識はこれが爲めに一歩をだも進出する能はざるのである。況んや當面應急の失業論、臨機應變の失業對策に於いてをや。

十一　所得の原則的統制

貨幣搾取りを『常道』とする資本主義企業に對して、失業の除却を望むことは、更らに一の新たなる而してより大なる乞索原理を創造することである。勞働權の原則は論ずるまでもなく、勞働全收權の原則の上に立つと雖も、此の乞索原理は滅ぼされ得るものではない。失業の必然性はそれらの原則の如何なる展開を以てしてもこれを取り去ることは出來ないのである。從てまた、失業對策は、其何れを以てするも、當面應急若くは部分的の可能性を有するに止る。英國に於ける大規模なる國營の職業紹介機關、これと關連する失業保險、同じく最新時の產物たる一九二七年七月十六日のドイツの『勞働紹介失業保險法』、其何れも、失業對策としては、部分的解案たるに止ることは、豫言者たらずとも、これを逆睹するに苦まざるのである。況んや公共事業による統制、企業者の自制的調節、生產スタビリゼーションの諸案、勞働組合の自治的扶助、信用の統制など、などに於てをや。更らに所謂應急的失業救濟の諸計劃に於てをや。

乍去、讀者願くは、速斷すること勿れ。私は、これら諸々の對策を以て、無用なり、無效なりとするものでは、決してない。唯だ其れらが失業の必然性と其對策の原則的可能とを如何ともすること能はざる所以を明瞭ならしめんと欲するに外ならないのである。其然る所以は、給付原則・價格原則に基く自然均衡主義の專制にある。之れに反し、私の所謂『資本主義社會に於ける共產原則の展開』の一例として、生存權確保の原則に立つ諸々の現象の進出するとき、（ボッパー・リンコイス『一般扶養の義務』一九一二年刊參照）其處に、私は失業必然性の取り除け、若くは著しい縮少と、失業對策の原則的可能性の擴大とを認め得べしと信ずるものである。此意味に於いて、英國の職業紹介機關、これと關連せる失業保險制度、ドイツの新『勞働紹介及失業保險法』は最も重大にして、最も顯著なる『アドヴェント』たることを疑はないものである。更らにまたコール氏の主張する『ファミリー・アラウワンス』の制度と『ナショナル、レーバー・コール』制度との原則的意義を其處に認め得ると信ずるものである。

生存權に立脚する新原則は、『價格中心』の經濟觀の到底容るゝ能はざるところたるは言ふまでもない。之れに反し、私の主張する『所得中心』の經濟觀は優にこれと兩立すると信ずる。ビグー教授の云ふ如く景氣變動は――而して失業の必然性は――必竟するに、所得獲得力の相互比例の變動に歸着する。其取扱は、價格の取扱であること能はず、所得の取扱でなければならぬものである。今日の社會は資本主義企業の指導の下に立つことは勿論である。乍併、其れと同時に其れは所得獲得の社會である、『エルヴエルブス・ゲゼルシヤフト』である。所有社會ではない。『ベジッツ・ゲゼルシアフト』ではない。價格は、唯だ其の一手段たるにすぎない。所有は唯だ其の方便たるにすぎない。眞の支配者は、所得である。此の所得社會の中核の問題を今日に於いて成すところの失業の問題は、價格の問題ではない。所得の問題である。ベ卿が『失業問題は勞働の問題にあらず賃銀の問題なり』と喝破したは、千古の名言である。然るが故に、失業問題の原則的取扱は必竟するに一の所得の問題としての取扱でなければならない。詳しく云へば、其れは、所得の統制の一事に盡きてゐる。所得の原則的統制、原則的調節を外にして、失業必然性の取り除けはない、失業對策の原則的可能性の樹立は望み得られない。これが、私の所論の總歸結である。

其の理論的展開と、其れに基く失業對策各論、就中、職業紹介制度並に其他の根本的・恒久的對策に關する考察とは、自ら他日再論の機會あるを待つ。（四・七・二八――四・八・九）

附記　濱口内閣の緊縮政策と失業及金輸解禁

此頃三土前藏相は、新内閣の緊縮政策を難じて、『元來消費と生産とは密接不可分のものである　消費が減少すれば、生産も共に減少し、國民全體の所得減退となつて、經濟界を萎微縮少せしむる結果を見るにすぎない、從つて消費節約が國際貸借の改善になるといふことは、經濟界觀測の錯覺である』と云つたといふ。時事新報（八月七日）はこれに題記して、『自ら失業者を作つて何の救濟』としてゐる。此れに對し、小川次官らは『若し我邦の經濟が、國内のみに局限されるものなれば、生産と消費とは不可分かも知れぬが(!?!)　今日の如く對外貿易が盛んに行はれ、經濟が對外的に、發展してゐる時代に於いては、國内の消費節約は、却つて、生産を對外的に發展せしめる基礎となるものである。現に綿絲の如きは、國内の消費節約と共に、益々輸出が增加してゐる』と辯駁したといふ。（八月七日の諸新聞による。）

三土氏の議論は、さながらに河上博士が、其昔し私の論を痛擊するに用られたマルクスの論法を襲踏するが如きものであつて、然る限りに於いて、一應は正しい。之に反して、小川次官等の駁論は、

コールの『失業輸出論』を變造した樣なものであつて、然る限りに於いて、甚だ窮せりと云はざるを得ぬ。

乍併、三土氏の所謂消費は普通にいふ消費の意味であるならば――十の八九左樣であらう――其れは、全然正鵠を失した論である。所謂消費を節約するも、生產的消費にして增大する限り、生產は必ずしも、其れだけ減退するものでないことは言ふまでもないことである。唯だ、マルクスのいふ樣に、結局に於いて、――イン、ゼ、ロング、ラン――生產は、つひに超過するといふのならば、其れは、河上博士と私との間に於ける樣に、未だ決定して居らぬ事である(河上博士は疾くに決定して居ると主張せられるであらうが)。三土氏の恐らく意味するであらう樣の意味に於いては、其論が正鵠を失して居ることは、明である。乍併、生產的消費と狹い意味に於ける消費との割合の問題は、其樣に簡單に片付けるわけにはゆかぬ。私が本文に於いて主張する『所得の統制』とは、此問題の取扱を意味するのである。

他方に於いて、國民の消費の節約は輸出を促進すと小川博士等の論駁したのは、極めて限られた意味をしか有たぬ。國民の節約するものが、何れも皆輸出入貿易の對象たり、又は、たり得るなどとは、實情に迂なるも甚しい議論である。國民の節約とは、貨幣經濟の今日に於いては貨幣支出の節約の形を取るものである。言葉を換へて、云へば國民の貨幣所得の留保である。購買力の控制である。或る貨物については、此の控制は其の價格の下落を招來し、從つて、其の輸出能性は增大し、輸入能性は減少するであらう。然る限り、國際貸借の改善に資する。しかし、控制せられたもの全部が此作用の下に立つのでは決してない。從つて其れらの生產に從事する雇傭勞働機會の減少(失業)を招來することあるべきは、これを期待せねばならぬ。況んや、政府、公共團體、竝に民間事業の中止又は繰延に於てをや。此意味に於て、『自ら失業を作り出して、何の救濟ぞ』と反問するは、當を得て居る。要は、其の節約せられ、控制せられた所得の配分、其の充用如何にある。

私は、新内閣の緊縮政策を正しと見る。其れは、金輸解禁は如何なる方法によつて、これを行ふも多かれ少かれ『クライシス』を持ち來すことを免れない。此の『クライシス』に二種ある。一は、『調節のクライシス』である、他は『安定のクライシス』である。今直ちに、法定平價を以て、解禁すれば、其れは俄かに、貨幣價値を引上げること、なる。其處に起るものは『調節の爲めのクライシス』である。之れに反し、解禁に先つて豫め、國民消費を緊縮する場合に起るものは『安定の爲めのクライシス』である。此の『クライシス』の苦を嘗めて後――其間に物價は下落し、爲替相場は騰貴し、貨幣の對内、對外價値は引上げられて――平價で解禁すれば『調節の爲めのクライシス』はこれを免れ得る。

新内閣は、『安定の爲めのクライシス』を經過する方が『調節の爲めのクライシス』を經過するに勝れりとするものであらう。而して、其の『安定の爲めのクライシス』の强度を、成る可く緩和するが爲めに、財政經濟の緊縮を斷行すべしと爲すものと私は見る。私は今の我邦としては、これが唯一の正

しき方法なりと信ずるが故に、其意味に於て――其意味に於てのみ――新内閣の方針に贊同せざるを得ぬものである。彼の一部論客の間に有力なる平價切下げ解禁論はこれに比すれば、遙かに劣れる方法と云はねばならぬ。其れは、當然經可き苦痛を回避して、唯だ解禁の一事を實現せんとするものである。（松崎大阪商大教授の有力なる批評參照）。經可き苦痛は何らかの形に於て、必ず經ねばならぬ。これを回避することは他日に禍根を胎すことゝなる。要は其の苦痛を、我らの堪え得る限度に、稀薄化し、一般化し、漸次化するにある。緊縮主義は今の處其の稀薄化、漸次化の最も妥當なる方法であると信ずる。而して、其の取扱如何によつては、必ずしも、失業の激增を來すことなくして濟み得るであらう。（四・八・十）

追記　井上藏相の失業論

今日の讀賣新聞を見るに、井上現藏相は『失業問題と財界建直し』と題する一文に於て次の如く云つてゐる。『所で私はもう一歩進んで、此際特に全日本國民に理解して置いて貰ひたいことがある。それは外でもない。諸君たちの擧國一致的の努力によつて、金解禁の斷行に成功し、我が國經濟界の建直しを遂行することが出來るならば、これに優る失業對策は無いといふことである。即ち失業問題が今日やかましい問題となつてゐるのは、いふまでもなく、我が國の經濟界が萬年不景氣の域を脱しないからである。打續く不景氣の反映がついに失業者の激增となつて、一つの大きな社會問題を造り上げたのである。勿論、經濟學者のむづかしい議論としては、さう簡單に片付けられないかも知れぬが、實際問題として、今日の失業問題を考察するに、經濟界に、多少とも景氣がつけば、失業問題なぞは雲散霧消する。……今日の失業問題なぞを一掃するには、どうしても經濟界を根本的に建直さねばならぬ。……目前の爲めにする政府の對策は究極するところ、單なる彌縫策にすぎない。……故に、百の失業救濟對策よりも、一の財界建直し策を措いて、失業問題の解決策は無いと私は斷言して憚らない。』

此の所論の一半は、全然正鵠を得て居り、一半は全くの空論である。而して其の大膽卒直さに於ては、兩者其の趣きを一にする。新内閣が施設せんとしつゝありと傳へられる所謂失業對策は單なる彌縫策にすぎざることを、閣員の一人として、大膽卒直に斷言するところ、全然正鵠を得た言である。如何なる名案妙策が今後案出せられるか、今に於ては、これを逆睹し得難いけれども、職業紹介制度の徹底的普及これと相伴ふ失業保險の制度などの根本的對策を閑却し、目前應急の對策に腐心する今の政府に期待し得るところは、殆んど一もない。世に傳ふところの應急的救濟施設の如きは、全く以て彌縫策――而も、其の效用極めて微小なるより以上何ものをも期待し得べからざる――たるに止ることは鏡にかけて見るが如く明瞭である。

乍去、藏相が、金輸解禁と併行する經濟界の建直しさへ成就せば、失業問題なぞは雲散霧消するものと考へて居るは、大膽卒直にして、而して云はう樣なき錯覺に陷つてゐるものである。勿論我邦

經濟界の根本的建直しは緊要である。而して、私は現内閣の標榜する緊縮主義は、その招來の一の道行として、正しいと認めるものである。乍去、經濟界の建直し卽ち或度までの日本經濟界の機構變化（ストルクトゥーア・ヴァンデル）が成就したりとて、――其れも、實は、大したことは、望み得られないが――目前の失業問題は或は著しく、或は少しく緩和せられるではあらうが、それは決して、雲散霧消するものではない。其の建直し、が、私が主張する『所得の原則的統制』にまで導き進むものにあらざる限り、其の本體は微動だもせず存續すること一の疑を容れないのである。

但し其日々々の事の處理を第一義とする政治家から見れば、失業が一時的に緩和せられさへすれば、其れで、問題は政治家としては雲散霧消すると云ふ意味ならば、私も亦左樣であらうと答ふるに躊躇しない。其の代り又少しく財界の狀態が異變するときは、問題は勃然として起るに相違ないのである。だからこそ、我々はこれら逐日捉風の政治家たちに、我々の運命を任かせ置くことに承服し得ざるのである。（四・八・二七・）

（「改造」昭和四年九月號掲載）

四　經濟生活と經濟政策の循環性

――明治元年より大正十四年に至る外國との關係に於ける日本の發展に現はれたる――

目　次

一　現代經濟生活の根本事實としての循環性。現實生活の要求する經濟理論の改造
二　明治元年以降に於ける日本の經濟的發展の特殊的性質
三　二個の根本的誤謬
四　日本經濟生活の特徴的循環性
五　日本に於ける循環運動の概觀
六　日本經濟政策の發展を劃する各時期
　第一期
　　前期
　　後期
　第二期

第三期
第四期
第五期
第六期
七　歸結

一　現代經濟生活の根本事實としての循環性。

現實生活の要求する經濟理論の改造

經濟生活を一の循環行程として觀察することは、實にフランソア・ケネーに始る。彼は其の有名な『經濟表』に於て、此の循環行程の描出を試みた。乍去、彼の企ては、更らにこれを繼承して、展開せしむべき學者を彼以後に於て見出さなかつた。而して、カール・マルクス出でゝ、其の資本論第二卷『資本の流通行程』（ポルシアール及ヴアンデルリンド共譯佛譯巴里一九〇〇年刊を見よ）に於て新たに此問題に指を染めるに至るまで、彼の企ては、單に我が經濟學の一希觀品として取扱はれるに止まつてゐた。

しかし、マルクスが、其の『餘剰價値學説史論』（此書今は、『經濟學説史』なる題名の下に、モリトール氏の佛譯（一九二四年以降續刊）が出來てゐる）に於て、ケネーと其の循環理論とに關して述べてゐるところは、多かれ少かれ天才的ひらめきを以てした斷片的批判の集成以上に出でぬ。循環理論の促進者としてのマルクスの重要さを顧みるとき、此一事は、甚だ殘念なことと言はねばならぬ。豐富なる餘剰價値理論を、ケネーの『餘剰收穫』の思想から打ち建てることを克く理解したマルクス其人こそ、フランソア・ケネーと其の『經濟表』とについて、全面的な深刻な評論を提供し得る人であるべき筈である。元より、マルクスの餘剰價値説は、今日現在の價値理論的批判に對抗し得ないものであるに相違ない。乍去、其れは、私の見るところでは、少くとも、ケネーの思索の天才的進展と見做されねばならぬものである。但し茲に斷つて置かねばならぬことがある。マルクスにして、其の『餘剰價値學説史』のケネーに關する章を、十分に完成すべき餘暇を有してゐたとしても、すべての方面を網羅して、正しくケネーを理解した評論はこれを、マルクスに望むは無理であらうことこれである。何となれば、其れをするには、彼の自説たる搾取り理論が障碍となつたであらうから。若しも、マルクスにして、彼の樣な立場でなく他の立場、例へば、近來ロバート・リーフマンが、其の『收益と所得』更らに進んでは、其の『主觀的評價よりの價格の成立』に於て採つたような立場から出立したとしたならば、或は十分に

妥當な評論を期待することが出來たであらう。マルクスには、收益に關して正しき思索の缺けてゐたこと、ロバート・リーフマンに循環に關して正しき思想の缺けると同樣であつた。フランソア・ケネーを、其の一切の方面に亘つて正當に理解するには、正しき循環の思想と正しき收益(又は餘剩價値)の思想とは、共に缺くべからざるところに屬する。

註

シアール・ヂード氏は言ふ『若しケネーにして、現代に生きてゐたなら、彼たしかに、もつと明晰な圖式を使用したであらう。彼の死後誰人も、彼に代つて、此の追悼記念的奉仕を爲すことを考へ付いたものゝなかつたことは、むしろ不思議と云ふ可きである』と。(經濟學說史第二十一頁)。私の見るところは、これに異る。ケネー若し今日に生存したならば、彼は『經濟表』とは、全く異る表出法を以て其の基本理論を說いたであらう。ヂードの要求する樣な圖表を案出することは、ケネーに對して極めて安價な追悼奉仕を爲すにすぎぬ。序にいふ。ヂードが『經濟表』を更らに明晰にする爲めに、改めた圖表を使ふことを考へ付いたもの一人もなしと云ふは、誤謬である。白耳義の學者エクトール・ドニス氏は、其の『經濟的社會主義的學說體系史』に於いて、現に其れを試みてゐるではないか。ドニーはいふ。私は二個の圖表を以つて、社會の富の流通運動と其が人體に於ける血液の循環との類似を說明することを勉めた。第一圖表は、此運動を貨幣から捨象して

TABLEAU ÉCONOMIQUE

Objets à considérer. 1° trois sortes de dépenses, 2° leur source, 3° leurs avances, 4° leur distribution, 5° leurs effets; 6° leur reproduction, 7° leurs rapports entr'elles, 8° leurs rapports avec la population; 9° avec l'Agriculture; 10° avec l'industrie, 11° avec le commerce; 12° avec la masse des richesses d'une Nation

DÉPENSES PRODUCTIVES *Relatives à l'Agriculture, &c.*	DÉPENSES DU REVENU, *l'Impôt compris, se partagent a la Classe productive et a la Classe Stérile.*	DEPENSES STERILES *Relatives à l'Industrie, &c.*
Avances annuelles *pour produire un revenu de 2000 ℔ sont 2000 ℔*	Revenu *Annuel de*	Avances annuelles *pour les Ouvrages des Dépenses Stériles sont*
2000 ℔ produisent net	2000 ℔	1000 ℔
Productions		Ouvrages, &c.
1000 ℔ s d reproduisent net	1000 ℔ s d	1000 ℔ s d
500 reproduisent net	500	500
250 reproduisent net	250	250
125 reproduisent net	125	125
62 10 reproduisent net	62 10	62 10
31 5 reproduisent net	31 5	31 5
15 12 6 reproduisent net	15 12 6	15 12 6
7 16 3 reproduisent net	7 16 3	7 16 3
3 18 2 reproduisent net	3 18 2	3 18 2
1 19 1 reproduisent net	1 19 1	1 19 1
0 19 6 reproduisent net	0 19 6	0 19 6
0 9 9 reproduisent net	0 9 9	0 9 9
0 5 reproduisent net	0 5	0 5
0 2 6 reproduisent net	0 2 6	0 2 6
0 1 3 reproduisent net	0 1 3	0 1 3
0 0 8 reproduisent net	0 0 8	0 0 8
Total 2000 ℔ s d	Total 2000 ℔ s d	Total 2000 ℔ s d

L'Y-KING.

LES DEUX PREMIERS PRINCIPES,

Le Parfait. Yang. — *L'Imparfait.* Yn.

Quatre Images qui naissent de ces deux Principes.

Plus parfait. Tay-Yang. — *Moins imparfait.* Chao-yn. — *Moins parfait.* Chao yang. — *Plus imparfait.* Tay-yn.

Huit Figures naissent de ces quatre Images.

Kien. *Ciel.* — Tui. *Eaux des mers.* — Li. *Feu.* — Chin. *Tonnerre.* — Sinen. *Vent.* — Can. *Eaux.* — Ken. *Montagnes.* — Quen. *Terre.*

Ces huit Figures, dont quatre appartiennent au parfait, & quatre à l'imparfait, se disposent ainsi en forme de cercle; en sorte qu'elles se regardent entr'elles, & qu'elles regardent aussi les quatre points cardinaux du monde.

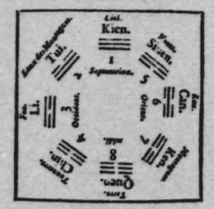

TABLE des 64 Figures, ou LIVRE des transmutations, appellé Y-KING.

描出し、第二圖は、消費的富の社會的運動を貨幣の社會的運動と關連せしめて描出してあると、前掲書第一卷九十一頁。巴里一九〇四年刊)。此の二圖共に經濟表の二複寫圖と竝べて其の書の卷末に收めてある。

猶ランゲは、其の著『パンと穀物とについて』(倫敦一七七四年刊)に於て、ケネーの『經濟表』は、易の卦から着想したものなりとの說を主張し、八卦圖と經濟表とを對照せしめて、其の論據として居ることは、從來餘り人の氣つかざるところであるが、私はランゲの書を見るを得ざりし以前、此の關係の或は存するにあらざるかを推測して、其のことを拙著『流通經濟講話』第六〇頁に次の如く言つて置いた。『經濟表は支那的着想に淵源するものではないかとも考へられます。近來瀧本誠一博士も此論に御贊成相成つて居るのであります』と。而してまた私の講義等に於いては、經濟表は易の八卦に甚だ似たところのあることを、屢々申述べてゐた。然るに先年滯佛中阪本助教授の好意により幸に、ランゲの書を見るを得て、私は私の推測に一の有力なる裏書を得たのである。仍て今別丁として其の對照圖をかゝけて置く。左側はミラボーから複寫した經濟表、右側は易經の八卦圖(出典未詳)である。共にランゲ全集第六卷二八六―七頁の間に收めあり。

私は、以上二つの主張を以て、佛、英、米は勿論、獨逸の學問界に於て、反對説に當面するであらうことを豫期するものである。其一、マルクスに關して、私の主張はマルキストの側からも（一九二五年九月モスクヴァ人民經濟會議に於て、講演を試むるの光榮を有したとき、現に、私は此の種の反對論に遭遇した。第二篇三を見よ。）また並に、非マルキスト就中マルクスに最も緣遠い諸學者の側からも反對論の起るべきことを豫期する。其二、ロバート・リーフマンに關して。彼は必要以上に、多くの敵を作つた。其の爲めに自己の學説に對する公平な評價を碍げた點が尠くない。しかし、私は、彼の説を以つて、價格及び所得理論の領域に於ける、一の大なる業績と認むるものである。彼は、其の近業『國民經濟原論』に於て、自己從來の説に、重要な改善を加ふると同時に、斯くの如き大作には、殆んど其の類例を見出し得ざるほどの、多くの弱點を現はしてゐる。

かく、フランソア・ケネーの循環思想も餘剩價値思想も、我が學に於て、極めて斷片的にしか商量せられ、取扱はれなかつた間に、經濟生活の循環的流通に關する理論の結實は、一の全く異なれる方面に於て起つた。其れは經濟的景氣變動の循環的傾向についての種々なる研究これである。これら諸研究は、ジェヴォンス並に其の他學者の傳來的恐慌諸學説から出發し、更らに進んで、近代經濟界の諸運動、就中貨幣及び資本市場の運動の核心を捕捉せんとする試みであつた。佛國（ジュグラー、レスキュール、アフタリオンなどの名を並にあぐるを忘れてはならぬ）並に米國の諸學者は、此の種研究に於て、著しい業績を示して居る。而して、之れは、他の文明國（獨逸其の他）に於ても、反響を見出した。殊に米國のミッチェルの『商業循環論』に於て、我々は、一の典型的研究を有して居る。

更らに之れに加へて、近時に至つて（殊に一九〇九年刊ウキリアム・ペヴェリッヂの『失業論』以來）英米國の學者らは、勞働市場就中就業率（逆に云へば、失業率）の運動に於ける循環的傾向を展示することによつて、此の問題の研究に、新らしい貢獻を爲した。我々は、此の種の研究から循環理論の展開と豐富化とを期待し、流通經濟の研究、就中價格と所得との研究は、これによりて大なる助けを得るであらうことを希望するものである。

私は茲に一の新語を鑄造するの許を求める。其れは『循環性』といふ術語である。從來の恐慌理論に於て、久しい以前から慣用せられてゐる『周期性』といふ成語と同樣に、私はこの新成語を、現代經濟生活の一特徴を言現はすに充てんとするものである。私の見る

ところでは、經濟生活に於ける此の『循環性』の性質を明かにすることによつて、我々は、フランソア・ケネー、カール・マルクス並にハインリヒ・ゴッセン等の所論中不朽の價値ある部分、更らにまた、ロバート・リーフマンの説に於て正しく且つ眞なるものを――其の脱線的部分を取去つて――適當に評隲しこれを展開せしめることが出來ると思ふものである。

元より、私は、唯だ此の循環性だけの思想を以つて流通經濟の全體系を打建て得べしと考ふるものでは、決してない。循環性は、從來閑却せられて居り、從つて、これを力説することが、甚だ重要である一の形相ではあるが、しかし、其れは、必竟一の形相たるに止る。決して流通生活の全部を釋く可き全能力を有するものではない。循環性は、今日にまで發展し來れる價格及所得理論と關連して考察せられねばならぬものである。

マーシアルは、幾多の機會に於て、『自然は飛躍せず』なる格言を繰返してゐる。經濟生活に於ける自然は、決して飛躍を爲さない、循環を描きつゝ進出する。而も其循環は必ずしも規則正しき階段的系列に於てすること、彼の素朴なる國民經濟發展階段論者の説くが如きものでなく、活動、繁榮、中間繁榮、恐慌、沈滯、不景氣などといふように、絶へざる變遷消長を以つて、進展するものである。而して、私は、此の論文に於て、經濟生活に於ける此の循環性は、自國の在内的必然によつてよりも、むしろ、對外的關係によつて誘導せらるゝことの多い國の經濟政策の發展行程に於て、最も明白に看取せらるゝ所以を提示しようと欲するものである。

經濟政策其ものは、必ずしも其の本質に於て循環的なものであると云ひ得ない。遠い昔から經濟政策を營んで居り乍ら、其の經濟政策に於て、將た又政策の反映たる國民の經濟生活の態樣其ものに於いて、何等著しい循環性を示めして居らぬ國がある。其の一例として、支那をあげ得る。目下私が譯者の業の進行に從ひ、順次に東京商科大學の雜誌『商學研究』誌上に紹介しつゝある『稿本支那經濟史大系』を參照せよ。支那歴代の農業政策就中土地政策には、或は一の循環を現出しつつあるが如き觀を呈することはある。しかし、これは、事實に於て、決して循環ではなく、行政的施設に於ける單なる逐次的變遷たるにすぎざるものである。

循環性なるものが一の現代的現象である事を特に指摘する必要はあるまい。經濟政策に於ける循環性は各國夫々獨特のものであると共に、又現代的である。其れは、凡ゆる現代文明國の經濟政策が同じ程度に循環的であると言ふ意味ではない。或文化國殊に其の對外關係が甚だ力强い影響を有する國々に於て、特徴的であるといふ意味である。

英吉利の例を採つて見よ。如何にして我々は英吉利經濟政策の循環性を指摘することができるか。乍去、人若し他の文明諸國に就いても同じことを言ひ得べしと考ふるならば、それは誤れるも、亦甚だしいものといはねばならぬ。

明確の方針に立脚する經濟政策を行ふ現代文化諸國は、これを分つて二種と爲し得る。第一種はその經濟政策其れ自身に於て何等の又は何等の著しい循環性を示さず、否進んでは此の循環性を克服することをその任務の一に算ふる國々から成る。第二種は、その經濟政策が其れ自らに於て循環的であるのみならず、其の作用が國民の經濟生活の循環性を減ずるよりは寧ろ增進する傾向を有つ國々から成る。第一種に屬する國々に於ても、經濟政策は一の循環的傾向を免れることを得ない、最近時に至り、經濟生活が著しく循環的運行を辿るようになつてからは、殊に然るのである。何となれば經濟政策は或度までは、實際生活の現實の進行を追從する傾向あることを避け得ないものであるから。

第二種に屬する國々の經濟政策のみについて考察するとき、我々はこれらの國々に於ける經濟政策は指導者たるよりも、むしろ被指導者の地位に在ると云ふ事實が、此の循環性の主たる原因たることを見出すのである。

これらの國に於ては、指導者は國の經濟政策でなく、經濟生活殊に各般の誤謬に充ちた經濟生活これである。經濟生活は常に誤謬の充ち充ちたものである、之を除去することが經濟政策の任務なのである。然るに第二種に屬する國々に於ては、此の原則は轉倒せられてゐる。誤謬を除去するどころではない。正しき經濟政策は却つて實際生活の誤謬に依つて無用化せられる。斯くて私は、同じ誤謬が一定の規則性を以て繰返へされると云ふ意味に於て、誤謬の循環性と云ふことをも指摘し得ると思ふ。一の誤謬は他の誤謬に依つて後者は更らに第三の誤謬に依つて順次に克服せられ、そして數年の後には當初の誤謬が再び勢力を獲得することも、往々見るところである。

かくして此の種の國々に於ては、經濟政策の歴史は誤謬の無限連鎖として現はれ、此の連鎖には新しい誤謬の加はるだけで其の本體は常に反覆してゐるのである。

十九世紀の初頭以來特に明瞭に認め得るに至つた經濟生活の循環性は、我が社會生活不安定――嘗つて恩師ブレンタノが『現代の社會窮乏の原因』（第二版ライプチッヒ一八八九年刊）に於て、巨匠的解剖を試みられた――の一原因である。此の不安定は、循環性から生ずる動搖の爲めに其尖端に押し進められた。唯だ國情に適應する經濟政策を行ふ諸國に於ては、此不安定

は幾分かは緩和せられ得る。これに反し、其の經濟政策がそれ自ら循環的であり、而もこれが實際經濟生活の循環的運動の支配するまゝになつてゐる國々に在つては、此の不安定は更に尖鋭化せられるの外はない。

經濟學上の形式論理學派――斯く呼ぶことを許されるならば――は、純粋且つ單純に先驗的に構成され準備せられた何等かの當爲や範疇や(文化價値など、など)から導き出された概念構成を以て、經濟政策の學問的任務なりと主張する。而して、現實の經濟的存在はこれら概念の内容とせられてはならぬとせられる。若し此の學派の主張が正しいとするならば、諸國民の經濟生活又は經濟政策に於ける循環性の考察は、全く無用に歸するの外はない。何となれば此説に從ふときは經濟生活の循環的實在は、經濟政策の理論にとつて何等の關係を有たないであらうから。之に反して何時も、而して何れの場合に於ても、構成せられる概念は、それが實際生活の諸現象と如實に(實在的に)關係してゐる限りに於てのみ決定的な權威を有すると認むる者に在つては、現代經濟生活及近世經濟政策の循環性に關する研究が、經濟政策の學理的研究の建設に方つて忽諸に附すべからざることを主張せざるを得ぬのである。

經濟政策の領域に於ける眞理を求める闘ひは、疑ひもなく、第一次に、生活を支配する政策上の誤謬を闡明するにある。然るに經濟政策上の誤謬が無數であり、之れが急速に相次いで繰返し〳〵全經濟生活を支配するところに在つては、これら誤謬を一つ一つ列擧し、之に對して闘爭するのは、風車に對して戰を挑むやうな徒勞である。此の如き場合には、實在的見地に立つ經濟政策の學問的建設が最も急要とせられる。換言すれば、一の確乎たる實在學的見地に立つて、其國の經濟政策の全發展を冷靜に綜覽し、其國民經濟に於いて演ずる役目を、明瞭に描出し、之によつて、根本的改造の道を開くに若くはない。

循環性が、極めて明瞭な形で現はれてゐて、これを一定の指導的勢力に歸着せしめ得るやうな國にあつては、右述ぶる如き考察は或る意味に於いては甚だ容易にさせられてゐると云ふことが出來る。明治元年新政體の始めから今日に至るまでの日本の經濟政策の發展に關する考察は此の種の考察について若干の指針を提示するものゝ如くに見える。これを、極めて、簡單に叙述することが、私の此論文に於いて試みようとするところで

ある。

二、明治元年以降に於ける日本の經濟的發展の特殊的性質

從來經濟學者たちは一般に嘆じて言ふ。自然科學者は實驗室を持つてゐて、そこで實驗や分析を行ひ又必要の場合には隔離法を用ゆることができる。然るに人間を對象とする學者、殊に經濟學者は斯ふいふ手段は一つも用ゐることができない。從つて自然科學の研究は正確に遂行され得るけれども、社會科學の研究は然ることが出來ないと。

然し乍ら此の苦訴は歐洲大戰中及びその直後の時期については制限を要する。何となれば、此の時期については、我々は、或る程度までは自然科學的正確を以て觀察し得られるやうな、幾多の經濟的出來事を、實際に經驗したではなかつたか？　殆んど實驗室内に於ける實驗であるかのような多くの經濟的施設は行はれたではなかつたか？

原因結果の關係を自然科學的正確さを以て豫見することを得る多くの事柄を、我々は一九一四――一九二六・七年までの間に於いて經驗した。殊に貨幣・金融・財政の範圍に於ては、全世界が一の大きな經濟的實驗場に化したかの如き觀を呈したではないか。

然し私は今此一事について語らうとするのではない、私は唯だ日本のことを語らんとするのである。私が特に示さんとすることは一の特殊日本的現象についてゞある。其れは別事ではない。經濟政策と經濟生活との相關關係に於いて、其因果的連鎖の明瞭に指摘し得ること日本の如き國は、他に殆んどこれを見ざるほどであること、これである。從つて、從來經濟學者等が訴へて居た實驗不可能云々の憾みは、日本については、更らに格段の制限を加へなければならないのである。

何故に然るか。何故日本に於ては經濟政策と經濟生活との關係が斯く明瞭に現はれてゐるのか。この問に答ふることは、必ずしも難事ではない。

日本は永く鎖國の狀態に於いてあつた。十九世紀の中葉、外國から餘儀なくされて、國の門戸を開くまでは。外國人は、日本は開國するや否や、殆んど野蠻或は少くとも半開國から、一躍文化國に轉化したものと見做して驚異の眼を張る。此觀察の全然誤謬なることは私の外國文を以てせる處女作(日本經濟史論。(註)一九〇〇年ミュンヘン刊)に於いて、

詳かに論駁したところである。

(註)現佛國道德政治科學學士院々長エル・ヂー・レヴィ氏は千九〆一年此の小著の梗概を「佛國政治文學週報」誌上に紹介する勞を執られた。また「佛國社會學年報」1900—1901. 及び「伊太利社會學評論」に於ても私の此書は紹介された。

日本は、支那及び和蘭を除くの外、外國に就いて毫も知るところなかりし數世紀の間に於いて、其の社會的並に經濟的發展に於て、歐羅巴諸國と殆んど同樣な發展行程を辿りつゝあつたものである。其發展時期の順序さへ、歐洲諸國と殆んど並行的であつた。外の世界に對して、全く鎖されてゐたけれども、日本內部の社會並經濟生活は歐洲の諸國と殆んど同一水準上に在り、如何なる意味に於いても、決して野蠻國若くは半開化國ではなかつたのである。殊に、德川時代に於いて、日本は純然たる封建國家を有してゐたとする歐洲に普及してゐる見解の誤謬なることは私の右小著に於いて史的事實の提示によつて、指摘したところである。德川幕府の政治は、一の專制的警察國家であつたことは、同時代に於いて、民族的統一の確立に汲々として居た歐洲諸國に於けると全く同一である。十七・十八兩世紀に於ける日本の國家は、最早分權的の封建國家ではなかつた。著しい程度に於いて中央集權化された國家體であつたのである。亞米利加に依つて日本に强制された開國は、當時既に國の內部に於いて發展しつゝ、鎖國の爲めに其前進をはゞまれて居つた文化に對する一の刺戟であつたには相違ない。從つて開國は、斯く中央集權化された國家を、鎖された國土の上にこれ以上發展することの不可能から解放したものである。

一度この障壁が打破された以上、不可能は變じて可能となる。日本文明のその後の發展は、既に私の論じた樣に、閉鎖された國家內部に於ては不可能事であつたが、この不可能事は開國に依つて忽ち消滅した。そして當時の日本に取つては、外國文化の成果を全力を擧げて吸收するより以上に緊急なことはないと考へられたのである。

その結果、日本に於ては、固有文化と外來の文化とは、全く明確に分離し得べき二つの要素として相對立し、この二つの要素の各獨自的な作用及びその相互作用は、決してこれを混同する能はざるほど顯著な形相を呈示してゐる。而して、外來文化を取り入れることが多くなればなるほど其作用を擴大するところの循環性の進展はいとも鮮かに看取し得られる。これ、日本の經濟的發展が、殆ど自然科學的實驗に於けるが如き正確さを以て觀察し得られる所以である。

他の文明諸國に於ては、固有文化と外來文化とは、嚴然これを隔離して指摘することは困難である。何となれば、兩者の差違は、本質に於いて左様に顯著なものではないから。中古の數世紀間、歐洲に於いては、希臘・羅馬的文化要素と、ゲルマン的文化要素とは、甚だ密接に融合されて、これを、其各々に分別して觀察することは、專門研究者の努力に須たざるを得ざるところであつた。（エー・グラソン『佛國法制史』第一卷七五―七七頁（一八八七年刊）を見よ。）

殊に現代に至ては、固有要素と外來要素の分別を企てんとすること、其れ自らが、むしろ笑ふ可き愚舉とさへ考へられよう。何となれば佛蘭西・英吉利・獨逸・和蘭・伊太利などの諸文化は、その他の國の文化に對して、恰かも單一の文化たるが如き觀を有つ。元よりこれら諸文化相互の間に、何等の差違なしと云ふのではない。乍去、固有文化と外來文化とを截然と分別することは、殆んど不可能と云はねばならぬ。

日本に於いては然らず。極めて長い間完全に鎖國の狀態にあつた此の國に於ては、外來文化の異國性は、一目瞭然たる特殊の形相を示してゐる。外來文化の日本固有文化に及ぼした影響は、甚だ重大なものであることは、誰人もこれを拒否することは出來ない。

乍去、其影響は、日本に於いて特に破格的に優勢なものであつたと主張するは、誤謬である。私の言はんと欲するところは、唯此の影響が、極めて鮮かに點々指摘し得ると云ふ一事である。

而して、私が以下取扱はんとする方面について、此の特性が特に著しく現はれてゐるといふことは、私の考察に取りて、大なる助けを與ふる所以である。言葉を換えて云へば、經濟生活と經濟政策の循環性の問題を研究せんとするものに取つては、日本近時の發展道程、殊に明治初年以降の其の對外關係に於ける道程は、一の典型的實物教訓を與ふるものである。私が今此問題を選定したのも、單に私が一日本人たるからのみではないのである。

三　二個の根本的誤謬

明治元年から大正十四年に至る日本の發展に一瞥を投ずるとき、我々は若干の特徴的現象を看取せざるを得ぬ。其れは何であるか。曰く、精神界のことであらうが、物質界のことであらうが、將た又その影響の度合が大であらうが小であらうが、兎に角、明治元年以

來今日迄(將來は問題外に置く)外國の影響は常に有利な作用を伴つてゐた。從つて經濟生活の指導者たる政治家も指導されてゐる國民も、外國の影響に對しては、只管、極端なる樂觀的態度を持して來たことこれである。

どんな事件でも、それが外來的である限り、必ず有利な結果を伴ふに違ひないと豫定することが、この樂觀の基調を成す。政府率先してこの樂觀を取り、國民の指導者之に從ひ、一般國民も、また僅少の例外を除いては、全く此の樂觀に耽る。外來の事件に對しては、客觀的な批判の行はるゝことは極めて稀であつて、事々物々唯だ歡迎されるのみであつた。日本が國際的問題について、常に受動的な態度を持するのみで、未だ嘗つて、能動的に行動しないと云ふ事實、日本が凡ての國際問題に對し、それが如何に馬鹿げてゐやうが不正であらうが、兎に角外國の多數が我が事としてそれを行ふ限り、之に參加するを辭せぬと云ふ事實――此れらは何れも、一般國民と國家の指導者とを均しく支配してゐるところの上述の樂觀の派生物である。

前世紀の後半、世界の諸々の事件に對する日本の態度が、大體この樂天的傾向に依つて指導せられて來たことは誰人の目にも瞭なるところである。就中、世界大戰と戰後の諸問題に對する日本の態度は、冷靜客觀的な判斷若くは人類相愛の大義から生じたものではなく、此の樂觀的『イージー・ゴーイング』の致すところである。此の極端なる外國崇拜は、今日の日本人を、昔しへの日本人と分つ所以である。否現在の支那國民に對しても著しく異つたものたらしめる一の特色である。現在の日本と日本人とを理解せんとするものは決して此一事を無視してはならない。其れと同時に此の特色を以て、日本人に永久不易的なものと思惟するは大なる謬見である。

この樣な樂觀が日本人を支配するやうになつたは何故であるか。その理由は一目瞭然である。亞米利加の提督ペルーに依つて强制された開國は、國民の經濟生活の上に比較を絕するほど有利な作用を及ぼした。開國と共に起つた物價の大變動――其れは通貨膨脹の作用を受けた世界戰爭以後の歐羅巴に於てのみその類例を見る。其他にはこれに比すべきものを見出し能はぬところの――さへも國民に取つては、一の大なる惠みであつたかの如く見える。其は物價暴騰に伴ふ大窮乏の苦しみを――幣制恢復の後に至るまでも猶ほ――嘗めつゝある歐洲に於けるとは、全く反對の現象と云はねばならぬ。

勿論、新政體の始めには、國民の殆んど凡ての階級に亘つて、重大な變化のあつたのは當

然である。就中最も多く惱んだものは武士階級であつた。しかし、彼等と雖も大體に於いては、此の變動を利用して、他の方面に進出するを得たものも尠からずある。農商工の諸階級も亦元より、此の大變遷の爲めに苦んだ。乍去、新政府の地位確定は意想外に決定的なものであり、また、甚だ迅速に行はれた。從つて、反動に對する憂は、忽にして消滅した。國民は、此形勢をよく理解した。かくて、安靜と信賴とは早くも保全された。新政府の初め五六年の間に於いて、すでに經濟上の好景氣が起つた。此好景氣は、以下考察すべき循環過程の第一繁榮期を代表するものである。

既に述べたやうに、幕末の數十年は、啻に政治的見地から見てのみならず、社會的見地、就中經濟的見地から見て、最も極端な困難に陷つてゐた時であつた。殊に貨幣、金融、財政上に於いて左樣であつた。紊亂した財政制度に必ず免れざる一の罪惡たる貨幣の惡鑄——德川幕府は他の一罪惡たる通貨過發はこれを犯さなかつた。何となれば德川幕府は人の熟知する如く、未だ嘗て、紙幣を發行したことがないから——は更にこの窮乏を尖鋭化した。殊に、其の晩年に於ては、貴金屬特に金の海外輸出が夥しい額に上つた。日本の價格經濟は、考へ得る限り最大の難境に陷つた。

明治維新は、恰かも、其最窮時に起つたのである。其れには、重大な困難の伴つたことは、言ふまでもないが、しかし、大體について言へば、塗炭の苦に惱む國民に取つては、解放の福音を齎らしたものである。何となれば、德川幕府の經濟的、財政的行詰りは、其極度に達して居り、何事でも、其方向を轉換し新しい情勢を招來し得ることなら、其れが如何に拙く施行せられても、救ひの神として歡迎せられなければならぬ狀態に達して居つたから。最惡の狀態はそれ以上惡化する可能を有たぬ。變化は、それが如何に起らうとも、改善を意味するの外はない。舊時代日本の難局は、實に此くの如く極端に瀕してゐたものなのである。

德川幕府の財政・經濟政策は久しい以前から行詰つて居り、國民の現實生活とは全く乖離して仕舞つてゐた。殊に國內に於ける金銀の比價一對四といふことは、世界共通の比價と相去ること甚しかつた。其れは鎖國狀態の下に於いてのみ維持せられ得た不自然極る比價であつたのである。從て一度國の門戶が海外通商に向つて開放せられると共に、此比價を維持することは、即時に不可能となつたは、當然のことである。而して、其れは

同時に、日本國の幣制の根柢を一擧にして破壞し去つたのである。

新政府の先づ第一に着手せねばならなかつた仕事の一つが、此一事に傾注せられねばならなかつたことは、當然の事である。貨幣本位を安全なる基礎の上に置かんが爲めには、全然新なる貨幣制度を樹立せねばならぬ。其新制度は、全然一變した價格竝に所得の體系の上に打建てられねばならぬ。それは恰かも、不換紙幣マルクから、レンテンマルクを經由じて、終りに金貨マルクに恢復した獨逸に於けると同樣の難事業であつた。獨逸に於ける此の大事業の生みの惱みを、眞によく理解し得るものは、明治の初年に於いて、同樣の苦い經驗を嘗めた日本だけであるかも知れない。何となれば、此くの如き根本的の改革事業は世界の幣制史の上に於いて、其類例を見出すこと、他には甚だ稀であるから。

此の時期に於ける日本の發展過程に於て先づ第一に知らねばならぬことは、當時日本の財政の樞機に盡してゐた由利公正(又の名、光岡八郎)――日本が今日までに有した最大財政家の一人たる――が次の言葉で謂ひ現はした一事これである。曰く『我れらは紙片を以て天下を取れり』と。此一言こそ當時の情勢を最も遺憾なく謂ひ表はしたものである。明治維新は紙幣の發行に依つて行はれた。而して美事に成効した。然し其れと共に、日本の經濟生活及び政策に、其特殊循環性を印銘す可き使命を帶びた根本的禍根が培はれたのである。

新政體の創始に依つてその根幹を振撼された日本の國民經濟は、明治の初十ヶ年間に於て、漸次整頓の域に入つた。窮乏の極點から、一轉して好景氣にさへ惠まれることゝなつた。而して國民は、新政府に謳歌すべく始めた。第一次に於いて外來の刺戟に促されて起つた一の政治的事件であつた明治維新は、かくて一般國民の隨喜するところとなるやうになつた。此經過は國民の心理に深い印象を留めた。即ち外來の影響は何時でも、如何なる形に於いても、國民の福祉を齎らすものとして、これを歡迎するといふ一種の拜外心理は、此の出立點に於いて、すでに植ゑ付けられたのである。

此の點に於いては、十九世紀中葉の維新以後の日本國民は、一九一八年の革命以後に於ける獨逸國民とは、全然反對の地位に立つといはねばならぬ。獨逸國民が、今日も猶賠償問題は更なり、幾多の點に於いて、重き經濟的の負擔を課せられて、苦しみ拔いて居ると反對に、日本の政治的維新は、政治上に於いては、利害相半するとも云ひ得ようが、經濟上に於いては、善き結果は惡き作用を凌駕すること、絶大であつたことは、一の爭を容れざるとこ

ろである。而して此の維新は、由利公正の言ふ通り、實に紙を以て成し遂げられたのである。此の紙による革命を極端に樂觀することの誤謬なるは更なり、外來影響の萬能力を盲信することの妥當ならざるは、言ふまでもないことではあるが、一度植ゑ付けられた樂觀的謬想は、永く國民的傳統として、今日にまでさへ、其跡を絶たないことは、これを忘れてはならぬ。（不幸にもジエー・エム・ケーンズ氏の貨幣説が、日本に於いて熱い歡迎を受ける理由の一は、實に茲にあるのである。）

さり乍ら此の樂觀の誤れることは、新秩序の發展が進むに從ひ、次第に暴露せらるべき運命を有たざるを得ぬ。明治五―六年の好景氣の時期は、明治六年末に至り終局し、同七年には經濟恐慌が起つた。而して明治八―九の兩年は沈滯期を示した。

恰かも此時、上述の樂觀に更らに他の根柢を與ふべき第二の事件が起つた。第一の出來事は外來の影響に依つて惹起されたものであること前述の如くであるが、此の第二の出來事は、初めは全然對内的關係から出發したもので、時勢の進歩に從ひ對外的事件に變つたものである。それは卽ち戰爭である。明治十年の内亂である。此の内亂に於て、明治維新時の最高軍司令官、前陸軍大將西鄕隆盛が、嘗ては彼が其れに於いて最高の地位を占めてゐた新政府に對して宣戰したのである。之れは日本人が維新以來今日迄に經驗した唯一の内亂である。初は、新政體は著しく危殆に瀕するが如くに見えた。新政府の側には準備は全然なかつた。殊に財政の方面に於て然り。加之、國民は動搖した。然し古い日本の諺にある如く、禍は轉じて福となつた。新政體は首尾よくこの最初の試練に耐え、戰を終つた政府は其權力を增大した。叛亂は鎭定され、それと共に不安の時期は消え失せた。明治十年以降の數年は、新なる經濟的活動の時期を現出し、同十三年には其絶項に達した。

此の戰爭其れ自らは、一の對内的事件であつたけれども、其作用は、新政體の初期を特徵付けた出來事と殆んど同樣であつた。而して明治廿七―八年の對支那戰、並びに明治卅七―八年の對露戰の二つの對外戰爭に於いて、其類例を見出した。殊に經濟生活に及ぼした其好作用に於いて。かくて、戰爭は、外來の作用と相並んで、經濟生活を特惠する二大恩人と看做されることになつたのである。

明治十年の戰爭は、國民の間に彌滿する樂觀的謬想に第二の根柢を與へたものである。

即ち戰爭其ものは、其の繼續する間は、一の惡ではあるだらうけれども、其れが濟んだ後には、常に必ず經濟上の好景氣を齎らすものであり、從つて歡迎すべきものであるとの謬想これである。世界大戰後、大正九年以降、日本の經濟が嘗めた苦き體驗は、此の偏見の賜である。此の苦難に會するまでは、これを偏見なりと看破することが出來なかつたのである。

此の第二の出來事に、經濟上から見て、其の樂觀的根柢を與へたものは、明治の初年に於ける其れと、全く同一事であつた。其れは即ち紙の膨脹これである。紙片こそ西鄕との戰を支持し終に勝利を得せしめたものである。そは嘗て紙片が新政體に確固たる權力を與へたと同樣である。新政府の權力は紙を以て獲られた。そしてこれを危殆に瀕せしめた最大の危險も、亦同じく紙を以て克服されたのである。而も此の克服は新權力を更らに一層强大ならしめた。新政體の權力は紙幣の生んだ兒であると云ふも誣言ではあるまい。さればこそ國家指導者たちも、彼等に依つて支配される國民も、共に均しく紙幣に對して最大の崇拜を捧ぐるに至つたは、無理ならぬことゝ云ひ得よう。

此の紙幣崇拜は、若し近代日本に於ける最大の否な殆んど唯一の眞の財政家松方が無かつたならば、更らにもつと長く續き遙かに多くの禍を生み出したであらう。此の點に於て現代日本の最大の恩人は、伊藤でも井上でも況や大隈(財政、經濟上では時として最大の過誤を犯した)でもなく、實に松方であると斷言し得る。

松方の偶像破壞事業は、紙幣崇拜の進行を阻止した。然し紙幣崇拜を生み出した根本の誤謬は、容易には根絶されるに至らなかつた。松方が爲し得たところは、誤謬の外形を變へることだけで、誤謬の根源には觸れず、其れは依然持續され、而も其の內容は從前と大差ないものであつた。然らば彼はその形式を如何に變へたか。答、紙幣崇拜に代へた外國輸入貴金屬の影響と、それに基く銀行券の膨脹とに對する崇拜之である。これは企圖したところであつたか否かは、今論ずべき限りではない。事實の發展の示すところは、即ち左樣であつたのである。

支那との戰爭及び露西亞との戰爭は、對外的戰爭であつたと云ふ點で、明治十年の戰爭とは異なるものである。乍去、これらの戰爭が經濟上有利な後續作用を生み出したといふ點に於ては、後者と異る所はない。此の二つの對外的戰爭は、幸なる終局を告げた。而して、經濟的活況を喚起した。此事情は更らにまた日本人の根本的偏見を强め、凡ての戰

爭に就ての根强い樂觀を確保し、遂に大正九年に始つた苦しい窮乏期を將來する素因を作つた。素朴的に樂觀的な日本人は、明治十年、明治二十七―八年、明治三十七―八年の戰の後にそうであつた樣に、世界大戰の平和締結の後には、經濟的活況が來るであらうといふ信仰に耽つた。此の信仰が根本的に虛妄であることを看破して警告したのは少數の人々だけで、而も彼等の警告は何等の反響をも見出さなかつた。他の點では非常に洞察力に富んだ人々さへも、此の樂觀に耽り、次で來るべき不況期に對して準備することを全然等閑に附した。斯くて茲に現實の災害を更により大ならしめた最大の原因の一つが存したのである。

そして此の樂觀は、此の最後の場合にも、前の如くに其の忠僕たる通貨膨脹に依つて伴はれた。現在日本に於ける通貨膨脹は、殆んどその理由を見出し得ず、全然正當ならざるものである。世界大戰中の歐羅巴の通貨膨脹は、幾多辯明の餘地を有して居たとしても、日本の通貨膨脹には何等の理由もない。それは唯だ上述の說明に照してのみ理解し得る。それ以外にこれが原因を見出すことは全然不可能である。

これを要するに、新政體の始めに深く國民の心裡に根ざした二つの根本的誤謬、卽ち外國に由來する凡ての出來事に對する樂觀、及び通貨膨脹の有利なる作用に對する理由なき信仰、此の二者は、日本の經濟生活並びに日本の經濟政策の運動に特殊なる循環的性質を附與する最大の原因となつた。日本の經濟政策は、此の二つの根本的誤謬の支配の下に在つて、明治元年から大正十四年に至るその發展の中に、誤謬の循環性の反覆――實驗室の實驗の特性たる正確さと明瞭さとを以て、その來往を觀察し得るような反覆――を現はしてゐるのである。

四　日本經濟生活の特徵的循環性

私は言つた。二つの根本的誤謬が、日本の經濟生活と經濟政策とを支配し、而も其の誤謬の一往一來は必然的に循環的なものであつたと。今事實の叙述によつて、此主張の誤らざることを示さねばならぬ。

凡ての變化は、其れが國內に起らうが、國外に起らうが、兎に角日本では好感を以て迎へられて來たと云ふことは、十九世紀後半、凡ゆる變化が他の點ば姑く置き、少くとも經濟的發展の上に有利な作用を及ぼしたといふ事實と密接なる關係を有つ。此事實によつて

育まれた日本特有の民衆心理は、二つの實例によつて、これを洞察することが出來る。其の一は明治二十三年國會開設に際しての一般的心理狀態、其の二は最近時に於ける普通選擧の施行に關する民衆の期待これである。

國會の開設は、それが經濟生活に於いて好景氣を持來すが故に、國民の大部分によつて歡び迎へられたといふことを私が語るならば、外國の人々は、これを笑ふであらう。乍併之れは、現然たる事實其ものであつたのである。明治十五年乃至十八年の沈滯期に當り、殆んど凡ての階級の國民は、明治二十三年に國會が開設され而して其結果として經濟上の好況期が始るであらうと考へて、心を慰めてゐたのであつた。然るに明治二十三年は此の期待を裏切つて恐慌の勃發を見たが、其年の直前直後には好況が起つたのである。

國會開設は、國民の期待を充たし、經濟的見地から見て好い結果を生んだ。その次第は斯うである。國民は初期に於いては議會の任務を眞面目に理解した。從つて其の選出した代議士は、其多數についてこれを見れば、熱心に充ち充ち、而も義務に對し忠實な代議士であつた。(その後不幸にしてこの狀態は續いて居ない)。斯くて議會へ選出された代議士は、薩長兩藩閥に對して統一戰線を布き、その特典を打破し、この權力を失墜せしめんが爲めに、激しく政府に肉薄し、就中、豫算問題に於いて、突進した。政府は、また此の豫算戰に於いて、其權力を奪はれざらんことに鋭意し、財政の緊縮整理に努力し、又各般の行政事項に亘つて改善の實を擧ぐるに勉めた。(註)かくて國家の收入は支出を超過することの著しく、爲めに歳計餘剩は增加した。此の歳許餘剩こそ、明治二十七—八年の日清戰爭を軍事的見地からのみならず、財政的見地から見ても、また光輝ある結果に導くことを可能ならしめたものである。げに經濟的好況は既に戰爭の最中に出現した。

(註)其處にこそ財政狀態改善の唯一の眞の方策があると云ふこと、これは爭ふ餘地がない。然るに私の見る所では、佛蘭西國民は、最近、此の根本的眞理を全く忘れたかの如くに行動し、事態の根抵に徹することなしに、徒らに內閣を更迭し、財政案の表面を變へるだけしかしてゐなかつた。斯くの如きが、卽ち、少くとも佛蘭西滯在中の私の印象であつた。

かくて、あらゆる變化が國民に依つていよ〳〵熱心に歡迎される勢は助長せられた。そして、其の後も國民は依然として變らない。卽ち、前議會中(大正十五年一月此文起草)に可決された普通選擧の制度について、國民の期待するところは、同じく、現在國民が惱んでゐる長い經濟的

沈滯からの救濟これである。果して此期待が報はるべきや否や、國民は徒なる夢を見つつあるものではないか否か、其れは今私の論せんとするところではない。私は唯此事實を指摘すれば卽ち足る。

同じ考は、大隈・加藤內閣が獨逸に對して宣戰した時にも日本國民の間に行はれた。國民が此の決定を喜んで迎へたのも亦、獨逸との戰爭が、支那との戰爭若くは露西亞との戰爭と同じ樣な幸福な結果を經濟生活の上に齎らすであらう、と想像したからであつて、決して人類其ものゝ利益の爲めに此の宣戰を以て已むを得ざるものと信じた次第でないことは、私が其當時屢〻主張したところである。最も極端な國粹論者といへども、國民的否ショーヴヰニスト的立場からさへも、對獨墺戰について、合理的の理由を擧げ得ないのである。唯だ外國崇拜とそれに伴ふ經濟的樂觀とが國民の態度を決定したのである。ところが僥倖にも、世界大戰は、意想外なる富を日本に附け加へた。而して大正八年の初から大正九年の三月に至る間に於いて、空前の好景氣、未曾有の投機熱勃興時代を現出した。然るに大正九年三月に至つて、大瓦落が突發した。それ以來今日に至る迄、不景氣は繼續してゐる。國民は適從するところを知らなくなつた。しかし、傳統的の樂觀は依然として拔け切らぬ。私が指摘した二個の根本的謬想は、依然として其跡を絕たないでゐる。

此の二つの謬見は更らに二個の副產物を伴ふ。其一は貨幣の職分に關し、其の二は外國貿易の性質に關する。兩者は何れも共通の基礎を持ち、特殊日本的『メルカンチリズム』から生じたものである。

貨幣の職分に就て日本に行はれる有力な謬見は曰く、如何なる場合にも貨幣の過剩はあり得ないと。外國貿易の性質に就ての謬見は曰く、外國貿易は輸出の爲めに、而してこれに基く貴金屬の流入を主眼として營まるべきものであると。日本は常に貨幣缺乏の危險に曝されてゐるもので、其反對に通貨過多に對して警戒すべき理由を有たぬ。故にすべての通貨制度も通貨政策も貨幣缺乏の危險を目標としてのみ打ち建てらる可きものである。而して、外國貿易の主要使命は、此の缺乏を除却するに存すると。外國貿易の任務は國民の生活をより豐富にするにあり、從つて其眞の利益は輸入にありてふリカルド以來の經濟學の通說は、誰人もこれを顧みないのである。讀者或は反對して言ふであ

らう。これらは、何れもメルカンチリズム共通の謬想である。必ずしも日本に特有なる誤謬ではないと。論者よ。急ぎ判斷せずして待て。元より、歐羅巴のメルカンチリストは多かれ、少かれ、これらの謬説を言明してゐることは疑を容れない。乍去言明は實行ではない。彼れ等は、其言明するところを、言葉通りに實行することはなかつた。出來なかつたのである。實際生活が其れを拒否したから。

（註）今玆には、シユモラーや、ブユヒアーが嘗て試み、アッシュレーが之れを英國に紹介した如き、メルカンチリズム其もの、檢討を爲しつゝあるものではない。

此一點に、日本の特徴が存する。即ち日本に於いては、如上の謬想を、直ちに實際生活に移して、これを實現するに、何等の障碍を見ず、形の如くに實施せられたのである。最も極端なメルカンチリズムの時代に於いてすら、歐羅巴に於いて見出されたような計慮反省は日本に於いては一も之を見なかつたのである。げに、メルカンチリズムと其要求に符合する專制的警察國家とを十七・十八兩世記に於いて、事實上に實現した國は、世界中唯一日本あるのみであつた其の如くに、十九・二十兩世紀の日本はまたメルカンチリズムの二大支柱たる誤謬を、徹底的に實行した國であるのである。かくて、讀者は、私が、これを日本特有のメルカンチリズムと呼ぶ理由を、諒解し得たであらう。これ、繰返して云ふ如く、明治以後の日本の發展過程は、實驗室内の實驗に劣らざる鮮さを以て追究し得る所以である。

然らば問ふ。如上の事實が日本の經濟生活と經濟政策とに特殊な循環性を附與したのは、如何にして起つたかと。これに答ふることは難事ではない。開國によつて、世界經濟圏の内に入り込んだにも拘らず、以上の如き謬見に支配せられてゐる國民經濟には、自主自動の運動を現出することは殆んど不可能である。其の國民經濟は、終始唯だ一に外國貿易の變遷消長によつて專制せられることを免れない。即ち一方には商品が輸入超過なるか輸出超過なるか、他方には貴金屬は流出するか流入するかの二事實が全經濟活動を壓倒的に支配する。然るに輸出入貿易の趨勢並に貴金屬流出入の運動は、我々が今問題とする時期については、世界的に甚だ循環的であつたことは私の絮説を須たざるところである。此の如き甚だ循環的な運動を、殆んど唯一の支配者と仰ぐ日本の國民經濟の發展が循環的であらねばならなかつたことは自明の事である。而して此の運動に追從するだけが、其の任務であつたところの日本の對外經濟政策が、必然的に循環的たらざ

るを得ざること、亦多言を要さないことである。

五　日本に於ける循環運動の概觀

實驗室の實驗同樣の正確さを以て觀察し得られる事實とは次の一事を指す。日本に於いては貴金屬の著しい流入あるとき好況期が來り多量の貴金屬が國外に流出するとき恐慌又は沈滯が現はれる。此の疑ひのない而かも容易に看取し得る事實が、其時々の經濟政策の方針を左右する。日本の政治家に取つては、不況の出現程恐ろしい敵はない。政府にして如何に正しく而して健全なる經濟財政政策を行ふとも、若しそれが不況を生せしめ又は現存の不況を永續せしめるときは、必ず國民の不評を招き終には崩壞する。反對に好況期を齎す政府は、其の經濟・財政政策は勿論、一般政務について如何に無能であつても、比較的安定を樂しみ、稍〻長命を必し得る。從つて、政權を握る政治家等は、經濟上の好景氣の招來又は其存續に、而して不景氣の取り除けに、其の全心全力を傾倒する。而して、此の努力が、如何に大なる犧牲を、國民の眞の利益、國家の眞の健全に對して課するとも、其は殆んど措いて問はないのである。

好景氣とは高き物價水準を意味する。從つて政府或は物價の引下げを標榜することありと雖とも、決して眞面目に、其の聲明の實現に努力するものではない。物價の水準の低落が誠に政府施設の結果として、入り込み來るとき、それは、經濟上の沈滯又は不景氣を招來することを免れない。而して、其れは、其の政府の終局を意味する。此の因果關係は、元より政權者の熱知するところである。であるから、日本に於いて、內閣に望むに、物價水準引下げの衷心の誠意からの遂行を以てするほど愚かなことはないのである。これ卽ち日本に於いて、今當面の急務である金輸出の解禁について、政府が口には、其實現を公言しつゝ、實際には、決してこれを欲せず、唯國民を釣るに止る所以である。何となれば、貨幣價値の下落せる現日本に於ける金輸出の解禁は、其れに先つて、物價水準の引下げが敢行せられるか、又は、其の用意を欲せざるなれば、解禁後に於いて、當然の作用として、其れが起るに相違ないから。唯だ松方級の政治家にして始めてこれを敢てし得る。低級財政家にはこれは望み難いことである。

(註)濱口氏を藏相とする現內閣は、或は此原則に對し、一の例外を提供するかも知れない。

(昭和四年八月附記。右は今より三年前に私の書いたところである、今玆に濱口氏を首相とし、井

上氏を藏相とする現內閣は、初めて、不景氣招來を敢てしても、金の輸出解禁を眞面目に實現せんとするものゝ如くである。果して眞に然るならば、其は實に稀有の慶事であつて、口先斗りで、何等の實行のこれに伴はず、一の經綸、一の抱負もこれを示めすことなく、唯だ徒らに、狐疑逡巡しつつある間に、國民に惜まること一もなくして、ついに倒壞し去つた前の內閣に比して、甚だ顯著なる對比を爲すものと斷言せねばなるまい。我々は、現內閣が實行上如何なる業績を示めして、其公言を正當づけるかを監視して居らねばならぬ)。

高き物價水準を意味する好景氣は、日本に於ては常に、前驅として、通貨流通高の膨脹を有つ。古き、または新しき、貨幣數量說の當否について論爭せんとする人々をして擅に論爭に耽らしめよ。次の一事だけは論爭を超越して居る。曰く、日本に於いては、物價指數の運動は、大體に於いて、通貨流通額の增減と相提携して居ると。

他方に於て、流通通貨の增加就中銀行券の增加と、これに伴ふ物價騰貴とは、原則として輸入を刺戟し、反對に輸出を困難ならしめる作用を有つ。その結果は、卽ち貴金屬の流出であつて、それは更に、兌換銀行券條例の正直に遵奉せらるゝ限りは、銀行券流通の減少を來す。(勿論、この說明は現在に對しては、妥當せぬ。第一、金の輸出禁止に依り、第二、事實上の兌換停止(法律上は然らず)と、大正十三年十一月金の拂下價格を法定率以上に引上げたことに依つて、此の自動的相關機能は、著しく減殺されてゐるから)。

貴金屬の輸出と、之に相應する銀行券流通高の減少とは必然的に國內に流通する貨幣量を減せしめ、其の結果一般物價水準の低下を來し、更にそれは好況を消滅させ、沈滯又は不況を齎らし來る。

此の因果の連鎖の中にこそ今日迄の日本經濟政策に對する主たる危險が存する。此の連鎖の進展を敢て許容する政府あらば、其は必ず顚落するものと覺悟してかゝらねばならぬ。顚落を免れんと欲せば此の因果連鎖の進出を防止せねばならぬ。かくて、一政府は倒れ、他の政府これに代るも其爲すところは、全く同巧異曲である。更代するものは俳優のみ、劇の筋書は常に同一である。其筋書とは、人爲の施設方策によつて、海外から貴金屬の流入を促すことこれである。其のスローガンは、曰く輸入の可成的防止、輸出の可成的奬勵、國內に於ける金採掘の保護奬勵によつて、幣制を擁護せざる可からずと。

殊に人の好んで提撕するスローガンは、外資輸入の其れである。曰く日本は資本に貧し、勞働は廉價である。(ルヨ・ブレンタノ著『勞働賃銀と勞働時間との勞働効程に對する關係』の日本譯書(明治三十二年東京刊)に於いて、私は、日本の勞働を以て、歐洲の勞働より廉價なりとするは一の大なる誤謬なることを示唆して置いた。)此の廉價なる勞働を合理的に活用する爲めには外國資本の輸入を急要とす

ると。此の立論に於いて、最も注意に値することは、外國資本の輸入とは、必竟するに、主として、貨物の過超輸入によりてのみ實行し得られるものなるの道理を全く忘れて、外國資本は、主として貴金屬の形に於いて、輸入せられるものであると、謬信してゐることこれである。外資輸入を唱導する張本人たちは、元より必ずしも此謬見に囚はれてゐるものみではない。彼等の或ものは、外資輸入によつて、窮境から脱出せんと企てつゝある失脚投機者流であり、また、或ものは、外資輸入に伴ふ好景氣の招來によつて、失へる政權を恢復し、若くは其握れる政權を更らに强固にせんと目論む政治家である。唯彼れらは、國民を其味方と爲すべく、揚言していふ。貨物輸入の制限と、外資輸入とは、優に兩立し得ると。公平なる觀察者は其妄を笑ふであらう。しかし、これが事實其ものなるを如何せん。殊に波佐見鑛山と稱する無用の空金鑛に多額の不良貸付けを敢てして、一大銀行を難局に陷れた其主責任者にして、金輸出禁止解除論の急先鋒たるなどの滑稽劇が演ぜられて居るのである。矛盾撞着も玆に至つて極れりと言はねばならぬ。

筋書は何時も同じものが繰返へされる。然し經濟政策は更代する。好景氣——輸入增加——貴金屬の流出——紙幣流通額の減少——景氣の頓挫——外資輸入と人爲的輸出奬勵——好景氣、此の循環的運動は、絶えず繰返される。それは一の不可避的約束の下に立つ。其循環は、實際生活の上にも國の政策の上にも、現はれる。次の表は、此の過程を一目瞭然たらしめるであらう。

次表から我々が明らかに看取することは、恐慌、沈滯、不況、活況、好況と云ふ循環列が、殆んど常に同じ旋律に從つて轉回すること、並びに此の循環列が明治元年、乃至十年、十一年乃至十七年、十八年乃至二十七年、二十八年乃至三十七年、三十八年乃至大正四年と云ふ、その長さの殆んど相等しい期間に分れてゐることこれである。これらの時期は、明治十年、明治二十七年—八年、明治三十七—八年、大正三年以降等の四大戰役と明治十八年に於ける金兌換銀行券制度の樹立に依つて、其れ〳〵に區劃されて居る。戰爭は非經濟的事件であるが、之れが何事にも勝りて、經濟生活に於ける、この循環的發展を條件付けてゐるのである。

此の事實は、日本の經濟生活に於ける循環性は、自國の經濟的發展に內在する法則によるよりは、却つて、外國の影響に由來するといふ私の主張の正しいことを示すものである。

年	西暦	貿物輸出入 入超 (円)	貿物輸出入 出超 (円)	金銀輸出入 入超 (円)	金銀輸出入 出超 (円)	流日銀高 (百万円)	日銀兌換券	
明治元	一八六八	—	一〇四〇〇〇〇	—	—	—		
二	一八六九	一〇七、八六四、六三五	—	—	—	—		沈滞
三	一八七〇	一九、一七六、六三四	—	—	—	—		
四	一八七一	三、九四八、一一九	—	—	—	—		
五	一八七二	九、一四八、一六六	—	—	—	—		物価昂騰
六	一八七三	六、四一一、九四九	—	—	—	—		反動
七	一八七四	四、一四四、四〇八	—	—	—	—		恐慌
八	一八七五	一一、六四四、四七六	—	—	—	—		不況
九	一八七六	—	三、七四六、八四九	—	—	—		
一〇	一八七七	四、〇七三、四八一	—	—	—	—		戰争
一一	一八七八	六、八六六、六四四	—	—	—	—		活況
一二	一八七九	四、七七七、一三三	—	—	—	—		
一三	一八八〇	八、一三一、一一四	—	—	—	—		物価昂騰
一四	一八八一	一三、一一三、六八	—	—	—	—		反動
一五	一八八二	—	八、一一五、一三七	一、七三〇、五六六	—	—		通貨収縮、不況
一六	一八八三	—	七、六三一、一七八	一、一六四、九三六	—	—		
一七	一八八四	—	四、一八八、八一九	六〇六、六六七	—	—		
一八	一八八五	—	七、七八、七三三	三、一六〇、三三五	—	一〇三・六		日本銀行券創始
一九	一八八六	—	一六、七〇七、八一	—	四三四、三四四	一一三・三		活況
二〇	一八八七	—	八、一〇三、四二九	—	一、一六四、一二二	一一六・三		物価昂騰
二一	一八八八	—	一三〇、一一六	八九六、〇四八	—	一三一・二		
二二	一八八九	—	三、九三六、九三九	八、六四四、一七	—	一三八・七		
二三	一八九〇	一三三、一一三、〇七三	—	—	二一、三七七、九四	一三三・九		恐慌
二四	一八九一	—	一六、〇〇〇、〇〇四	一一、四三三、三六一	—	一六一・一		財政改革、銀価低落
二五	一八九二	—	一九、七七六、六四四	一三、一三四、〇〇四	—	一六三・三		
二六	一八九三	—	一、四三三、六九三	—	一、一〇一、七〇一	一八四・一		
二七	一八九四	四、一三三、六九	—	—	七、三九三、四八	一六一・九		戰争
二八	一八九五	—	〇〇六、一三七	—	一一、四三三、三三	一一〇・六		活況
二九	一八九六	四三、〇七一、六六	—	—	一三、七四四、三四四	一一一・九		
三〇	一八九七	一一、四三三、三三	—	—	六六、六六六、六三三	一三六・八		反動
三一	一八九八	一一一、七七七、〇四四	—	—	一〇〇、四三七、七四四	一〇三・四		
三二	一八九九	一三、四四四、一一一	—	—	八、九九三、一三四	一三三・一		
三三	一八九〇〇	—	一、一六六、一一一	—	—	一四六・六		物価低落
三四	一八九一	—	一〇、一一一、一一一	—	—	一四一・一		恐慌
三五	一八九二	—	一〇〇、〇〇二、一一二	—	一、〇一一、三三六	一三三・一		沈滞
三六	一八九三	—	一一、一一一、〇〇三	—	〇、六〇六、一一一	一三一・九		
三七	一八九四	—	一〇〇、〇〇〇、〇〇四	—	—	一六六・六		戰争
三八	一八九五	—	一一、一一一、一一一	—	一、一三一、一一六	三一一・八		外債
三九	一八九六	—	一〇〇、〇〇〇、〇〇七	—	一一一、四一六、一一一	三六九・九		物価昂騰
四〇	一八九七	—	一、六一一、〇一七	—	—	三四一・一		反動
四一	一八九八	—	一〇〇、〇一一、一一八	—	一、一三一、九八四	三四一・八		恐慌
四二	一八九九	—	一〇〇、〇〇〇、〇〇九	七三一、〇〇一、三三	—	三四一・八		沈滞
四三	一八九〇〇	—	一、一一一、一一一	—	—	三四一・一		外債
四四	一八九一	—	一、一一一、一一一	—	一〇、〇一一、一六一	三四一・一		活況
四五	一八九二	—	一〇一、〇一一、一一一	—	—	四〇一・六		物価低落
四六	一八九三	—	一、一一一、一一一	—	一、一三〇、〇一八	四三三・四		
四七	一八九四	—	一、一一一、一一一	—	一〇、四四四、一六四	三六三・六		輸入手形恐慌、戰争
四八	一八九五	—	一、一一一、一一一	—	一〇、一六九、四六六	四三〇・一		大出超
四九	一八九六	—	一、一一一、一一一	七一、九三〇、四三三	—	六〇一・一一		
五〇	一八九七	—	一、一一一、一一一	一三六、四四六、六六六	—	六一一・一		
五一	一八九八	—	一、一一一、一一一	一三七、〇四〇、一一七	—	一一四・七		輸出手形恐慌、休戦
五二	一八九九	一一一、一一一、〇一一	—	一一一、一一一、一一一	—	一三三・一		物価昂騰
五三	一八九〇〇	一一一、一一一、一一一	—	一四一、〇〇一、一一一	—	一四九・一		物価昂騰、恐慌
五四	一八九一	一一一、一一一、一一一	—	一三八、一一一、一一一	—	一四四・一		沈滞
五五	一八九二	一一一、一一一、一一一	—	—	—	一三六・一		
五六	一八九三	一一一、一一一、一一一	—	—	—	一三一・一		
五七	一八九四	一一一、一一一、一一一	—	—	—	一一〇・六		活況
五八	一八九五	九九九、九九九、九九九	一〇〇、一一六、六六六	—	一一一、一一一、一一一	一一一・九		
五九	一八九六	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一三・九		反動
六〇	一八九七	九九九、九九九、九九九	—	六六一、一一一、一一一	—	一一六・八		
六一	一八九八	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	一〇〇、一一一、一一一	一一〇・四		
六二	一八九九	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		物価低落
六三	一八九〇〇	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一一・九		恐慌
六四	一八九一	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一一・一		沈滞
六五	一八九二	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		
六六	一八九三	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		
六七	一八九四	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		活況
六八	一八九五	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一一・九		
六九	一八九六	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一三・九		反動
七〇	一八九七	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一六・八		
七一	一八九八	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	一一一、一一一、一一一	一一〇・六		
七二	一八九九	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		物価低落
七三	一八九〇〇	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一一・九		恐慌
七四	一八九一	九九九、九九九、九九九	—	一一一、一一一、一一一	—	一一一・一		沈滞
七五	一八九二	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		
七六	一八九三	九九九、九九九、九九九	—	—	—	一一〇・六		

圖　經濟生活と經濟統計の相関性

前表が我々に與へる姿容を、更らにより明瞭にする爲めに、私は、次に毎五年平均表を作つて見た。これによつて、日本經濟生活の循環的發展に於ける外國貿易の趨勢と貴金屬流出入の運動とが演ずる役割は、更に著しい明白さを以て顯はれるであらう。

年次	貨物輸入（百万円）	貨物輸出（百万円）	貨物輸出入超過	金銀輸入（百万円）	金銀輸出（百万円）	金銀輸出入超過
明治元年—明治五年	一二三	七二	五一		〇・七八九	
明治六年—明治一〇年	一三三	一二	一一		三九・〇〇六	
明治一一年—明治一五年	一六三	一五一	一三		二九・二一一	
明治元年ヨリ累計	四〇九	三四〇	六九		六九・〇六六	
明治一六年—明治二〇年	一六四	二〇九	四五			
明治二一年—明治二五年	二六八	三六三	一五		三一・八九五	
小計	三二二	五三二	六〇		二六・四六八	
明治元年ヨリ累計						
明治二六年—明治三〇年	七二六	六二〇	九		五九・六六五	
明治三一年—明治三五年	一三一三	一〇九六	一一七		五三・五四	
小計	二〇四九	一七六六	三三三		一一二・五九五	
明治元年ヨリ累計						
明治三六年—明治四〇年	二〇九〇	一七八六	三〇四		六・〇六一	
明治四一年—大正元年	二四一七	二三二四	一〇三		四四・二六一	
小計	四二一七	四〇一〇	一一七		五一・二九四	
明治元年ヨリ累計						
大正二年—大正六年	三六五〇	四六六二	八九〇		三六・九六七	
大正七年—大正一一年	九六八二	八九〇〇	七九二	一〇三	二四・五五五	二一・二三五
小計						
明治元年ヨリ累計						
大正一二年—大正一四年（一月乃至三月）	一九八二	一八七二	一一〇	一四〇	三・九四二	一・九四二
小計	一五四三	一四三二	一一一	一四〇	三・九四二	一・九四二
明治元年ヨリ累計	二二五九	一九八二	三二九	二一〇	四・五六〇	二・三五〇
大正十四年三月三十一日　日本銀行正貨準備高						一〇五九・〇〇四

右の表は次の諸事を物語る。

（一）日清戰爭直前の二つの五年間卽ち明治十六年乃至二十年及び二十一年乃至二十五年、並びに此の點に於て全く當然のことではあるは、——大正二年乃至六年の期間を例外とすれば、日本は常に輸入超過國であり、而して明治元年乃至大正十四年（三月まで）の累計殘高を合計するときは、輸入超過總額は約二十億八千九百萬圓に達する。

（二）日本に擴まつてゐるメルカンチリスト的見解に從へば、右の貨物輸入超過高に略ぼ相等しい貴金屬輸出超過があつたるべき筈である。然るに事實は左樣でないのである。勿論最初の三つの毎五年期は、貴金屬の流出超過が貨物輸入超過と殆んど同額で、各約六千九百萬圓に達して居た。然るに明治十六年から同二十年に至る期間に於ては、事態は全然一變し、貨物の輸出超過を見た毎五年期間のみならず、貨物輸入超過を示した

毎五年期間に於ても、貴金屬の輸入は輸出を超過するに至つた。又、貴金屬の輸出輸入額は、貨物の輸出入額と何等の比例を保つてゐない。明治十六年以降の各五年期を、二個づつ組み合せて、各十年期を作つて見ると、此各十年期は一の例外なく貴金屬輸入超過を示してゐることを見るであらう。而して、今大正元年を以て、計算を打切つて見るとすると、最初の三つの毎五年期、即ち明治元年乃至十五年は、六千九百六萬六千圓の貴金屬の流出超過を示してゐるのに、明治元年乃至大正元年の期には、三千百二十二萬三千圓の輸出超過を見出す。此の數字の對照によつて、後の六つの五年期、即ち明治十六年乃至大正元年に於ける貴金屬の輸入超過は、實に、三千七百八十四萬三千圓に達したことが分る。

大正十四年三月を以て計算を締切るときは、貴金屬の輸入超過が十億八千二百萬圓に達してゐて、日本銀行正貨準備高はこれと略〻同額の十億五千九百萬圓に達することを見るのである。

(三)　私が考慮しつゝある期間(明治元年乃至大正十四年三月)に於いて、日本は外國貿易の超過額として、貨物に於て二十億の餘剩、貴金屬に於て十億の餘剩を得たことになる。貨物輸入超過は、日清戰爭前の明治廿五年には僅か九百萬圓に過ぎず、日露戰爭開始の二年前明治三十五年には三億三千二百萬圓であつたことを思ふと、如上の數字は巨大と云はねばならぬ。即ち適當なる意味に於て云ふ外國貿易なるものは、日本に於ては、日清戰爭以後について、始めて、これを言ひ得るものなることを知るべきである。

(四)　貴金屬の著大なる流入を見たのは次の諸期間である。明治二十四年乃至二十五年、二十九年乃至三十年、三十五年、三十八年乃至三十九年、四十一年乃至四十二年、大正五年乃至六年、八年乃至十一年これである。これら期間は殆んど常に好景氣の出現を伴つた。そしてこれらの貴金屬の大流入が、著大なる貨物輸出超過の結果であつた明治二十四年乃至二十五年を例外とすれば、何れも、人爲的手段の結果であつたのである。即ち國債又は自治體債の外國に於ける發行と外資輸入は之れであつた。これらは皆金屬の國內流入を特に目的として企てられた人爲的施設であつたのである。

これによつて、我々は、日本に於ける好景氣は、常に外國からの貴金屬の大流入に伴ふことを例とするものであることを確知し得るのである。

六　日本經濟政策の發展を劃する各時期

以上、經濟生活の過程について、就中其の外國交通との關係について觀察したことは、また、同時に對外關係を主とする經濟政策についても、これを看取することを得るのである。

今これを一目瞭然たらしめるには、次きの如き時期を劃するを以て便なりとする。

第一期、明治元年新政體の始めから、西南戰爭に續く好景氣の時期(明治十二年)まで(十一年間)

第二期、明治十三年輸出貿易奬勵の爲めの爲替取組制度創始から、二十二年其の制度の廢止に至るまで(十年間)

第三期、明治二十二年西洋に倣つた爲替銀行の設立から、明治二十九年日清戰爭に續く好景氣の時まで(八年間)

第四期、明治卅年金本位制實施から、明治三十九年日露戰爭に續く好景氣の時まで(十年間)

第五期、明治四十年の反動期から大正三年世界大戰第一年の終りまで(八年間)

第六期、大正四年の好況期から今日迄(十年間)

今これら各期について略述を試みる。

第一期　明治元年より十二年に至る

此の期間はこれを徹底的開國の時代と稱すべきであらう。而して內に對しては、力强き經濟政策が行はれた。政府は國民經濟の向上發展を唯一の目的とする各種の施設を企て、機關を興し制度を立てた。シュモラーやブュヒアーが第十七・十八兩世紀の佛國・プロイセン・及び其他の歐洲諸國について、言葉の善き意味に於て、メルカンチリスト的として稱揚したところのことは、日本に於て、盛んに行はれたのである。明治の初約十五年間に行はれた此のメルカンチリズム政策は、德川幕府の其れとは、全く正反對のものであつた。後者は如何にして鎖國を支へんかに心を碎いたが、前者は、極めて大膽なる門戶開放を大方針としたものである。

從つて外國との關係は、國の門戶が廣く開放されて居れば充分であつたので、其以上、または、其れ以外、格段の政策を講ずる必要は感ぜられなかつた。外國品の輸入は、如何なる事情の下に於ても、誰だ歡迎せらるゝ一方あるのみ、これに制限を課するが如きことは、少しも考へられなかつた。外國品にして有用にして善良なるものならば、これを輸入するに少しも躊躇しなかつた。政府は其の對外政策に於ては、極端なる無頓着主義に耽つて

ゐたものゝ如くに見えた。しかし、其れは無頓着ではなかつた。門戸開放主義の徹底的實現に外ならなかつたのである。

英國經濟學の自由貿易學派の貿易學説――恩師ブレンタノが其の商業政策の講義竝に其の著『自由貿易論の論據』に於ていとも明晰に説いて居る如く――が外國貿易の眞の利益について教へてゐるところは、明治元年より同十五年に至る日本の實例に於て最も雄辯なる、證人を見出す。曰く『外國貿易の眞の利益は輸入にあつて輸出に存せぬ』と。日本の國民經濟は、其輸入貿易によつて、成人したのである。此眞理は、不幸にして、明治十五年以後に至つては、日本の經濟政策家によつて、殆んど全く忘れられるに至つた。それにも拘らず、事實それ自體は依然として爭ふ餘地を止めぬ。日本の國民經濟は、其の今日までの成立からこれを見れば、大體に於て、其れが輸入超過國たることを餘儀なくする外はなかつたのである。

何ものも此の事態を變へ、外國貿易の眞の利益は輸入に存するてふ眞理を覆へすことは出來ない。明治十五年以後の外國との關係に於ける日本經濟政策の發展は、此の眞理と其れに伴ふ必然の事物の進行とに逆行する徒勞の一連續記錄であつた。

第一期は更らにこれを二小分するを得る。其前期は、明治元年から明治七年恐慌の勃發まで、其後期は、明治七年から明治十二年好景氣時代まで、これである。

前期(明治元年――明治七年)明治新政府の成立した時に於ける、舊幕府發行の流通貨幣額は略々左の如くであつた。

（端數切捨）

金貨	八七、六一〇、六五二円
銀貨	五二、六六五、七八七
銅貨・青銅貨・鐵錢	六、〇三三、一二七
合計	一四六、三〇九、五六八
各藩發行の藩札	二四、六四三、二〇三

幕府は紙幣を發行しなかつたことは、人の熟知するところである。藩札は、明治四年廢藩置縣の際、新政府これを承繼して政府紙幣とした。

是丈けの貨幣が大體に於て民間に流通してゐたのである。しかし新政府はこれから何等の利益をも受けることは、元より出來ない。從つて新政府は、自已の需要を充す爲めに、新たに、紙幣發行の手段を取らざるを得なかつた。正貨の蓄積は其の手中になかつた。其の企て得ることは唯紙幣を製造する事だけであつた。即ち由利公正の言つた如く明

治政府は、紙幣によつて、其權力を得、またこれを支持し得たのである。新紙幣の發行はそれだけの通貨膨脹を意味する。其膨脹の額は幾何であつたか。明治元年新政府の始から同二年十一月迄政府の歳入は八百三十三萬圓で、歳出は五千百二十九萬圓に達した。其不足額四千二百餘萬圓は全く政府紙幣の新發行に依つて支辨されたのである。明治四年末には約六千萬圓の政府紙幣が流通場裡にあつた。これに加へて政府が繼承して政府紙幣とした藩札の總額二千四百六十萬圓があるから、二口合計約八千餘萬圓に達したのである、これは當時の日本に取つては非常な多額であつた。

此の莫大な紙幣流通高こそ、明治五年の好景氣を生み出した原因である。今日迄の日本の經濟生活を支配した最初の循環列　通貨膨脹――好況はかくして開かれた。否、それだけではない。次いで日本の經濟的發展の第二の特性が出現した。それは卽ち外資の輸入である。此の事實の起つたのは、明治三年で、同年百萬磅の英貨日本公債が英吉利に於て發行された。その用途は、東京と横濱を結ぶ日本最初の鐵道の建設であつた。此の募債は、明治五年の好景氣の招來に與つて大なる力であつた。斯くて、こゝに第二の循環列　外資の輸入――好況期が始められたのである。

明治五年の好景氣は、一般物價水準の昂騰を伴ひ、その結果、その時代としては極めて著しい貨物の輸入超過と貴金屬の流出超過とが現れた。明治七年の恐慌はかくして來り、次の二ヶ年卽ち明治八・九年は深刻な不況に陷つた。

後期(明治七年――明治十二年)

後期は不況期を以て始まる。然るに日本の經濟生活に第三の特質を與ふべき運命を擔つて居た事件は間もなく起つた。之れは卽ち戰爭である。明治十年の西南戰爭が、何故に不景氣時代に結末を與へ好景氣を再開することになつたか。其理由は至極簡單である。戰費支辨の爲めに行はれた通貨膨脹の賜これである。これに加へて、明治九年の改正國立銀行條例は百以上の國立銀行の創立を促した。これらの國立銀行は何れも銀行券發行の權能を有してゐたものである。

政府紙幣の發行は、明治五年以降、何等著しい增加を見なかつた。次表を見よ。(百萬圓以下切捨)

明治五年	九三(百万円)	明治八年	一〇一(百万円)
明治六年	九七	明治九年	一〇五
明治七年	九六		

明治十一年には、此の額は、一億二千九百萬圓に達し、これに加へて諸國立銀行の發行券がある。從つて流通券の總額は、左の如くであつた。

	政府紙幣	國立銀行券	合計
	百万円	百万円	百万円
明治九年	一〇五・一	一・七	一〇六・八九
明治十年	一〇五・七	一三・三	一一九・一四
明治十一年	一二九・四	二六・二	一六五・六九
明治十二年	一三〇・三	三四・〇	一六四・三五

明治十三年十一月には最高點に達し、總發行高は一億七千萬圓となつた。戰爭直前、即ち、明治九年末の發行額と比較するときは、此の數字は六千三百萬圓即ち五割九分の增加を顯はす、物價も之に相應じて騰貴した。但し、明治三十三年以前の日本の物價指數は、必ずしも正確でないことを忘れてはならぬ。

明治九年	一〇〇・〇	明治十三年	一三六・八
明治十年	一〇四・七	明治十四年	一五一・九
明治十一年	一〇八・五	明治十五年	一四〇・五
明治十二年	一二九・八		

明治九年に於て三百七十四萬圓の出超を示してゐた外國貿易は、通貨膨脹の到來と共に、全然狀態を變更した。即ち、次表の示す如くである。

	貨物		金銀	
	出超	入超	出超	入超
	百万円	百万円	百万円	百万円
明治九年	三・七四六		二・四〇八	
明治十年	—	四・〇七二	七・二六七	
明治十一年	—	六・八八六	六・一三九	
明治十二年	—	四・七七七	九・六四四	
明治十三年	—	八・二三一	九・五八四	
明治十四年	—	〇・一三二	五・六三四	

斯の如くにして產み出された狀勢は、經濟政策の循環の顚倒を惹き起し、第一期徹底的門戸開放時代は、茲に終焉を告げ、特殊日本的メルカンチリズム政策が新たに到來するに至つた。

第二期　明治十三年より二十三年三月に至る

此の時期の特徵は、一方に於ては、外國との關係に關する從來の政策の一掃的徹廢と人

爲的輸出奬勵輸入抑壓の政策の開始これであり、他方に於ては、眞面目に遂行せられた通貨收縮政策の實施これである。第一の政策は、第二の政策と密接に關聯して居る。この通貨收縮政策は、嘗に過多に發行せられた紙幣を回收することのみならず、此の紙幣を全然廢棄して、これに代ふるに正貨兌換券を發行することを目的とした。此の計畫を實施する爲めには、日本への貴金屬(當時は銀)の流入を極力促すことに努力した。此目的を達すべき手段として、國家の統制下に於ける外國爲替制度が創設せられた。それは當時『御用外國荷爲替』と稱せられた。國家に依る外國爲替統制制度の謂である。

此の制度は、銀の國內流入を促進する點に於ては、全體としては運用宜しきを得たと言ひ得る。此制度實施期間に於ける、貴金屬の流入、流出超過は、次の數字の示す如くであつた。

	流出超過	流入超過
	百万円	百万圓
明治十四年	五・六三四	—
明治十五年	—	一・七三〇
明治十六年	—	二・二九四
明治十七年	—	〇・六〇六
明治十八年	—	三・二九〇
明治十九年	〇・四五四	—
明治二十年	二・一六四	—
明治二十一年	—	〇・八九九
明治二十二年	—	八・九八四

明治二十三年三月、此の制度は廢止せられ、正式な歐洲流の外國爲替業を營む銀行これに代つて創立せられた。此の銀行(横濱正金銀行)は今も尙ほ存續して居る。但し此銀行も亦輸出奬勵、輸入防止の目的の爲めに、政府の著しい干渉の下に立つを免れなかつたことを記して置かればならぬ。

通貨收縮政策の結果、紙幣發行高は漸く減少を示した。卽ち左の如し。

明治十三年(一　月)	一七〇、一五七、四七七円
明治十三年(十二月)	一五九、三六六、八三六
明治十四年(十二月)	一五三、三〇二、〇一二
明治十五年(十二月)	一四三、七四五、三六三
明治十六年(十二月)	一三二、二七五、〇一二

明治十七年(十二月)	一二四、三九六、一七五
明治十八年(四　月)	一二〇、六六九、四八八

最高數字(十三年一月)と比較すれば、最低數字(十八年四月)は、五千萬圓卽ち二割九分の減少を顯はして居る。かくて明治十八年五月、政府紙幣及國立銀行券に代るべき日本銀行兌換券は創められた。

かく通貨收縮政策が遂行せられた此期間は、經濟的沈滯の時期であつたことは、多言を要せざるところである。就中明治十四年乃至十八年の間に甚だしかつた。

私が前に、日本の財政經濟政策について言つたことは、茲に、松方其人あるによつて、一の殆んど類例なき除外例を見出す。松方は、其の通貨收縮政策が經濟的沈滯を產むべきこと、從つて、彼自らは、當然不人望の對象となるべきことを充分知悉してゐたが、彼は自己政權の保持よりも、日本國の財政の健全化をより高く評價してゐた。これは、日本の政治家中にあつては、甚だ稀有なことである。殊に對獨戰の責任者たる大隈の如きは、其の反對極に立つものと云はねばならぬ。唯だ茲に甚だ遺憾とすべきは、此の同じ松方が、後に至り、金銀の輸入超過を、如何なる價を拂つても歡迎すべきものなりとする一般の謬見に雷同するに至つたことこれである。彼は、正貨準備の甚だ枯渴したる一八九〇年代、並に兌換制度實施後、正貨の流出によつて、其の基礎の一時危殆に置かれた頃の苦い經驗に囚はれすぎて、異れる時代を異つた眼を以て見ることを妨げられたのである。日本の諺にいふ、糞に懲りて膾を吹くと。

明治二十年から同二十二年までは、好景氣の時代であつた。これは、特に松方の賜といはねばならぬ。兎に角それは、他の期間と同一視さるべきものではない。

第三期　明治二十三年三月より二十九年に至る

此の期間は明治二十三年、外國爲替制度の實施、これに續く——疾く豫期せられてゐた——明治二十三年の恐慌勃發に始り、明治二十八年乃至二十九年の好況の年を以て終る。

明治二十三年の恐慌は兌換制度の法規の上に將來重要なる關係を有つべき一つの改革を持來たした。卽ち此の恐慌に對抗すべく兌換券正貨準備の嚴密なる原則に、緩和的間隙が作られた。日本銀行は、豫め大藏大臣の認可を得、國庫に發行稅を納めると云ふ條

件の下に、必要の場合、正貨準備額に依り制限された發行限度を超えて、兌換券を發行し得る權能を認められたことこれである。而して、この制限外發行の額は初めには、五百萬圓の限度を超ゆべからずと定められた。

兌換銀行券制度の創設者である松方は、また、此の根本原則の打破の責任者である。此一事は甚だ遺憾とすべきことである。斯く一度作り出された間隙は年を經るに從ひ彌彌擴大せられ、金屬準備を要せざる兌換券發行額は、更らに、七千萬圓から八千五百萬圓に引上げられ、數年の後には一億二千萬圓に高められるに至つた。此の二個の龜裂が主たる原因となつて、其の後殆んど不景氣到來毎に銀行券發行高は人爲的に增加され、從つて循環的傾向を强めるに至つたのである。但し松方の名譽の爲めに辯じて置かなければならぬ一事は、彼は始めに於いては、此の制限外發行を出來るだけ狹い範圍内に限局するに努め、事實上これを實現したことこれである。即ち、當時に於ける限外發行高は、法定限度の十分の一を超えず且つ三月三日から三十一日までの約三十日間繼續するにすぎなかつたのである。

明治二十七年支那との平和が破れた。此の戰爭は、すでに述べた樣に、日本の財政が此の上もなく健全であつた時に突發したのである、此の事情は、銀行券發行高に反映してゐる。即ち其れは戰爭繼續中輕微な增加を示すに過ぎなかつた。

平和の締結と共にこの事態は變化した。明治二十八年六月以降、法定發行限度を超過する限外發行は激增した。政府は支那からの多額の償金の收受を見越して、此の巨大な限外發行を促がしたのである。

銀行券の總發行高は次の額に達した。

明治二十七年	五月	一三六百万円
	六月	一四一
	七月	一四〇
	八月	一四一
	九月	一三七
	十月	一四〇
	十一月	一三八
	十二月	一四九
明治二十八年	一月	一四二
	二月	一三七
	三月	一三五
	四月	一三二
	五月	一三二
	六月	一四三
	七月	一四三
	八月	一五三
	九月	一五六
	十月	一五八
	十一月	一六一
	十二月	一八二

而して、戰爭賠償金の收入に基く著大な貴金屬流入これに續いて起つた。其額は左の如し。

明治廿九年
三　月……一五七百万円
六　月……一七一
九　月……一七六
十　二　月……一九八
明治三十年
三　月……一八一
六　月……一九五

茲に日本の貨幣制度に於ける更らに一の新しい變化が起つたことを記して置かねばならぬ。當時の政府は、戰爭賠償金の全額を貴金屬の形で短期間に日本へ取り寄せることの不可能を看取し、一の新例を開いた。此の更新は曾に健全なる正貨準備の原則を裏切るのみならず、法律の明文と正面的に衝突するものである。其は何事であるかと云へば、政府は日本銀行に許すに、其の正貨準備の一部を『在外正貨』とすることを以てしたことこれである。政府は國內正貨保藏額が充分蔽ふに足りない程多額の銀行券を發行せしむる必要に迫られて居り、他方戰爭賠償金を短期間に銀を以て日本へ取寄せることの不可能に惱まされた。此の窮境を脫する一の便法として、此の新例は開かれたのである。

即ち歐羅巴に於ける日本政府の各種の債權は、何時にても正貨に引換えられ得べきものなりとの口實の下に『在外正貨』なる事實隱蔽的の榮稱を附與せられ、而して其れは日本銀行の庫中に現存する正貨と全然同一のものとして取扱はれ、これを準備として發行せられる兌換券は完全に正貨準備兌換券と看做さるゝに至つた。かくて政府は其要する兌換券增發の可能を確保するを得たのである。一度開かれた此の變革は後に至り幾多の弊害を醸生せしむべき禍根となつた。

上述した諸種の施設こそ、明治二十八年至同三十年好景氣時代の到來を促がしたのである

× × × × × ×

以上第一期から第三期までは、其最終の二ヶ年を除いては、日本の對外交通が、未だ甚だ幼稚であり、世界經濟への日本國民經濟の進出が、極めて僅かなものであつた時期に屬する。支那との平和克復の後に至つて、初めて適當の意味にていふ日本の經濟的對外交通は始まつたのである。

第四期　明治三十年より三十九年に至る

三億六千萬圓に達する戰爭賠償金は、未拂戰費の支辨に充つる以外に、主なる用途二つを得た。陸海軍の擴張と金本位制の實施これである。金本位制の實施は、來るべき時代殊に世界戰爭の時に方つて、日本に大なる幸福を齎らした。此の改革の價値はこれを過重視すること能はざるほど大なるものであつた。然るに不幸にも、これに伴つたものは、多くの不幸を產み出すべき一變革であつた。これは『償金預合法』と稱せられた償金目當ての金融的マニユピユレーションの一種である。これによつて、外國に於ける債權は任意に兌換券發行の基礎とされ得た。これに加へて、正貨準備を要せざる所謂制限外發行高の法定限度は八千五百萬圓から一億二千萬圓に引上げられた。更らに第三の事實として、我々は所謂『特種銀行』なるものゝ創始をあげ得る。特種銀行とは種々なる特權を附與せられた一種半官半民の抵當銀行の謂で、一の變態的なものであり、而して今日までの實驗に徵すれば、各種銀行中、最惡の經營振りを示すものである。

以上各般の事情綜合して、通貨の過增は、何時にても、容易にこれを實行し得べき作用を有するに至つた。

×　×　×　×　×　×

明治二十九年の好景氣に續いて同三十年には反動期が現れた。外國貿易は次の數字を示した。

	出超	貨物 入超	金銀 入超	金銀 出超
	百万円			
明治廿八年	六・八五一	—	—	二一・四二七
明治廿九年	—	五三・八三一	二七・五四三	—
明治卅年	—	五六・一六五	六二・二四七	—
明治卅一年	—	一一一・七四八	—	四四・四二三

日本銀行正貨準備高は明治二十九年十二月末に一億三千二百萬圓に上つたが、三十一年五月末には六千二百萬圓に減少した。それは銀行券發行額の僅か三分一强に過ぎなかつた。そこで『外資輸入』が行はれ、一億四千萬圓の外債募集が成立した。（三十二年五月）其れが明治三十二・三年の好景氣を喚起す因となつた。日本銀行の正貨準備高は三十二年八月には一億三百萬圓に、十一月末には一億一千百萬圓に上つた。即ち三十一年五月末に比すれば、約二倍に增加したのである。

正貨準備高增加に基く好景氣は、其の減少に伴つて衰へざるを得ぬ。三十三年十一月末には其額は六千五百萬圓に、三十四年四月末には僅か六千萬圓に減退し、紙幣發行額の三分の一以下に落つるに至つた。かくて、三十四年五月には復た恐慌が勃發し、其れにつづいて、沈滯期が來り日露戰爭の開始までに及んだ。

されば日露戰爭は、先きの日清戰爭とは反對に、深刻な沈滯の時代に於いて勃發したのである。此の戰爭が國內に著しき財政的又は經濟的困難を齎らさなかつたのは、一に外債が容易に募集し得られたによる。英吉利との同盟竝に金本位制度の確定の二者は、此募債を容易ならしめた原因である。

日本國民は、此の戰爭中陸海軍の指導者たちが偉勳を建てたことは、これを熟知する。財政上に於ける松方其他の先見ある財政家の功績に至つては、これを知るものむしろ稀である。

玆に一つの回顧を要する。日露戰爭は、ひとり、軍事上の大成功であつたのみでない、其れは、財政的にも光榮ある終局を告げたのである。乍去其れと同時に、日本の經濟發展の循環性は、これが爲めに、意想外に强められたのである。外債成立の前と後とに於ける日本銀行兌換券發行額は、實に次ぎの如く、明白に、此事實を物語る。

		銀行券	正貨準備
明治三十六年	十二月	二三三百万円	一一六百万円
同　三十七年	五　月	一九九	六八
——募　債——			
同　三十八年	八　月	二四〇	一一七
	五　月	二五九	一二七

之に續いて、明治三十九年には鐵道國有が行はれ、約五億圓の資本は民間企業に向つて解放された。これら相會して三十九年初めの好景氣を喚起した。

第五期　明治四十年より大正三年に至る

以下第五期、殊に第六期については、玆には、唯だ極めて簡單な叙述を與ふるに止めて置く。私は讀者に、前藏相であり又た前日銀總裁たる井上準之助氏の『戰後に於ける我が國の經濟及び金融』(東京大正十四年刊行)と謂ふ著書を薦める。之は周到に各種參考資料を引證して說明を與へた良書である。

此期は、明治四十年の反動に依つて始まり、大なる困難を以つて其幕を開いた。而して、再び救濟策として、保證準備發行限度を超えた銀行券發行が行はれた。其總額は、次の通りであつた。

		銀行券發行高	其内限外發行高
明治三十九年	九月	二七七百万円	一一百万円
	十一月	二九〇	二五
同　四十年	一月	三三六	五八
	三月	三一八	五三
	六月	三三二	六四
	九月	三三五	六二
	十二月	三六九	八八
同　四十一年	三月	三〇九	三九

恐慌は、四十一年上半期に其絶頂に達し、同年十一月以降には代つて沈滯期が現はれ、四十二年には、總額約二億圓の新しい外資輸入が外はれ、四十三年乃至大正元年の半好況を生じた。

然し一般の情勢は此時に至つて維持し得ない樣になつた。種々の機會に募集せられた外債は總計約二十億圓に達し、此の債務の利子支拂は當然正貨準備の激減を惹起さざるを得なかつた。加之、戰費賠償金拂込に次いだ過度の投機熱の結果として著しい貨物輸入超過が起づた。佛蘭西に於ける日本國庫債券の賣出しも大した助けとはならなかつた。此情態を更らにより惡くしたものは、打續く貨物輸入超過の結果、輸入手形市場の梗塞を來したことこれである。輸入手形を買入るゝ銀行なきに至るであらうとさへ考へられた。政府はこれを憂ひ、極力救濟策について考究したが、未だ何等の實行を見ざるに先つて、茲に救ひの手が現れた。それは即ち世界戰爭である。當時の日本に取つて世界戰爭は、眞に國家を窮境から引き上げた救主であつた。此戰爭起らざりしせば、日本の對外取引は凡て杜絶して了つたかも知れない。かくて大正三年は經濟的混沌の中に過ぎ去つた。

第六期　大正四年より拾四年に至る

大正四年の半以降、輸出超過の激増、從つて貴金屬流入の未曾有な增加が起つた。

	貨物出超	貴金屬入超（▲は負數）
大正四年	七〇八百万円	▲二〇・〇〇〇百万円
大正五年	一一二〇	七二・九五〇
大正六年	一六〇〇	二三八・四八八
大正七年	一九六九	四・〇七八

從つて銀行券發行高は激增した。

大正三年	三八五百万円
大正四年	四三〇
大正五年	六〇一
大正六年	八三一
大正七年	一一四四
大正八年	一五五五

此の變化に伴つて爲替市場に一の新なる難局が發生した。それは、世界戰爭勃發直前に起つた困難と正反對の性質のものであつた。卽ち輸出手形の流通杜絶であつて、爲替業務は再び大困難に陷り、政府は極力其の救濟策探求に專念したが、前の場合と同じく何等の名案を見出し得なかつた。此時突如として第二の救ひの手が現はれた。休戰これである。これなかりせば、日本の對外貿易は再び不可能に陷つたであらう。かくて大正八年には未曾有な好景氣時代に達し、九年春まで續き、そこで大破綻が生じた。其れ以來今日まで萬年不景氣時代を繼續して居る。

七　歸　結

以上私は、稍〻繁を厭はず、乾燥なる事實を列擧した。其れは日本の經濟生活と經濟政策とに特有なる循環的性質に關する私の主張を讀者の前に明瞭に指示し、其原因を指摘するに足りたことと思ふ。從つてこれ以上細微の點に立入つて論ずる必要はない。私は今此論文の筆を擱き得よう。

私は、資本主義經濟組織なるものに、循環性の避け得べからざるものであることを、決して拒否するものではない。其れは此の經濟組織の本質に免れざるところであつて、其故を以つても資本主義組織は、正當なる攻擊に晒さるゝことを辭し難いのである。

資本主義經濟の崩壞を目的とせず、此の經濟組織を原則として認むる限りは、經濟政策は、この循環の事實をも、十分に考慮の内に置かなければならない。乍去政策の任務は、この循環性を唯だ追從することに存してはならない、況んや其傾向を助長することをや。政策の目ざすべきところは、この循環性の意識的克服にある。現代經濟生活の循環性に關して、經濟學の學理が說き示すところ、國の經濟政策はこれを十分に商量し、循環運動に對抗すべき施設を爲す指針を建つるに努力せねばならぬ。日本の經濟政策は、この任務を全然度外視することが、如何に大なる不幸を國民の生活に與ふるかを示す絕好の適例であつた。個々の政策的施設については、或は稱すべきあり、或は貶すべきものがある、私は今之れらの細事について論じてゐるのではない。私は唯だ全體の傾向について語る。全體の傾向として、日本の政策は、循環性をして、全然無拘束の下に縱橫に活躍せしめた。其れが卽ち、今日我々が現に經驗しつゝある變態——諸文明國最大の物價騰貴を見つゝ大なる不景氣に襲はれてゐること、國内に從來見ざりし正貨の蓄積を保藏しつゝ外國爲替相場の著しく低落せること、兌換券の兌換を事實的に停止し居り乍ら金の輸出を禁止しつゝあること、一方に外資輸入を叫びつゝ、他方には高き關稅によつて貨物の輸入を困難ならしめてゐること、——（以上は何れも此文執筆の時についていふ。今日は此の情勢に多少の變化を見る、但し大體は變つて居らぬ。昭和四年八月註記）——を產み出した原因である。此の變態を示す諸々の事實は、これを其の一つ一つについて見れば、殆んど不可解であらう。乍去これを日本に特有なメルカンチリズム的謬想の派生物として見るとき、我々は十分にこれを理解し得るのである。個々の誤謬を指摘しこれを辯難攻擊することでなく、これらの誤謬を釀成した禍源に溯つて考察すること、これが我々の今急要とするところである。若しも私の此の一文にしてこの考察に一小石を投じ得たならば、私は其れを以て滿足するものである。

（一九二五年七月南ドイツ、キーム湖畔の客舍に於いて獨文起稿。其文未刊、今始めて本書附錄に收錄す。一九二六年二月巴里に於いて補訂佛譯。此文佛國經濟學雜誌（ジュルナル・デ・セコノミスト）一九二六年四月號に揭載。後其別刷を單行本として佛國巴里にて刊行す。一九二九年七—八月箱根强羅に於て、右二文について添削修訂の上邦譯を了し、今玆に收む。）

394

昭和五年二月二十日　印刷
昭和五年二月二十五日　發行

並製（上册）
定價貳圓五拾錢

厚生經濟研究

第一刷

著者　福田德三

發行者　東京市神田區駿河臺北甲賀町二十三番地　尾高豐作

印刷者　東京市牛込區榎町七　竹內喜太郎

日清印刷株式會社
片山製本所

發行所　東京市神田區駿河臺北甲賀町二十三番地　刀江書院
電話神田二一八九　二三一七　一一八一
振替東京七三一

29.96.1